月姫－幻夢の満月－

victor

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月姫－幻夢の満月－

【Ｎコード】

Ｎ３８４９Ｍ

【作者名】

ｖｉｃｔｏｒ

【あらすじ】

幼い頃に魔法使いに救われた少年は成長し白の吸血姫に出会う。

プロローグ（前書き）

月姫の再構成ものです。
未熟者です。
混沌なあのお方の後あたりまでアルクｏｒシエルルートとあまり変わらないですが、見ていただけると嬉しいです。

プロローグ

目を覚ました。
初めに見えたのは天井だった、ベッドに自分は寝ている、ここは病院みたいだ、でも何でこんなに――――

「はじめまして、遠野志貴君、私の言っている事が解るかな？」
知らないおじさんが話しかけてきた、白い服を着てるからきっとお医者さんなんだろう。

「はい、あの僕はなんで病院で寝てるんですか？」

「覚えて無いのかい？まあ無理も無い、君はね道を歩いている時に車の事故に巻き込まれたんだ、胸にガラスの破片刺さってねとても助かるような傷じゃなかったんだよ。」

そう言われても何も思い出せない。

「他に質問はあるかな？無ければ私は行くね。」

「あの、一つだけ良いですか？」

「なんだい？」

「どうしてそんなにラクガキだらけなんですか、ベッドも床も壁も、誰かのイタズラですか？」

とたんにお医者さんの顔が険しくなる。

「ラクガキ？そんなものは何処にも無いよ、目がさめたばかりで疲れているのかもしれない、今は休みなさい。」

そう言ってお医者さんは行ってしまった。
でも確かにラクガキの様な『線』が視える、そしてコレが何かは解らないけどコレを見ているとひどく気分が悪くなる。
そう重いつつもベッドの『線』に触れると指は抵抗も無く『線』に沈んでいく。
そしてなんとなく、本当になんとなくその『線』を近くにあったナイフでなぞるだけでベッドは簡単に。

――――――バラバラになってしまった

大人達は僕がどうやってモノを壊してるのか何度も聞いてきた、でも僕が本当の事を言っても誰も信じなかった。
その内この『線』が何なのか解ってきた、この僕にだけ視える『線』はきっとツギハギなんだ、だから少し刃物でなぞっただけでバラバラになってしまうんだと思う。

――――――知らなかった

いや、知るはずも無かった。

――――――セカイはこんなにもツギハギだらけで・・・とっても壊れやすいトコロだったなんて。

そう思ってしまった瞬間、壁が、天井が、床が、そして自信の体さえも崩るのを幻視してしまった。

「はぁはぁ」

見たモノは幻だとしてもこんなのは耐えられない。
みんなには見えない、だから平気だ。
でも僕は見えている、僕だけがツギハギだらけのセカイに生きている、こんな立っていることさえままならない脆いセカイで。

――――――それは、

――――――なんて、

――――――恐ろしい

気が付いたら病院の外に出ていた、この『線』が見えない場所を探して必死に走りまわった。
でも『線』は道路にも草木にもヒトにも、何にでもあって、それでも走り続けた。

町から離れた草原を走っていた時とうとう転んでしまった。
見上げるとそこには良く知っている『線』のない空があった。
やっと見つけたツギハギの無いモノ。

「もしも・・・この空にまでツギハギが見えるようになったら、僕は」

絶望が脳裏をよぎった時。

「君、そんな所に寝転がってると危ないわよ。」

とても明るい声が聞こえた。

「誰？」

思わず聞き返す。

「私？私はね・・・」

その女の人は答えた

――――――――――『魔法使い』と

プロローグ（後書き）

長編初めてなので更新が安定しないと思います。
あと感想とかもらえるとすごく嬉しいです。

変わる日常（前書き）

魔法使いの夜が楽しみでしかたありません、でもお金と時間が足りない、きっといくらあっても足りない・・・Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡは様子見かな。

変わる日常

八年前に俺――――遠野志貴は交通事故で瀕死の重傷を負い死にかけた。
そのせいか貧血を頻繁に起こすようになりそれを理由に勘当同然に親戚の有馬の家に預けられた。
だが先日平凡に暮らしてた自分に遠野家頭首から「今日までに遠野の屋敷に帰って来い」と言うお言葉が来た。
そして学校が終わったいま八年ぶりに我が家に帰るのだが。

「・・・秋葉のやつ、俺を恨んでいるいるんだろうな」

一つ年下の妹のことを考えると心が重くなる。

「どうしたよ遠野、引越しの準備でお疲れか？」

人の独り言に反応してきた悪友に思わずため息がでる。

「いや、荷物はほとんど無いから大して苦労はしてないよ」

オレンジの髪にピアス、進学校のうちの高校では珍しい所謂アウトローな男――――乾有彦、残念ながら昔からの腐れ縁で遠野志貴の数少ない友人である。

「えっ！？遠野君転校するの？」

驚いたように話に加わってきたのは弓塚さつき、いつもクラスの中心にいる栗色の髪をしたクラスのアイドル的存在である。

「ああ、違う違う、住所が変わるだけで学校はかわらないよ、引越し先もこの町だし」

「そう――――よかった」

何故か安心したように弓塚は胸を撫で下ろす。

「で、じゃあ何でそんな暗いんだよ？」

「妹が俺を恨んでいるんだろうなって思ってな」

苦笑しながらも悩みを言う、こういうのは聞いてもらうだけで幾分か楽になるものだ。

「何だと！？妹がいたのか！？可愛かったら紹介しろ！！」

・・・前言撤回、相手にもよるようだ。

「お前にだけは何があっても紹介しないよ」

「え、えーと、何で妹さんが恨んでると思うの？」

そうそう、こういう反応をこちらとしては期待しているのだ。

「あんな広い屋敷にあの頭の固い親父と一緒に一人ぼっちにしちゃって俺は一人で有馬の家で自由に暮らしてたからな、恨まれて当然だろ」

「それは仕方ないだろ、お前確か追い出されるみたいに有馬の家に預けられたんだろ？」

「そうだけど一人にしたのは事実だろ？」

「真面目だなぁ、じゃあどうすんだ？」

「今からでもちゃんと兄貴をやるしかないだろ」

そう。これは答えの出ていた問題、口にしたのもあくまで確認に過ぎない。

「ところで遠野君が引っ越すのってあの丘の上のお屋敷？」

「うん、そうだよ」

弓塚が知っているのも不思議では無い、三咲町に住んでいる人ならば『遠野』、『屋敷』というワードで大抵は丘の上にある大きな屋敷を連想するだろう。

それ程までにあの屋敷の存在感は大きい。

「そっか・・・あのね、私の家もねそっ「さつき！先生が呼んでるよ！！」」

何かを言いかけていた弓塚はブツブツと何かを言いながらそのままと行ってしまった。

有彦はニヤニヤと嫌な笑顔でこちらを見ている。

「なんだよ？」

「別に、まぁ運が無かったと思え」

よく意味が分からなかったがなんかイラっときた。

いつもと違う帰り道を進む中、屋敷のいた頃の事を思い出す。
記憶に靄がかかったように細部が思い出せないが、大切な思い出だ。
秋葉を連れ出して遊んだ記憶、屈託無い笑顔で自分を遊びに誘ってくれた女の子、そしてたった一度しか話さなかったが大切な約束をしたもう一人の女の子。
鞄の中から白いリボンを取り出す。

「貸してあげるから、返してね」

そう言っていつも悲しそうに窓から外を見ていた彼女が自分が遠野

の屋敷を勘当された日の屋敷を出る直前に彼女はこのリボンを渡してくれた。

「八年か・・・」

あの女の子の名前も分からなければ、まだ屋敷にいるかも分からない。
たった一度しか話さなかったが、その一度に遠野志貴は間違いなく救われた。

「・・・それでも、このリボンは大切な物なんだよな・・・」

覚えている限りは約束は守りたい。
屋敷に帰る事を承諾したのは秋葉に責任を全て押し付けてしまった償いをしたいのもある。
だが、それとは別にただ一人「待っている」と言ってくれた人との約束のためであるのも事実だ。

「で・・・でかい」

自宅になる屋敷に到着して最初に口から出たのはこんな言葉だった。
一般的な暮らしに慣れた自分にとって、久々に見る遠野の屋敷は軽く現実離れしている。

「・・・入るか」

門は開いているので押し開けて入り玄関まで進む。
緊張しながら呼び鈴を鳴らすと奥で人の足音が聞こえてくる。

「お待ちしておりました」

扉が開くとそこには微かに記憶に残るロビーと割烹着の女性がいた。

「よかった、あんまりにも遅いから道に迷っているのかなって心配しちゃってたんですよ？日が落ちてもいらっしゃらなかったらお迎えに行こうかと思っていたんですから」

「あ・・いや・・それは、その。」

割烹着なんていうあまりにも時代錯誤な格好に軽いパニックになっていると、不審に思ったのか。

「志貴様・・・ですよね？」

「あ・・・ああ、様ってのは余計だけど」

「ですよね？もう、脅かさないで下さいっ。わたしまた間違えちゃったかなって、恐くなっちゃったじゃないですか。」

あはは、と気さくな笑いをこぼす少女、『また』ということは既に一度誰かと間違えているのだろうか。

そして、その笑顔を見て思う。

確証なんて無い、けどぴたりとイメージが重なる。

「えと・・・久しぶり、俺の事覚えてる？」

恐る恐る聞いてみると少女は、一度驚いたような顔をした後に本当に嬉しそうな満面の笑みを浮かべて。

「さ、お疲れでしょう？遠慮せずにあがってくださいな。居間で秋葉様もお待ちになってらっしゃいますから」

明確な答えを提示しないまま入るように促した。

少女は先に居間に向かおうとして、思い出したようにお辞儀をしてから。

「お帰りなさい志貴様。どうぞ、今日からよろしくお願いします」

と言ってくれた。

その言葉がただただ嬉しかった。

居間は覚えてないのか内装でも変えたのか、初めて見るような気がして落ち着かない。
辺りを見回してると。

「志貴様をおつれしました」

「ご苦労様。厨房に戻って良いわよ、琥珀」

「はい」

どうやら割烹着の少女はコハク、という名前らしい。

琥珀さんはこちらにお辞儀をすると居間から出て行った。

「お久しぶりですね、兄さん」

居間にいた黒髪の少女が話しかけてくる。
自分を兄と呼ぶからにはこの少女は秋葉だろう。
しかしこの瞬間、本日最大のパニックを起こす。
何せ秋葉はこちらの記憶と違って何処からどう見ても良家のお嬢様なのだから。

「兄さん？」

少女は首をかしげている。

――――本当に秋葉か？

思わずそんな事を考えてしまう。
それほどまでに、根の前の少女は記憶の中の秋葉とは違っていた。

「なにか気分が悪そうですね。お話の前にお休みになりますか？」

なんだか不機嫌そうにこちらを睨んでくる。

「いや、気分は悪く無い。ただあまりにも秋葉が変わってたんでビックリしただけだ」

「八年も経てば変わります。ただでさえ私たちは成長期だったんですから。・・・それとも兄さんは以前のままだと思っていたのですか？」

・・・なんだろう秋葉の言葉に棘を感じる。

「いや、それにしても秋葉は変わったよ、昔より格段に美人になった」

素直な感想をもらす、なのに秋葉は。

「ええ。ですが兄さんは昔とあまり変わりませんね」

「・・・・・・・・・・・」

予想はしていた。
覚悟はしていた。
秋葉が俺の事を良く思っていないと。
だがこれは思った以上にキツイ。

「体調が良いなら話をしましょうか」

「・・・ああ」

これ以上の追撃が来ない事を祈るしかないようだ。

「兄さん。詳しい事情は知らないのでしょう？」

「詳しいも何も、突然屋敷に帰って来いてことしか聞いて無い。親父が亡くなったていうのは新聞で知ったけど」

俺の親父――――――遠野槙久は一企業のトップで、そんな人物が亡くなれば新聞に記事くらいは載る。
俺は父親の死を葬式が終わった後に新聞で知った。

「・・・申し訳ありません。お父様の事を兄さんに報せなかったの

はこちらの失策です」

そう言って秋葉は頭を下げた。

「いいよ。こっちも勘当された身だ、秋葉が気にする事じゃない」

「・・・・ごめんなさい。そう言ってもらえると少し気が楽になるわ」

秋葉は申し訳無さそうな顔をするがそんな事はどうでも良かった。実際、親父の死を知った時ほとんど何も感じなかったものだ。

「兄さんをこちらに呼んだのは私の意向です。お父様が何を思って兄さんを有馬の家に預けたのかしりません。ですがそのお父様も既に他界なさっているので兄さんがこれ以上有馬の家にいる必要も無いと思ったのでこちらに戻ってもらう事にしたんです」

「まぁいいけど、よく親戚の連中が納得したな。俺を有馬の家に預けろっていいだしたのって親戚の人じゃ無かったっけ？」

「今の遠野の頭首は私です。親戚の方々の進言は全て却下しました」

・・・逞しくなったな秋葉

「兄さんにはこれからここで暮らしてもらいたいのですけど、ここにはここの規律があります。今までのような無作法は避けていただきますのでそのつもりで」

「ははは、そりゃあ無理だよ秋葉。今更俺がお行儀良い人間になれる訳もないし、なる気もないよ」

「出来る範囲でいいので努力してください、それとも私に出来た事が兄さんには出来ないと言うのですか？」

うん、そして厳しくなった。

「・・・オーケー、努力してみる」

こちらを睨んでくる、これは信用してないな。

「努力する必要はありません。結果さえ出してもらえればそれで結構です」

成る程、さらに容赦までなくなったか。

それにさっきと言ってる事が違うぞ。

・・・怖いから突っ込まないけど。

「話を戻しますね。現在遠野の家には私たちしか住んでいません。わずらわしいので人払いをしました」

「えっ！人払いって、お前頭首になったばかりでそんなことしたら親戚連中がうるさいんじゃないのか！？」

「わたしは子供の頃からあの人達が大っ嫌いでした。だからこれ以上あの人達の小言を聞くのは御免です」

「ゴメンですって・・・」

だからっていいのだろうか。

「ああもう。私の事より兄さんはご自分の心配をしてください。大変になるのは目に見えてるんですから」

なんかさらに不機嫌そうに言って俺から目を逸らした。
まあ、確かに大変になりそうだけどなんでこんなに不機嫌なんだろう。

「それじゃあ、分からない事があったらこの子に言いつけて」

そう言って傍らに立っていた少女に目配せをすると少女は無表情でお辞儀をした。

「この子は翡翠、これから兄さん付きの侍女にしますけどいいですね？」

――――――――――え？

「ちょっ、侍女ってつまり・・・」

「分かり易く言うと召使ということです」

秋葉は当たり前のようにトンデモナイ事を言った。

「とにかく。屋敷に戻った以上は私の支持に従ってもらいます、有馬のいえではどうだったか知りませんが兄さんは遠野の家で暮らすんです。それ相応の待遇は当然と受け入れてください」

何も言い返せない。
言ってる事は分かるがこれはあまりにもなんというか・・・。

「それじゃあ翡翠、兄さんを部屋に案内して」

「はい、お嬢様」

混乱してるこちらを尻目に話は一方的にまとめられた。
翡翠は無表情のまま答えてこちらに歩いてくる。

「それではご案内します、志貴様」

はあ、諦めるしかなさそうだ。

「こちらが志貴様の部屋です」

「え・・・ここ？」

案内された部屋を見て思わず聞き返してしまう。

「はいご不満があるなら別の部屋をご用意しますが？」

「いや、不満はないけど――――」

あるとすればちょっと立派過ぎる事くらいだが。

「志貴様？」

驚きが顔に出ていたようだ。

翡翠が何かあったのではないかと心配そうにこちらを見ている。

「いや、何でもないよ」

「かしこまりました。お部屋は八年前から手を加えていませんので不具合は無いと思います」

翡翠が言った事が何か引っかかる。

「あれ？もしかしてここって俺の部屋だった？」

「そう伺ってますが違うのですか？」

翡翠が不安そうに聞いてきた。

人形みたいに見えたこの子にもよく見ると細かい表情の変化があるみたいだ。

「まぁ八年も経てば違和感があるのも当然か。けどやっぱり落ち着かないな、急に高級ホテルに泊まりにきたみたいだ」

「気持ちは分かりますがどうかお慣れください、志貴様は今日から遠野家のご長男なのですから」

そうだ、今日から自分は『遠野家の長男』に戻ったのだ。
少しは立派にならなくてはならない。

「志貴様のお荷物は全て運びましたが、何か足りない物はありませんか？」

「無いけど、どうしてそんな事を聞くの？」

「・・・いえ、志貴様の荷物があまりにも少なかったので。必要な物ががありましたらお知らせください」

なるほど、確かに疑問に思われてもしかたない。

「元々荷物が少ないんだ、持ち物といえばこの鞄と眼鏡と・・・・」

学校の物と・・・大切な約束のリボン。
そうだ、聞かなくちゃいけない事がある。

「翡翠、ちょっと聞いていい？」

「はい」

「間違ってたらゴメン。翡翠と琥珀さんって姉妹だよね」

その瞬間翡翠の顔に驚きが混じる。

「はい。確かに琥珀は私の姉です」

そうか、やっぱりあの女の子達は翡翠と琥珀だったんだ。

自然と嬉しい気持ちが湧き上がってくる、これで約束を守れる。

「なあ、翡翠・・・」

――――――――このリボン返すよ

そう言おうとして言葉が詰まる。

本当にこのリボンの約束をしたのは翡翠なのだろうか？

普通に考えるとよく遊んでいた明るい女の子が琥珀さんで窓辺の女の子が翡翠だと思う。

だけどそれは八年も昔の事だ、人が変わるには十分過ぎる。

何よりもあの大切な約束の相手を間違えるなんて事をしてはいけない。

「どうかしましたか、志貴様？」

続きを言わない俺を心配そうに見ながら翡翠が聞いてくる。

「・・・・・・翡翠は八年前に俺が有馬の家に行く時の事を覚えてる？」

「はい」

「その時俺たち何か話したっけ？」

「・・・少なくとも私の方にその様な記憶はありません。」

「そっか・・・ならいいんだ」

本当に約束してないのかもしれないしただ忘れているのかもしれな

い、何せ八年だ。
でも今それを判断するには情報が少なすぎる、今は保留しておくべきだ。

「そうですか・・・志貴様、他にご用件はありますか？」

「そうだな・・・堅苦しいから俺の事は呼び捨てでいいよ、琥珀さんにもそう伝えておいてくれないかな？」

「かしこまりました、志貴さま。それでは一時間後にお呼びいたしますので、それまでおくつろぎください」

・・・・・・多分だけど当分は呼び方を直してはくれないんだろうな。

「分かった、夕食まで部屋にいるから、時間になったら呼びにきてくれ」

翡翠ははいと返事をして出て行った。
食事の時、秋葉の一挙一動に冷や冷やしっぱなしの非常にスリリングな食事になったのは言うまでも無い。

変わる日常（後書き）

白い姫君もカレー先輩も次まで出番がありません。

殺人衝動（前書き）

日本のこの暑さに一生慣れる気がしない。あとキャス狐が想像以上に可愛かった。

殺人衝動

「おはようございます」

誰かの声がする。

「朝です、お目覚めください。志貴様」

・・・そうか。

自分の家に帰ってきたんだった。

「・・・ん」

「おはようございます、志貴様」

目の前に翡翠が立っていた。

「わざわざ起こしてくれてありがとう、翡翠」

「その様なお言葉は必要ありません。志貴様を起こすのは私の責務ですから」

無表情のまま翡翠は返答する。

「・・・・」

翡翠は微動だにせずこちらを見ている。

おそらく俺がちゃんと起きるまでそうしているつもりなのだろう。

「分かった・・・今起きるよ。翡翠、今何時か分かる？」

「はい、朝の七時を過ぎた頃です」

「それなら少しは余裕があるかな」

そう言って伸びをする。

「お言葉ですが、あまり時間はありません。このお屋敷から志貴様の学校まで三十分程かかりますので、あと二十分程で朝食を召し上がっていただかないと」

「・・・しまった、ここは有馬の家じゃなかったんだ」

「制服はそちらにたたんでありますので、お着替えが済みしだい居間にきてください」

「分かった」

もっと早く起こしてくれても良かったのに、などと自分勝手な事を考えながら急いで着替える。

制服はアイロンがかけてあった。

どうも慣れないな、こういうの。

居間では秋葉と琥珀さんが優雅に紅茶を飲んでいた。

「おはよう、二人とも」

「おはようございます、志貴さん」

これ以上ないという笑顔で返してくれた琥珀さんに対して

「おはようございます。朝はずいぶんゆっくりなんですね、兄さん」

朝一で最高に気の利いた嫌味を返してくれた秋葉。

「まだ七時を過ぎたばかりだろここから学校まで三十分くらいなんだ、今朝は早い方だよ」

「つまり朝食にかける時間は十分ですか。お腹を空かせた犬じゃないんですから、朝食はゆっくりとってください」

・・・なんだろう、たった一日で一生秋葉に口で勝てないと思えてきた。

「秋葉様、時間の方がそろそろ」

「分かっています。もう初日からこれじゃあ先が思いやられます」

文句を言いながら秋葉は立ち上がる。

「それでは私は先に失礼します。兄さんもお気をつけて勉学に励んでください」

・・・やっぱり八年も親父の所で躾けられただけあって、言い回しとかが細かい所で古臭いと言うか礼儀正しいと言うか。

「まぁ、言われなくても学校には行くけどさ」

「それじゃあ。また後で」

去り際の秋葉の笑顔は、昔の秋葉の笑顔にそっくりだった。

朝食を食べた後ロビーに行くと鞄を持って翡翠が待っていた。

「志貴様、お時間はよろしいのですか？」

「ああ、まだ七時半だろ？寄り道しても間に合うよ」

こっちの説明に満足したのか翡翠はと頷く。

「それでは外までお見送りします」

「え、あ、うん、ありがとう」

やっぱり自分付きの使用人というのは照れくさい。

「あ、志貴さん待ってください」

琥珀さんが二階から降りてくる

「琥珀さんどうしたの？」

「志貴さんにお届け物があるんです」

「届け物？俺に？」

「はい、昨日有馬の家から届いたんです」

ニッコリと琥珀さんは笑顔を浮かべる。

「おかしいな、俺の荷物は全部持って来たはずなのに」

「そうなんですか？こちらが届けられた荷物なんですけど」

そう言って琥珀さんは二十センチくらいの見たことの無い木箱を渡してきた。

「――――琥珀さん、俺はこんなの見た事無いんだけど」

「はぁ、なんでも志貴さんのお父様の遺品だそうですけど。志貴さんに譲るように遺言があったとか」

「親父が俺に？」

それこそ変だ。

屋敷から追い出した張本人が俺に形見だなんて。

「まぁいいや、琥珀さん。これ部屋において・・・・」

じーーーーーーー

そんな効果音が聞こえてきそうなくらい琥珀さんは木箱を見ている。

「・・・分かりました。中身が気になるんですね、琥珀さんは」

「いえ、そんなことありませんよ。」

変わらない笑顔のまま琥珀さんは応える。

・・・よく言うよ。

「はあ、なら開けてみましょう」

スッ、と乾いた音を立てて箱は開いた。

中には十センチ程の細い鉄の棒が入っていた。

「・・・鉄の・・・・棒？」

普通こんな物を形見分けするだろうか。

親父によっぽど嫌われてたんだな、俺。

「違いますよ、これナイフですよ」

琥珀さんが箱から鉄の棒を取り出す。

「ほら、飛び出しナイフってあるじゃないですか。あれと同じみたいです。せーの、はいっ」

パチン、と音がして十センチ程の刃が飛び出す。

・・・なるほど、確かにこれはナイフだ。

「ずいぶんと古い物みたいですけど、作りはしっかりしてますよ。あ、裏に年号が書かれてます」

刃をしまってから琥珀さんは渡してくる。

確かに握りの下の方に『七』と『夜』という字が刻まれてる。

「姉さん、これは年号じゃないわ。七ツ夜って書かれてるだけよ」

「っ！」

びっくりして後ろを振り返る。

今まで黙っていた翡翠がいつの間にか後ろからナイフを覗き込んでいた。

「び、びっくりしたあ・・・翡翠、人が悪いぞ。そんな後ろから覗かなくても見たかったらちゃんと見せてあげるのに」

「――――あ」

とたんに翡翠の顔が微かに赤くなる。

「し、失礼しました。あの・・・その短刀があまりにもキレイだったからつい」

「キレイ？これ、キレイと言うよりはオンボロって感じだけど」

「そんな事はありません。見事な刃文をした、由緒正しい古刀だと思います」

「そうなの？」

こっちとしてはガラクタにしか見えないけど翡翠がそんなに強く言うからそんな気がしてきた。

それにしても。

「七ツ夜・・・か」

何故か分からないがどこかしっくりくる響きだった。

――――――まるでよく知っているみたいに。

「志貴様、お時間はよろしいのですか？」

「あ、まずい。そろそろ行かないと。それじゃ琥珀さん、届け物ありがとうね」

短刀をポケットにしまい外に向かう。

翡翠は無言で門の外まで後ろについてきた。

「志貴様、お帰りは何時頃になりますか？」

どうも『様』に関しては時間がかかりそうだ。

「えーと、多分四時ごろには帰ってこれるよ」

部活もしていないしこんなものだろう。

「分かりました。では行ってらっしゃいませ」

翡翠はお辞儀をして見送ってくれる。

「ありがとう。じゃあ行ってくる」

そう言って屋敷の門を後にした。

翡翠と琥珀との会話が長引いたことで学校には結構遅刻ギリギリで着いた。
チャイムが鳴る中下駄箱に向かおうとするとコーーーン、コーーーンと何かを叩くような音が聞こえてきた。
音のする方を見ると一人の女生徒が壊れた添え木の修理をしている、リボンの色は三年のものだ。

もうすぐホームルームだって気付いてないのか？

「あの、もうすぐホームルームですよ」

話かけるとその女生徒はこちらに初めて気付いたらしくキョトンとしばらくこちらを見た後に笑顔で応えてきた。

「わざわざ教えてくれてありがとうございます。けど、どうしても添え木が壊れてるのが気になっちゃって」

だからって自分で直すだろうか、普通。

「だったら事務の人にでも頼んだらどうです？」

「そうなんですけど、私の教室あそこでしかも窓際なんですよ」

ぴっ、と先輩は中庭に面した二階の教室を指差す。

「このままじゃ授業中にこれが気になって授業どころじゃないと思って、気付いたら事務のおじさんに工具を借りてました」

そう言って先輩はまた素人目で見ても慣れていない手つきで作業を再開する、このままではかなりの時間がかかるだろう。

さらに一限目の予鈴が鳴った。
どうせ遅刻確定なのだしこのまま放っておくのも気が引ける。
仕方ないな。
「手伝いますよ」
そう言って隣に座り手伝い始める。

添え木の修理が一通り終わりあと一つとなった。
一つだけなら先輩に任せても問題ないだろう。
「それじゃあ俺はこれで」
そう言って立ち上がる。

すると眼鏡の先輩もこちらを向いて立ち上がった。

「はい。ありがとうございました、遠野君」

・・・・・・あれ？

「先輩何で俺の名前知ってるんですか？」

先輩は、ええっ！と驚いた後にちょっといじけたように顔を曇らせた。

「遠野君、私の事憶えてないんですか？」

これだけの美人だ、一度でも見たなら憶えてると思うのだが・・・

などと思っていると先輩が下から覗き込んでくる。

その目を見ていると頭に靄がかかるような感覚になる。

「すみません。憶えてないみたいですシエル先輩・・・あれ？」

「もう、憶えてるじゃないですか。驚かさないでください」

どうやら本当にこの人はシエルというらしい。

「それではまた会いましょう遠野くん」

「・・・はい」

どこか腑に落ちない物を抱えながら教室に向かう事にした。

一限目を全部すっぽかしたのは寝坊したと適当に言い訳をした。
日ごろから遅刻がないためか引越し直後だから仕方ないと思われたか分からないが、特にお咎めは無かった。
その後は普通に授業を受けたが殆ど頭に入らなかった。

シエル先輩と俺は何処で会ったんだろう？確かに記憶にある、でもいつ、何処でどうやって会ったかが全く思い出せない。

不意に教師が俺の名前を呼び黒板の問題を解くように指示した。
前に出るために立ち上がると急に慣れ親しんだ浮遊感が襲ってきて抗う事も出来ずに倒れる。
周りの生徒が微かに騒いでいるのが分かる。

「おい。遠野大丈夫か？」

「はい。なんとか」

そう言って立ち上がろうとするが上手くいかず、有彦に支えられる。

「あー。全然ダメみたいです。こりゃあ早退させた方が良いんじゃないっっすか？」

有彦は大声でとんでもない事を言っている。

「乾が言うならそうなんだろう、無理をするな。今日はもう早退していいから休みなさい」

有彦の言う事を信じた教師は早退を促してきた。
確かに久しぶりにかなりキツイ貧血だ、大事をとって帰るべきかもしれない。

「すみません、そうさせてもらいます。悪い有彦、心配かけた」

「気にするな。中学からの腐れ縁だしな」

目で礼をして教室を後にした。

帰宅する道中、また立ちくらみがきた。

「やっぱり少し保健室で休んどくべきだったか」

支えを求めて公園のベンチに腰掛ける。

少し楽になるまでこうしていよう、そう思っていた。

――――――その女を、見てしまうまでは。

何気なく。

本当に何気なく、人ごみに視線を投げかけただけだったのに、視界が凍った。

――――――ドクン。

金の髪。

赤い瞳。

白い服装。

――――――ドクン。

脈が跳ね上がる。

頭の中は一瞬でパニックになった。

――――――ドクン。

人ごみの中で歩いている女性は、それだけでただ美しかった。

――――――ドクン。

息が出来ない。

――――――ドクン。

心臓が急いで、早く早くと命令してくる。

「あ――――――あ」

耐え切れなくて、喉から声を漏らした。

考えられない。

ある一つの単語しか、俺の脳味噌は生み出してくれない。

――――――ドクン。

そうして、繰り返される言葉はただ一つ。

彼女を。

あの女を。

俺は、このまま――――――――――――。

「ぜー、ぜー、うぇっ」

吐き気がする。

呼吸が出来ない。

息が苦しい。

正しい息の仕方をどうしても思い出せない。

「ヒュー、ヒュー、ヒュー」

喉がアツイ。
体中が汗だくだ。
体中が寒いのに、血だけは沸騰するように熱い。

「はあ――――はあ――――はあ――――」

・・・追わないと。
あの女を追わないと。
凍った足を動かして、白い女を追いかけた。

「はあ――――はあ――――はあ――――」

女はゆっくりと歩いている。
尾行しているこっちには気が付いてない。

「は――――あ」

ここからなら走れば話しかけれる。
話しかけて、名前を聞こう。

「は――――、はは」

名前を聞く？
冗談じゃない、俺はそんな事がしたいんじゃないって、自分でよく分かってる。

「――――――――」

ノドがアツイ。

さっきから全然イキがデキナイ。

――――あれだけの女、興奮しない方が失礼ってもんじゃないか。

そしてやるべきコトも一つしかない。

ポケット手を入れると、指先には鉄の感触。

――――なんて幸運、その為の道具まである。

女がマンションに入っていく。

中にはまだ入らず、外から様子をみる。

女はエレベーターに乗り六階へ上った。

後を追うようにエレベーターに乗り六階のボタンを押した。

――――もうすぐあの女を　　出来る。

そう考えるだけで絶頂を迎えるような気分になる。

早く――――――――早くヤリタイ。

六階に着くと女が部屋に入るのが見えた。

メガネは邪魔だ。

こんなモノをしていては出来る事も出来やしない。

「――――約束よ、志貴。決して、軽はずみな気持ちでモノを視ちゃだめだからね」

「・・・・・・」

遠い昔にそう言ってくれた人がいた。

――――でも、今は名前も顔も思い出せない。
だからゆっくりメガネを外した。
ワカラナイ。
自分でもワカラナイ。
遠野志貴はさっきの女をどうしたいのか。
ワラナイママチャイムヲオシタ
「はい――――」
扉越しに声がして、扉が微かに開く。
瞬間、その隙間から部屋の中に滑り込んだ。
「え？」
何故コンナコトヲシテイルノカ分カラナイ。
ワカラナイママニ。
俺は彼女を十七個の肉片に解体していた。

殺人衝動（後書き）

ここまでメインヒロインの扱いが酷い話は月姫くらいじゃないかな？

後悔と救い（前書き）

暑くて長時間ＰＣの前に座ってられない・・・エアコンが欲しい。

後悔と救い

「え？」

それが自分の声だということに実感が湧かなかった。
足元にはバラバラに散らばった女の体と、バケツをひっくり返したように真っ赤な血溜り。
くらり、と眩暈がする。

「死ん・・・でる」

当たり前だ、これで生きていたら人間じゃない。

「なん・・・で？」

何でも何もない。
たった今、遠野志貴の手でこの知らない女の体にある計十七個の黒い『線』――――首、後頭部、右目から唇まで、右腕上腕、右腕下部、右手薬指、左腕肘、左手親指、中指、左乳房、肋骨部分から心臓まで、胃部よりまで腹部まで同二箇所、左足股、左足腿、左足脛、左足指その全て。――――をあっさりと、一瞬で切断し、バラバラにしてしまったんじゃないか。

「俺が・・・殺した？」

――――何で？

自分にはそんな事をする理由が無い。
だから違う、違うはずだ。

だけど理由なんて初めから無かった。
だから違う、違うはずだ。
――――何が？
自分が殺したといコト違うのか。
それとも自分が殺してないというコトが違うのか。
「違う、違う違う違う違う違う！」
――――イヤ、チガワナイダロウ？
ナニかが頭の中で言った。
――――オマエハ、サッキマデナニヲカンガエテイタ？
・・・その通りだ、何も違わない。
「俺は」
遠野志貴は、あの女を、殺したい、と。
それがあの時、彼女を見た時の全てだった。
「違・・・あ、あああ！！」
誰かに見られる、とか死体の処理とかそんな事を一切考えられない。
ただここから逃げるため、半狂乱になりながら駆け出した。

雨が降っている中、シエルは公園の中を自宅に帰るために歩いていた。

今夜も『仕事』をしなくてはならないのでこの雨の中行うと思うと憂鬱になる。
公園を通りもうすぐ家に着くという所で、雨の中傘もささずに座り込む人影を見つけた。
そして私はその人影が誰かを知っている。

「遠野君？」

遠野志貴、現在最も『蛇』の可能性が高い存在だ。
手持ちに武器はない、だが彼が『蛇』かどうか確かめる為にも話しかける方が良いかもしれない。

「どうしたんですか？こんな雨の中座り込んじゃって」

「あ、め？」

まるで雨という単語の意味が分からないような虚ろな表情をして彼は答えた。

今初めて雨に気付いたのだろうか、空を見上げて小さく、それこそ幻聴と間違えるようなあ、という声を上げた。

「もう、傘もささないで。そのままじゃ風邪ひいちゃいますよ」

今度は虚空を見つめたまま答えない。

「遠野君私の声、聞こえてます？」

「ん、ああ、そうだね。風邪くらい、ひいてみても、悪くないかな」

「だめですよ。いくら十月でもこんな雨の中じゃ風邪じゃすまな――――」

言いながら彼の体に触れて驚く。

彼の体は死人のそれのように冷え切っていた。

「遠野君、いったいいつからこうしていたんですか！？体がこんなに冷えてるじゃないですか！」

腕をつかんで強引に立たせる。

「私の傘を貸してあげますから、早く家に帰って体を温めてください。でないと本当に命にかかわります」

「・・・家には、帰れない。何処にも行けない」

何か事情があるみたいだ。
だがこのままでは確実に命に関る。

「分かりました。それじゃあ私の部屋に行きましょう。遠野君の家より近いですから、ちょうどいいです」

遠野君の腕を引っ張って家に連れて行く。
彼は人形のように抵抗しなかった。

どうかしている。
私の目的は『蛇』を消滅させる事だけだ。

「はい、これで体を拭いてください」

だと言うのに、私はその可能性が最も高い者を家に招いている。

「すみません。遠野君に合う大きさの服が無いみたいです。暫くそのままで我慢してください、今暖かい飲み物を淹れますから」

それどころかその相手に気を使い、その相手のために飲み物を出そうとしている。

「はい。おまたせしま――――――って遠野君！早くからだを拭かないとダメじゃないですか」

彼は部屋に入って来た時と同じ姿勢のままだった。

有無を言わさず彼からタオルを奪い取り、体を拭く。

自分の行動が理解出来ない。

怨敵かもしれない相手の世話をするなんてとても正気の沙汰とは思えない。

何よりも、それがむしろ心地良いのが理解不能だ

「ほらシャツもビショビショなんですから、早く脱がないと肺炎になっちゃいます」

そう言ってシャツを脱がそうとする。

と、そこでそれを見た。

胸に刻まれた禍々しいと形容するに相応しい傷跡。

その傷は一目見ただけで命に係わる出来事があったと訴えかけてくる。

「・・・あの、その」

思わず手が止まってしまう。

「・・・これ、もう塞がってる傷、ですよね？」

分かりきっている。

これが開いていたら床には血の海が広がっているだろう。

「ああ、大丈夫です。もう八年も前のものですから」

「そうですか・・・よかった、遠野君がおかしい原因がこの傷だったら、すぐに病院に連れていかなくちゃいけませんからね」

つい適当な言い訳をして笑顔を作る。

この人はこの傷を負うほどの目にあって普通に暮らしていたのだろうか。

「いいです。自分で出来ますから、ほっといてください」

さすがに恥ずかしいのか、こっちからタオルを取る。

いくらか表情に生気が戻ってきた、この分なら任せても大丈夫だろう。

「それじゃあ、お茶を持って来ます。あ、シャツを脱いだらそこの毛布を上着代わりにするんですよ」

言われたとおりに遠野君はシャツを脱ぎ毛布を羽織る。

「終わりました？それじゃ、お茶にしましょう」

お互い何も言わずに紅茶を口にする。

沈黙が支配するこの空間はどちらかと言えば心地良かった。

「私、少し出かけますね。お留守番たのめますか？」

しばらくしてから突然先輩はそう告げた。

「え・・・うん、いいですけど」

「すぐに戻ってきますから、あまり変なことしちゃダメですよ？」

どこまで本気なのか笑顔でそんな事を言って、先輩は出て行った。

一人になって気付いた。
今まで落ち着けたのは誰かが傍にいてくれたからであると。
再び不安や後悔やヨクワカラナイモノが込み上げてくる。
早く帰って来て欲しい。
自分にそんな事を望む資格もないと分かっているのに、願わずにはいられなかった。

「ただいま。お留守番ご苦労様です、遠野君」

「あ・・・先、輩」

そんなに時間は経っていないはずだが、帰ってきた私を見た遠野君の表情は初めて留守番をさせられた子供のようだった。

「はい、これに着替えてください。安物ですが濡れた服よりかはマシなはずです。あ、そろそろお風呂も沸く頃ですね、先に入っちゃってください」

彼のために買ってきた物を渡す。

不思議と彼は『蛇』でないと、根拠も無いまま私は思い始めている。

「・・・先輩。いいよ、俺家に帰るから。これ以上迷惑はかけられない」

いまさらと言うか、ここまでやってから彼は帰ると言い出してきた。

「何を言ってるんですか。帰れないって言ったのは遠野君ですよ？もう二人分の食料も買ったんですからちゃんと責任とってください」

「責任って」

「それにそんな顔したまま帰られた私が気になって眠れません」

それは事実。

でも気になるのは彼自身の事だけではない。

「何で、何で俺なんかにそこまでしてくれるんですか？俺にはそんな資格ないのに」

何やら的外れの事を彼は主張している。

「俺は・・・ダメなんです、大変な間違いを犯したのに。その責任も取らないで逃げてきたんです。俺が犯した罪は許されるべきじゃないんだ。いや、許されちゃいけないんだ。だから、俺に先輩に優しくしてもらう資格なんてないんだ」

色々言っているが遠野君が胸に抱えている想いは分かった。

「・・・つまり遠野君は自分を悪い人だと思いたいんですね？」

彼は目を丸くしている。

どうやら図星だったようだ。

「でも遠野君はそれに自信が持てない。だからそんな風に自分を追い詰めてハッキリさせるしかないんですね」

だがそれはあくまで遠野君の事情だ。

「遠野君の言う間違いが何か私は知りません。けど、正直に言って私にはそれがなんであっても関係ありません。遠野君は優しくされる資格がないと言ってますがそれは遠野君の都合です。それに・・・そのですね、私が遠野君に優しくするのは私が遠野君に優しくしたいからです。遠野君の都合は関係ありません。悪い先輩に捕まったと思って諦めてください」

そう、これは本心だ、私は何故か遠野志貴を放っておけなかった。

だから私は雨の中彼に手を差し伸べたんだと思う。

「・・・すみません、そうさせてもらいます」

「はい、そうしてください。それじゃご飯の準備しますから遠野君

は待っててください」

結局シエル先輩に服に風呂に食事までお世話になってしまった。

・・・お世話になった分際でいえる事ではないのだがカレーうどんとカレーパンをおかずにカレーライスを食べるのはどうかと思うよ、先輩。

俺は熱が出てるということで先輩のベッドで寝る事になった。

だが寝ようとしても、どうしても床で寝ている先輩が気になる。

――――この先、自分はどうればいいのだろう。

眠れない中そんな事を考えていたら先輩が声をかけてきた。

「遠野君、早く寝ないと明日遅刻しちゃいますよ」

「先輩、起きてるの？」

「はい、遠野君が寝るまで眠れません。私も女の子ですから」

「ゴメン、先輩。やっぱり俺台所で寝るよ」

「もうっ。何度言わせるんですか。遠野君は風邪を引いてるんですからイヤな事は早く忘れて寝てください」

「厭なこと・・・か。」

・・・それは無理なことだ。

あれは忘れられないものだし、忘れてはいけないものだから。人を殺した上にその人を忘れるなんて罪深過ぎる。

「・・・だめだ。罪は誤魔化せないよ、先輩。忘れることなんて出来ないし、忘れるつもりもないんだ。でもありがとう、今日は先輩のおかげで助かったよ。先輩がいなかったらどうなったてか分からない」

「罪・・・ですか。遠野君の言う罪って言うのは私には想像もつかないものみたいですね」

先輩はやけに明るく応えた。

「けど遠野君。罪を犯さないひとなんていないんですよ。生きている以上誰もが罪を犯してしまう、これは避けられない事なんです。生きる、と言う事は磨耗する事ですから。私たちは個人が削れるだけで、周りに影響を与える生き物なんです」

「そんなの、悲し過ぎるよ。そんなのじゃ誰も救われない」

「・・・そうですね。それじゃあ救われませんね。けど罪は償えるじゃないですか。本当に救われない人っていうのはどうあっても自身の罪を償えない人だと思います」

先輩の声はとても悲しげだ。

「でも、遠野君は償える人ですよ。眠れないなら、どうやって償うか考えてみてくださいそのうちに頭がパンクしていつの間にか眠っちゃってますから」

何故か・・・確信は無いけど先輩が今言った事は経験談だと思った。

「償える人・・・か。けどさ、俺の間違いはどうやっても償えないよ。これははっきりといえる」

当たり前だ、殺人が許される道理はない。

「そうですよ。どんなモノであれ、罪と言うものはなくなりません。誰かを傷つけて、その傷を治しても傷つけたという罪はきえないでしょう？どんなに頑張っても、一度犯した過ちは消えてくれないんですから。償うというのは結果ではなく、過程だと私は思います。償える人と償えない人、というのはそういうことです。だから遠野君は間違いなく償えちゃうひとですね」

「・・・俺は先輩が考えてる程いいヤツじゃない」

実際、今俺は償うどころか逃げている。

「いいえ、そんな事ありませんよ。さっきですね、私ちょっと感動しちゃいました。遠野君、胸に大きな傷があるでしょ？」

「あるけど、それがどうかした？」

「あれだけの傷跡ということはとても大きな事故だったんでしょう。傷というものはココロを歪ませます。あんなに大きな、しかもまだ消えない傷なんてちょっと普通じゃないです。でも遠野君は自然体です。あんな傷がある人が普通に生きてきたという強さは、誇れることです。遠野君はきっととても真っ直ぐな幼年期を過ごしたんですね」

そう言ったきり先輩は何も言わなくなった。
どうやら寝てしまったらしい。

「償い・・・か」

もし俺のした事が明るみに出たとき俺は多くのモノを失うだろう。
有彦とくだらない話をすることも、秋葉や翡翠、琥珀さんと一緒に過ごすことも、こうして先輩に合う事も出来なくなるだろう。
だからせめて公になるまではこの生活を続けたいと願った。

眠気が増してくる。
そのまま睡魔に抗うことなく沈んでいく。

眠ったふりをしながら遠野君の様子を確認する。
遠野君は上手く騙されてくれたみたいだ。

今日も『仕事』をしなくてはならない。
でも遠野志貴に今日関わった事は無駄ではなかった。
むしろとても有益だったと思う。
遠野志貴は『蛇』でない。
これは確信だ。
彼の言う罪が何かは分からない、けど彼はそれに真剣に悩み償おうとしている。
それは『蛇』に選ばれてしまった人間が出来る事ではない、許される事じゃない。

――――私がそうだったように。

だから彼は『蛇』じゃない。
その事実にどこか安心した。

しかし、だったら誰が『蛇』なのだろう？
この土地で『蛇』に選ばれるモノがいるとしたら遠野家の者である可能性が高い。
だが、家督を継ぐであろう長男の遠野志貴は違う。
今代の『蛇』は誰だ？
自問を繰り返しながら今夜も私は狩りにでる。

朝日が目に入り目を覚ました。
見知らぬ部屋である事に驚くが、すぐに昨日のことを思い出す。

「おはようございます」

「あ、先輩おはようございます」

部屋の入り口の所に立っていた先輩に挨拶を返す。

「よかった、いつもの遠野君に戻ったみたいですね」

「えっと、昨日は色々すみませんでした」

「はい、一つ貸しですよ？」

笑顔で先輩は応える。

・・・これは簡単には返せそうにないな。

「えっと、俺家に帰りますね」

「そうなんですか？まだ朝の六時になったばかりですよ？」

「でも昨日無断外泊しちゃいましたから」

「あ、それなら大丈夫ですよ。私が昨日連絡しましたから」

「・・・・・・え？」

先輩は今何を言った？

「だから、私が遠野君の家に連絡しました」

・・・拙い、それは非常に拙い。

実家に帰って早々に女の子の家に外泊するなんてどうやっても言い訳が出来ない。

これが秋葉の耳に入ったら、いや確実に入っているだろう、どうす

れば・・・

「私の家に泊まったってしられるのがそんなに嫌なんですね」

思考がフリーズしていると、先輩はそう言ってうつむいてしまった。恩人にこんな顔をされるのはとても辛い。

「いや、そうじゃなくて先輩には感謝してるし、嫌というより嬉しいというか・・・じゃなくて先輩が連絡して秋葉に変な誤解があったら何て言われるか分からないし・・・」

まともに動かない頭を必死に動かして弁明してるというのに先輩はくすくすと笑っていた。

「すみません、冗談です。昨日は乾君に遠野君が私の家の近くで体調が悪そうにしてるから泊めるので、乾君に遠野君の家に、遠野君は乾君の家に泊まるって連絡を入れてくれるように頼みました」

「・・・性格悪いですよ、先輩」

なんで先輩が有彦の連絡先を知ってるのかと思ったが、直後に有彦が一方的に連絡先を押し付ける光景が浮かび自己解決する。

「ごめんなさい、でも、もう本当に大丈夫ですね。それじゃあ、また学校であいましょう」

先輩は笑顔で見送ってくれた。

家に着くと有彦はちゃんと連絡してくれたらしく、体調を崩したから有彦の家に泊まった事になっていた。
秋葉からいつも以上に棘のある小言を言われたがそれ以外はいつもと同じ朝だった。

「それじゃあ行ってくるよ」

「行ってらっしゃいませ」

いつもどおりのセリフのあと翡翠はこっちじっと見る。

「志貴様、昨日はどうされたのですか？」

「・・・別に何もないよ。ただ雨にあてられて貧血を起こしただけだ」

「そうではなくて、その・・・今朝の志貴様は無理をしてるように見えます。・・・いえ、どうかお気をつけて」

・・・出来るだけ平静を装ってみたがどうやら翡翠には通じなかっ

たらしい。
この分だと秋葉と琥珀さんにもばれてるかな。

様々な思いが頭の中を回る中、最後になるかもしれない通学路を歩く。
信号が赤になり止ると、向こう側に登校する生徒たちに紛れて白い人影をみた。
「え！？」
――――――そこには、俺が殺したはずの白い彼女がいた

後悔と救い（後書き）

自宅で熱中症とか笑えない（汗）

夕暮れの約束

そこには確かにいた。
だがいるはずがない。
死人はガードレールに座ったりなんてしないから。

それは紛れも無く彼女だった。
でも彼女のはずがない。
彼女は遠野志貴が殺したから。

ならあそこにいるのは？
やはり間違いなく彼女だ。

昨日のはただのやたらとリアリティのある夢だったというのか。
目の前の現実に混乱していると彼女と目が合った。

「見つけた！」

彼女笑顔でこちらに向かってくる。
その言動と行動が昨日の事が現実だと証明する。
殺したはずの人間が自分に笑顔で話しかけてくる。

「こんにちは。昨日はお世話になったわね」

有り得ない。
たった一つの単語が頭の中を延々と廻る。

「あら、もう忘れちゃったの？昨日私をこれでもかってくらいナイフでばらば――――――」

それ以上聞きたくない。
そう思う前に、既に走り出していた。

訳が分からない。
何も考えずに走り続けた。

殺したはずの人間が自分を探していた、そんな事が有り得るのか？
いつの間にか、たどり着いていた教室で考えこむ。
答は単純、有り得ない。
ならあれは幻覚の類に違いない。
そう結論付けて、自分を落ち着かせた。

「自分さえ騙せない嘘はつくものじゃない」

その言葉を必死に無視して。

有彦に誘われて学食で昼食をとることになった。
珍しい事に弓塚さんも一緒だ。

「どうした。食べないのか、遠野？」

「ああ、今日は食欲がなくて」

食欲がないのは事実だ。
あんな事の後に、普通に食事を出来るほどの神経は持ち合わせていない。

「今日は何かおかしいぞ、お前。授業もボーッと・・・してるのはいつものことか」

「お前な」

さらっとかなり失礼な事を言ってくる。
こちとら有彦と違い普通の学生だ。
普段からそれなりに授業はちゃんと受けてる・・・それなりに。

「元気ないみたいですね、遠野君。やっぱり今日は休んだほうが良かったんじゃないんですか？」

「あ、シエル先輩」

後ろにはいつの間にか先輩がいた。

・・・手に持っているのは、やはりと言うかカレーだった。

「ご一緒してもいいですか？」

「もちろんです、先輩なら大歓迎ですよ」

急に有彦のテンションが跳ね上がった。

まあ、理由は考えるまでもないんだが。

と思ったら今度はこっちをにらんでくる。

「そういや、お前昨日先輩の家に泊まったんだよな」

そうだった、こいつは知ってるんだった。

「ええっ！！」

僅かな間をおいて、弓塚さんが顔を真っ赤にして悲鳴に近い声を上げる。

「泊まったと言っても、遠野君が雨に濡れて熱もあって辛そうな状態だったから家で休んでもらっただけですよ」

先輩が落ち着いてフォローをしてくれた。

余計な事を言わないでくれるのは助かる。

「そ、そっか。よかった」

何が、かは分からないが弓塚さんは胸を撫で下ろした。

「でも大丈夫でしたか？こいつこう見えてもかなりのケダモノですよ」

「お前にだけは言われたくないな、遊び人」

日常のくだらないやり取りに思わず笑いが起こる。

「――――――――えー、では次は連続殺人事件のニュースです」

テレビから流れてきた音声で落ち着きを取り戻しかけた心が一瞬で乱れる。

「あー、例の事件ですか。遠野君も気になります？」

「あ、いえ」

確かに気になる。

だがそれはただ『殺人』という単語があの事を指しているのではないかと思ったからだ。

あの遠野志貴が犯した『殺人』ではないかと。

「うっ」

思い出してしまった、彼女を十七個に解体した瞬間を。

ほとんど空っぽの胃の中身を吐き出しそうになる。

「遠野、どうした？」

「悪い、先教室に戻ってる」

結局買った昼食に一口も手を付けず食堂を後にした。

結局何事も無くそのまま放課後になった。

何が現実で何が幻か分からない。

また彼女に会ってしまいそうで家に帰るのが怖い。

あれは幻だと結論付けたはずなのに恐ろしくてしかたない。

「遠野君」

声のした方向に顔を向けると弓塚さんがいた。

「あのね、わたし帰り道が同じ方向だから、その・・・よかったら一緒にかえらない？」

自分でも正直驚いている。
点数をつけるなら殆ど満点に近いくらい自然に誘えたと思う。

「それでね、今日私の誕生日でね」

「うん」

でも心の底から喜ぶ事が出来ない。
理由は単純、一緒に帰っている遠野君が明らかに元気がないから。
おそらくだけど身体的な原因でなく、精神的な原因からだ。

「家族でホテルのレストランに行く事になってるの」

「うん」

少しでも遠野君の気を紛らわせれればと思い色々な事を話す。

「それでねそのレストランが結構有名でね」

「へー」

それも全く意味を成さない。

――――悔しい。

遠野君がこちらの話に興味がないことがでなく、苦しんでいる遠野君の助けることが出来ないことが。
私は遠野君に助けてもらった。
それがどれだけ嬉しかったか。
それにどれだけ救われた事か。

・・・そうだ、この話なら遠野君も少しは興味を示してくれるかもしれない。

「・・・ねえ、遠野君。中学二年の冬に遠野君がバトミントン部の女の子を助けた時の事、憶えてる？」

「え・・・うん。でも何で弓塚さんが知ってるの？」

やっぱり憶えてない。
予想はしていたが、正直ショックだ。

「私もあの時その中にいたんだ。あの冬、体育倉庫に閉じ込められて、最初はすぐに出られるって思っていたの。でもいつまで待っててもだれも来なくて、大げさかもしれないけどこのまま寒くて凍死

しちゃうんじゃないかって思って本当に怖かったの」

今度は私の話に興味を持ってくれたみたいだ。

何も言わず真剣な顔で聞いてくれてる。

「それでね、誰でもいいから助けて、て思っていたら遠野君が来てどうやっても開かなかった扉が開いて遠野君は何事も無かったみたいに外にいて。そんな遠野君を見て私思ったの。本当にいざって時に助けてくれるのはきっと遠野君みたいな人なんだろうなって」

今までに誰にも話したことのない大切な思い出。

それを最初に話すのがまさか遠野君になるなんて思わなかったけど、話してよかったと思う。

「あの時は偶然通りかかっただけだよ」

「ううん、私信じてるよ。遠野君ならどんな時にも当たり前のように助けてくれるって」

さらっとすごく恥ずかしいことを言った気がするけど、これは間違いなく本心だ。

「・・・俺はそんなにすごいやつじゃないよ」

他ならぬ遠野君本人が否定してきた。

でもそれは私にとっては事実、だからついむきになってしまい詰め寄る。

「いいの！私が勝手にそう信じてるんだから信じさせて」

遠野君の顔がすごく近い。
自分の顔が赤くなっていくのを感じる。
「そ・・・それは弓塚さんの勝手だけど」
遠野君の顔が赤くなってさっと身を引く。
照れた顔はなんか可愛いな。
「でしょ。だから私がいつかピンチになったら、その時は助けてくれるよね？」
無茶苦茶を言ってると、自分でも思った。
「うん・・・俺に出来ることなら」
「それじゃ、約束だよ」
「ああ」
多分今日はじめて私に向けてくれた笑顔で遠野君は応えた。
ちょうどその時私の家と遠野君の家の分岐点に着いた。
「それじゃあ、私の家こっちだからじゃあね、遠野君」
「うん。じゃあね、弓塚さん」
遠野君の笑顔を背に走り出す。
良かった、少しは遠野君の助けになれたみたい。

彼女の言った事はよく憶えている。
あれはこの『眼』を自分の意思で使った数少ない出来事だ。

多分だけど弓塚さんは俺を励まそうとしてくれたんだと思う。
俺は彼女が言うほどすごいやつじゃない。
けど約束をしたからには出来る限り応えたい。
そのためにまず遠野志貴が出来る事、すべき事は。

「もう。余計な手間を取らせないで」

逃げる事じゃない。

「着いて来い」

この白い女の亡霊と向き合う事だ。

契約（前書き）

Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡのアルクのプロフィールとかセリフはファンにはニヤニヤが止まらないなｗ

契約

ただ歩く。
具体的な目的地があるわけではない。
それでも出来るだけ人気の無い場所へと歩き続ける。

たまたま目に入った寂れた路地裏に入る。
ここなら人目につく事はないだろう、そう思い振り返った。

「もう、余計な手間を取らせないでよ」

白い女は不満を言っているがそんなものはどうでもいい。
なにせあれは幻覚か幽霊なのだから。

「それで、幻覚が何の用だ？」

「酷い言いようね。人を殺しておいてその言い方はないんじゃない？すっごく痛かったんだからね。生き返るのだって一日近く掛かったんだから。あんまり痛いから気がふれそうになるんだけど、やっぱり痛くて正気に戻るの。そんなのを一晩中繰り返した私の気持ち、分かる？」

これを幻覚と言わずになんと言えばいいのだろうか。
なにせ死人が殺された文句を言っているのだから。

「し、死んだ人間が生き返るわけないだろ」

やっとの思いで当たり前の言葉を絞り出す。

「うん、だって私人間じゃないもの」

・・・は？

この女は今何を言った？

「当たり前でしょ？体中バラバラにされて一人で再生出来る人間なんていないでしょ？」

彼女の言っている事は正しい。

では目の前にいるモノはなんだ？

こちらの困惑を察したのか、女は親切にも正体を教えてくれた。

「私は一般的に吸血鬼と言われる存在よ」

「吸・・・血鬼？」

「そう、貴方達風に言うなら人間の血を吸って生きる怪物ね」

『吸血鬼』

確かにそれならこのふざけた状況も説明は一応可能だ。

無論本当にそんなものが存在するかどうかは別として、だが。

「それよりも貴方よ」

今度は自称吸血鬼がこちらに質問をしてきた。

「私を殺した手際の良さ、貴方こそ何者なの？」

「俺は・・・ただの高校生だ」

そう、ただの高校生のはずだ。

「ふーん・・・うん、決めた」

数秒考え込んだあと吸血鬼は笑顔でこちらに笑いかけた。

嫌な予感がする。

「貴方、私に協力してもらうわ」

「協力？」

「ええ、吸血鬼退治よ」

吸血鬼退治？吸血鬼が？

「最近この町で起きてる殺人事件。知ってるわよね？」

殺人事件・・・たしか殺された人は皆体中の血を全て抜かれ・・・

あ！

「そう、私の捜している奴はそいつよ」

・・・はは。

ふざけてる。

理由も無く突然知らない女を殺したと思ったら、殺した相手が吸血鬼で、今度はそいつが吸血鬼退治に協力しろと言ってきた。

本当にふざけてる。
だけど、俺が彼女を殺したのは間違いなく事実だ。
なら選択肢なんて存在しない。

「俺は・・・俺は何をすればいい？」

「貴方には私の盾になってもらうわ。貴方おかげで私は弱ってるの、あと二日ぐらい休まないと元の状態には戻らないわ。その前に奴に襲われたらあぶないでしょ？」

つまりはボディーガードのことか。
それなら役にたつかどうかはともかく出来るかもしれない。

「くあう」

不意にカラスが鳴いた。
まるで何かを呟くように鳴いたそれは真っ直ぐこちらを見ている。

「見つかったわ」

女がため息混じりに言った。
何を？そう問おうとした時、路地の入り口から漆黒の『ナニ』かがやってきた。

「い、犬？」

一見するとそれは確かに犬に見える。
だがそれは犬にしてはあまりに大きく。
何より体も目も舌もただただ黒かった、闇を犬の形に切り出したのではないかと錯覚するほどに。

「来るわよ」

そう言うや否や女は俺を突き飛ばす。

「え？」

間抜けな声を上げた瞬間俺が立っていた場所のすぐ後ろのドラム缶が文字通り『砕け散った』。

「な、何だ」

何が起きたか分からず無様に尻餅をついたまま振り返る。

「・・・嘘だろ」

そこにあったのは路地の壁にできたばかりのクレーターと。

「有り得ない」

建物の屋上からこちらを見下ろす、先ほどの犬のようなモノがいた。

「あ」

突然それがこちらに跳んできた。

――――――逃げられない。

そう考えた瞬間、目の前に白い影が割り込んできてそれを引き裂く。

見ると、先ほどまで普通だった女の爪が、禍々しい程異様なまでに

鋭くなっていた。

「い、今のは？」

困惑して自分が何について聞いているのか分からない。

「敵の使い魔よ」

「使い魔？」

聞きなれない単語で簡潔に答えた吸血鬼は、他に敵がいないのを確認して大きくため息をする。

「拙い事になったわね。見つかった以上は貴方に本当に盾になってもらわなくちゃならないわ」

「何？」

「まずは何処かに隠れて回復を――――」

「待ってくれ！！今の見てたろ、俺に一体何が出来るんだ？お前一人の方がよっぽどマシじゃないか」

そうだ。

あの時この吸血鬼が助けてくれなければ、俺は間違いなく死んでいた。

そんな俺が何か出来るはずがない。

「そうでもないわよ。私、今ので限界みたいだから。それに貴方凄腕の殺人鬼なんでしょ？早く行きましょ」

「違う！俺は普通の人間だ！！」

「・・・」

吸血鬼は苛立った目をしながら無言でこちらを見ている。

確かに彼女が弱っているのは俺の所為だ。

だけどあんなバケモノから誰かを守ることなんて自分には出来ない。

「じゃあ私が休んでいるあいだ見張っているだけでいいわ」

これが最大の譲歩だと彼女は言外に語る。

・・・正直、それさえもお断りだ。

だが元はと言えば遠野志貴が蒔いた種だ協力しないわけにもいかない。

「分かった。協力・・・する」

「じゃ、契約成立ね」

吸血鬼は笑顔で名乗る。

「私の名前はアルクェイド・ブリュンスタッド、長いからアルクェイドでいいわ。一応真祖って区分される吸血鬼よ」

そう言ってアルクェイドは手をのばす。

「遠野志貴、生憎ただの学生だ」

互いに名乗り、互いの手を握り契約(握手)を交わした。

「それじゃ、よろしくね志貴」

最後に彼女は言った。

自分を殺した相手に向けたとは思えない、それこそ見惚れる程に屈託の無い笑顔で。

「私を殺した責任、ちゃんと取ってもらうんだから」

驚いた。

今日はとにかく驚きっぱなしだ。

何故アルクェイドはこんなに金を持ってる？

どうやったら高級ホテルのスウィートルームのある階を丸ごとその場で借りれる？

吸血鬼ってのは儲かるのか？

羨ましくなんてないぞ、畜生。

「割と良い部屋ね」

高級ホテルのスウィートルームを見た感想それか、普段どういう生活をしてるんだよ。

思わずツッコミを入れたくなるがここは我慢だ。

「私の部屋はもう奴にバレてるだろうし、今日はここに隠れる事にしましょ？」

「ああ」

普段ならあんな美女とホテルの一室にいるなんてこの上なく胸躍る展開なのだろうが、残念ながら今は日常から遠く離れた状態だ。

「夜になるまで休むことにするわ。吸血鬼は昼間に行動出来ないから」

「それを言ったらお前だって・・・」

「あ、いいのいいのわた――――――」

何かを言い終わる前にアルクェイドが急に倒れる。

「お、おい・・・大丈夫か？」

「さすがに限界みたい」

そう言い彼女はふらふらとベッドに腰掛ける。

「それじゃよろしくね、志貴。夜になったら起こして」

言い終わるとそのまま彼女はベッドに横たわり眠り始めた

なんて無防備な姿だ。
こいつは自分を殺した相手が俺だって事を忘れたのだろうか。
それともアイツを殺した俺を信頼しているのか。
半ば無理矢理連れてこられて、いつ逃げ出すかも分からないというのに。

さっきだってアルクェイドが庇ってくれなければ確実にやられてた。
どう考えたって足手まといになったとしても力になれるはずがない。
もしアレがまた今やってきてもどうしようもない。
居ても居なくても同じ。
なら、今こいつ前から消えても・・・
そう考えが頭の中を過ぎった時アルクェイドを見ると脇腹にジワリと血の染みが広がった。

「もう！何処行ってたの、志貴！」

部屋のドアを開けると同時に文句が飛んでくる。

「あ・・・起きてたのか」

起こす約束を過ぎてしまっていたから、もしかしたらと思っていたがやはり起きていた。

「起きたら日は沈んでるし、志貴は居ないし。何をしていたの？」

「その・・・買い物をしに」

「危ないじゃない！使い魔に見つかった以上貴方だって危ないのよ？」

・・・こいつ、俺が逃げようとしたとか考えないのか？

「――――た――――――に襲わ――――――志貴、聞いてるの？」

アルクェイドに名前を呼ばれて我に返った。

「ああ、すまん。吸血鬼に意味があるか分からないけどお前の服に血が滲んでたから」

コンビニで買ってきた医療品を渡す。

「え？あ、本当だ。こんなになってるなんて気付かなかった」

普通気付くと思うのだが・・・吸血鬼ってのは皆こうなのだろうか？

「さっきはこれを買うために？」

「まあ、一応」

「・・・そっか。志貴っていい人なんだね」

心からそう思っていると言わんばかりの笑顔で彼女は応える。

「自分で蒔いた種だからな」

その笑顔を見るのが辛くて外に目を逸らす。

理由は分からないけど俺は彼女を殺した。
それは紛れも無い事実だ。
でもこいつは今生きている。
それは素直に喜ぶべき事だと思う。
だから・・・罪は消えないけど。

「俺に出来る事は協力するよ」

決意と共に振り返りアルクェイドを見る。

「うん」

彼女は応える。

「じゃあ早速協力してもらおうかしら」

何故か包帯を持って。

「・・・はい？」

間違いない。

「お前さ」

これは確信だ。

「なぁに、志貴？」

証拠もある。

「お前、吸血鬼でもバカの部類にはいるだろ？」

「え！なんでー？」

何でも何も。

「普通ガムテープで傷口はふさがない」

「・・・・・・」

妙な沈黙が流れる。

「知ってたわよそんな事！ただ近くに手ごろな物が無かったの！！」

「っと、動くな」

けが人だと言うのに全身で抗議をしてくる。

「志貴の切った切断面は全然くっつかないんだもの、だからわざわざ組織を再構成してくっつけたの。その補強が包帯でもガムテープでも変わらないでしょ？」

「それはそうかもしれないけど」

そうだった。

この傷をつけたのは俺だった。

そんな事まで忘れかけるなんて。

「終わった？」

自己嫌悪に落ちそうになった俺を現実に戻したのはまたも彼女だった。

「ああ、後はテープを切れば・・・あ」

切る物を探して鞄を漁っていると彼女を殺した凶器が出てきた。

「ん、何それ？」

アルクェイドが興味を持ったのか聞いてくる。

「ああ、これは・・・」

説明をしようとした瞬間、全身に形容し難い程の寒気が走った。

混沌の襲来

突然脊髄に刃を刺し込まれたような感覚に襲われる。

ニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロ。

今すぐに、少しでも早く、少しでも遠くに。
此処に居てはいけない。
本能が全力で危険を訴えてくる。

「志貴」

アルクェイドも同じモノを感じているらしい。
口に出さずとも先ほどとは違う緊張した表情が伝えてくれる。

「・・・少し、外の様子を見てくる」

この場に居たくない。
その思いが体を動かす。

ナニかが起きた。
その確信があの短刀を手放させなかった。

「気をつけて」

アルクェイドの言葉を背に部屋を出る。

部屋を出て先ず感じたのは静けさだった。
見た限り異常は無い。

でもおかしい。
いくらなんでも静か過ぎる。
一通り階を見回ったが何もない。
一度部屋に戻るべきか？

考えをまとめる前にポーーーンと間の抜けたような音が響いた。
エレベーターが到着したのだ。
そしてドアが開いた瞬間ナニかが飛び出してきた。

「うわ！！」

尻餅をつくようにして何とか避ける。
飛び出してきたのは先ほど自分達を襲ってきたモノとよく似ていた。
全てが漆黒の獣。

「なんで」

思考が口からでる。
何故あの獣がエレベーターから出てきた？
『敵』が操作してきたのか？
獣が飛び出して来た方を見る。

なんて事は無い。
エレベーターを動かしてたのはこの獣から逃げようとしていたただの一般人だ。
ただドアが閉まるのが少し間に合わなかったのだろう。
結果そこには、箱詰めにされた地獄が出来ていた。

不ぞろいな人体。
床一面に広がる血溜り。
その上に所々散らばる内臓。
最期まで逃げようとしたであろう者が壁に残した血の手形。

「あ・・・ああ」

知っている。
俺はこれを――――――これによく似た光景を知っている。
これはあの――――――での――――――――――が――――――された――――――

「あああああああああああああ！！！！」

――――痛い。

頭が割れる。
何かがこれ以上考えるのを拒絶する。
考えるな、考えるな、考えるな。

そうだ、今は何も余計な事は考えるな。

「グルルルル」

先ほどの獣が唸りを上げる。
その後ろには何処から湧いたのか他にも数匹の黒い獣達がいた。

頭痛は止まない。
けど関係ない、今はただこの敵を殺す事を考えればいい。

「ガッ」

短い咆哮を上げながら先頭の一匹が向かってくる。
かなりの速さだが不思議と驚きも焦りもない。

メガネを外しポケットにしまう。
瞬間、セカイに『線』が現れる。

短刀を逆手に構える。
あと数十センチのところの豹の様な獣の爪が迫る。
身を沈め爪を掻い潜り頭から左後ろ足までの『線』を一直線に両断する。

すぐ後ろに狼が回り込んでいた。
こちらに飛び掛ろうと溜めを作った瞬間に詰め寄り両前足の『線』を切り落とし、順手に持ち替え返す刀で腹から胴を断つ。

周りを旋回していたカラスが弾丸の様に突っ込んできたが軌道に短刀を合わせ『線』を切る。

最後に残った獅子が飛び掛って来ていた。
予想より速く迫ってきていた為に回避が間に合わず、すれ違いざまに左腕に爪で傷を負った。

――――この程度なら問題無い。

振り返ると黒い獅子はその巨体からは想像出来ない程の速さで既に攻撃の姿勢をとっていた。
今から回避しても間に合わない。
だが考えるより先に体は沈む。
獅子がこちらの間合いに入った瞬間、回転と共に跳ね上がり顎を蹴り穿つ。
大きく仰け反った獅子の首の『線』を空中でそのまま切断する。

着地した時には辺りは元の静寂に戻っていた。

「は・・・ははは」

なんて脆い。
もう此処に有る物は全て殺しつくした。
だがまだだ。
あの時に比べればこんなのは――――――

「ははは っ痛！！」

意識を刈り取れられる様な頭痛で我に返る。

「え！？」

床に広がる獣達の残骸を見て声を上げる。

「これ・・・は、俺がやった・・・のか？」

ほんの少し前の事なのに記憶が定かでない。

「アッ・・・ガ！」

しかしそれを思い出そうとするとより一層鋭い頭痛に襲われる。

何か大切な事もあった気がするのに。

「志貴！！大丈夫！？」

不意に声のした方を見るとアルクェイドが駆け寄ってくる。

彼女は傍まで来ると周りの様子を確認し、驚きの声を漏らす。

「様子見にしては遅いから心配になって来てみれば・・・これ、志貴がやったの？」

「ああ、多分・・・だけど」

「多分って・・・自分の事でしょ？」

「本当に分からないんだ。あの獣に襲われて、頭痛がして・・・その先が良く思い出せな・・っつ！」

いよいよ耐えられない程に強くなってきた頭痛に膝がから崩れる。

「志貴！？どうしたの？」

アルクェイドに何かを伝える前に別の声が邪魔をした。

「ふむ。流石に弱っているとはいえ、この程度では相手にならないか」

突然の第三者の声に緊張が走る。
声の主の方を見ればそこには、二メートル近い黒いコートを着た大柄な男が立っていた。

――――ヤバイ。

この不健康そうな肌の色をした黒ずくめのモノは人間じゃない。
そいつをみた瞬間から脳がそれに関わってはいけないと警告は発している。

「ネロ・カオス」

アルクェイドが呟く様に、しかし焦りを含みながら言った。

「いかにも」

ネロ・カオスと言うのはこの男の名らしい。

「ようやく出会えたなアルクェイド・ブリュンスタッド」

ネロが応えている間に獣達の残骸はネロの足元に吸い寄せられて消えた。

「志貴、立てる？・・・逃げるわよ」

「出口など無い。此処が貴様の執着だ」

ネロが告げると同時に無数の獣達が現れ廊下を埋め尽くす。
確かにこれじゃあ逃げ場なんてない。

「・・・さあ・・・それはどうかしら？」

アルクェイドが腕をゆっくりと上げる。
そして俺に何かを目配せし勢いよく振り下ろす。
瞬間、爆音と共に廊下の壁が砕け散る。

「な！」

驚きの声を上げてる間にアルクェイドは俺の脇を掴み、ホテルの最上階から身一つで飛び降りた。

「まだあれほどの力があったか」

いかなる理由かは分からないが弱りきっているのは確かだ。
だと言うのに、この包囲網を純粋な力のみで破るとは流石は真祖と

言ったところか。

「だが、この程度で逃がしはしない」

追跡の為に獣の一体を向かわせる。

しかしいざ追跡を始めようとするや否や何かに貫かれ阻害された。

「・・・何者だ？」

カソックを着た乱入者は殺意を含んだ返事で応えた。

「埋葬機関」

「埋葬機関」

階下に広がる地獄を造り上げた吸血鬼に代行者――――シエルは告げる。

「ネロ・カオス、貴方を浄化します」

必要なことはこれで全て伝えた。
これ以上は何も要らない。
後は滅ぼすだけだ。

「ほう、このような極東の島国だと言うのに随分と早いものだ」

吸血鬼は意味の無い感想を漏らしながら獣達をこちらに向ける。
これでいい。
これなら何故か此処にいて、何故か真祖と一緒にいた彼も逃げられるだろう。

「まあ良い。真祖の逃げた先は予想できる、貴様を我が一部とした後で追わせてもらう」

黒い獣達が一斉に襲いかかってくる。
迎え撃つためカソックの内側から黒鍵と呼ばれる投擲用の短剣を取り出す。

ネロ・カオス――――――混沌と称されるこの吸血鬼の情報は知っている。
なにせ二十七祖の一角という大物だ。

跳びかかって来る獣に次々と黒鍵を投擲し突き立てていく。
しかしこれだけではあの獣達は止まらない。

――――――なら。

突き立てた黒鍵が発火していく。
火葬式典を含む複数の式典とと鉄甲作用を複合させたこの黒鍵の炎

は並の死徒ならそれだけで致命傷になる。

――――これならあるいは・・・。

まるで波のように迫り来る獣たちは火に包まれた塊になる。
それでもなお獣達は進もうとしたが、その尽くがシエルに届く前に力尽き倒れていく。

――――仕留めた？

そんな考えが頭を過ぎった瞬間、獣の残骸が床に飲まれていった。
いや、よく見るとそれは床でなくネロ・カオスの足元から広がるナニかに吸い込まれていた。
直後、再び辺りを獣が覆い尽くす。

「・・・なるほど、流石は混沌ですね。話を聞いてはいましたが、これは想像以上です」

二十七祖の十位。
その身の内に６６６のあらゆる獣を摂り込み同化する。
故についた名が混沌ことネロ・カオス。
つまり現在の状況は厳密に言えば一対一でなく一対六百六十六。
加えて、元々今夜はただの死者を狩るつもりだった今の私は相手に有効なダメージを与える手段が無い。

はっきり言えばかなり絶望的だ。

――――セブンさえいれば・・・。

泣き言を言ってもしょうがない。

この吸血鬼を倒す。
何としても倒す。
それで被害者達が生き返る訳ではない。
それで自分の罪が消える訳でもない。

――――でも、でないとこのホテルにいた人々があまりにも報われない。

「あああああああああああ！！」

叫びながら黒鍵を連続で放つ。
放たれた黒鍵は向かってくる獣をと後ろに立つネロに刺さっていく。
すぐに辺り一面が炎に包まれ獣達は崩れだした。
それでも代行者は止まらない。
既に何の塊か分からなくなったモノに黒鍵突き立て続ける。

「あああ！！！！！」

憑かれた様に叫び、放つ。
突き立てた黒鍵の一本一本が被害者の墓標だと言わんばかりに。
黒鍵から出る煉獄の炎がシエル以外の全てを焼き尽くしていく。

「はあ、はあ・・・ゲホッエホッ」
煙が肺に入り咽てしまった。
周りに動く物は何も無い、今度こそ・・・。
「ふむ、驚いた。黒鍵だけでここまでやるとは思わなかったぞ、代行者」
こちらの希望をあざ笑うように、吸血鬼は淡々と語る。
「どこに！？」
辺りにあったモノ焼き尽くしたはず。
ではこの声はいったい。
「おかしなことを言う。私はお前のの前から一歩も動いてはいない」
――――馬鹿な。
そう思いネロの元居た場所を見る。
そこには焼け爛れた黒い塊があるだけだ。
しかし声は確かにその塊から聞こえてくる。
あの状態で生きているのか？
目の前で起きてる事に困惑しているとその黒い塊が蠢きだした。

塊はズブズブと嫌な音をたて、粘土をこねるように人の形をとり、そして初めと同じ姿の傷一つ無いネロ・カオスになった。

「なっ！！」

いくら多くの獣を盾にしてたとしてもあの火力に無傷など有り得ない。

何より間違いなく本体であるネロもほぼ炭化していたというのに。

こちらの驚愕に対し、親切にも吸血鬼はこちらの疑問に答えた。

「私の能力を勘違いしているようだな。私は既に一つの生命では無い、私・・・いや我々は一にして六百六十六。既に群体に近い存在だ」

馬鹿な。

あの獣は使役してるのでなく文字通り、奴の一部だというのか！？

もしネロの言う事が真実だとしたら、奴を殺す為には６６６の命を同時に消さなくてはならない事になる。

そんなことは不可能だ。

全身から冷や汗が流れる。

――――拙い。

これではもし万全の状態で挑んでも殺しきれないかもしれない。

「埋葬機関がいるとは厄介だ。ここで始末したかった、が・・・」

ネロは真祖が壊した穴から外をみる。
いつの間にか空は白みだしていた。

「仕方あるまい。忌々しい我らの宿敵が昇る前に退散させてもらおおう」

黒い混沌が噴出し視界を覆う。
飲み込まれる前にさがるが、元居た場所にネロの姿は既になかった。

「・・・・・・私は」

それ以上、何も言わず代行者は帰っていった。

混沌の襲来（後書き）

戦闘シーンて難しい・・・てかこれ厳密に言えば戦闘ですらない（汗）

あとシエルはネロの能力の正確なデータ知らない・・・よね？

直死の魔眼（前書き）

魔法使いの夜の発売が冬に延びた怒りにまかせて一気に書きました。
ちくしょー受験真っ盛りじゃないか、浪人生には後がないんだぞ！！
ん？浪人生がこんな事してていいのかって？
・・・・・・聞こえないなあ？

直死の魔眼

走る、走る、走る。
森の中を走る。
向かう先は舞台の上。
取り残された分目立とう。
さあ、幕はもう上がっている。
早くあの――――の舞台に行かなきゃ。

心地よい気だるさと共に目を覚ました。

「今のは・・・夢？」

見たことのない景色。
どこかはっきりとしない感覚。
でもどこか懐かしい、けど悲しい気持ちになる。
そんな不思議な夢。

「痛っ」

突然の頭痛で思考を遮られる。
慌てて近くにあったメガネをかける。
するとすぐに視界から『線』が消えて頭痛が治まった。
普段は殆ど『線』を見ないため忘れがちになるが、あまり長い時間『線』を見続けると酷い頭痛に襲われるのだ。

それよりここはどこだ？
見渡すと自分は見知らぬ部屋に居た。

「あ、起きた？」

声の方を見るとアルクェイドがドアを開けて部屋に入ってきた。

「ここは？」

率直な疑問を投げかける。

「私の部屋よ。逃げてる途中で志貴が倒れて、それでここまで運んだの」

逃げる途中・・・・そうだ、思い出した。
昨日の出来事の全てを。

――――ゾクリ。

あのネロという吸血鬼の事を思い出しただけで恐怖に寒気がする。
アレは規格外だ。
存在するだけで死を振り撒く、最早災害のような存在だ。
ただ一度会っただけでそう確信させられた。

「逃げ切れたのか？」
「ええ、今の所大丈夫よ。まあ、この場所はとっくにばれてるだろうけど」
――――――な！？
「ならすぐにでも別の場所に向かった方が！！」
慌てて身を起こすと腕に鋭い痛みが走る。
「落ち着いて、急に動くと傷に障るわ。あとこれ、新しいシャツ」
慌ててるこちらと対照的に落ち着いて新品のシャツを渡してくるアルクェイド。
そういえば昨日、あの黒い獣と戦った時に怪我をしたんだった。
腕を見ると包帯が巻いてある。
「今度はガムテープじゃなかったでしょ？それともそっちの方が良かった？」
ああ、そんなやり取りを昨日したな。
「いや。ちゃんと包帯で処置してくれて助かったよ、かなり切実に」
アルクェイドの冗談のおかげで幾らか緊張が解けて冷静になれた。
思わず二人で笑いあう。
「ネロなら大丈夫よ、夜になるまで行動しないわ。吸血鬼が夜にし

か行動しない事ぐらい、志貴でも知ってるでしょ？」

「でもお前は普通に活動してるじゃないか？」

「それは私が真祖だからよ」

アルクェイドが聞きなれない単語を口にした。

「シンソ？」

「吸血鬼には『真祖』と『死徒』、大きく分けて2種類いるの。『真祖』は種として最初から吸血鬼だったもの、『死徒』は主に真祖に血を吸われた人間の事を言うの。多分一般的な吸血鬼のイメージは死徒の方ね、太陽を嫌い、人間の血を吸い、下僕を使役する」

「じゃあ真祖って言うのはどうなんだ？」

「そうね・・・ねえ志貴、私は今までどのくらいの人間から血を吸ってきたと思う？」

・・・こいつは自分は真祖だって言っていた。
真祖は生まれた時から吸血鬼だった者の事だから、生まれてから吸ってきた人数という事になる。
生きるために血を吸うなら、それはかなりの数になるはずだ。

「えっと・・・百、いや千人くらいか？」

「ブーーー。大外れ」

明らかに不機嫌な顔をしてアルクェイドは答える。

「志貴って私をそんな風に見てたんだ。それって見境無いみたいじゃない」

あれ？

なんかお互いの認識に大きな違いがあるみたいだ。

「私はこの八百年一度も人の血を吸ってないわ」

「何で、吸血鬼なんだろ？」

「だって怖いんだもの、血を吸う事」

――――は？

「なあ、血っていうのは吸血鬼にとって食事みたいなものだろ？それを吸わないでいて大丈夫なのか？」

「・・・真祖は本来生きるために血を必要としないの。ただ中には自分の楽しみのためだけのために血を吸う奴もいて、それで死徒が生まれたの」

・・・そうだったのか。

知らないからって酷いことを言ったな。

「・・・なら、昨日のあいつは」

「ええ、ネロは死徒よ」

あれが・・・あの箱詰めの地獄――――――いや、恐らく下の階層のほぼ全てが似たような状態だったであろう。――――――を造りだした吸血鬼。

それがアルクェイドが追ってる吸血鬼なのだろうか？
それを聞こうとした瞬間、多分最初から点いていたテレビから緊急ニュースが流れ出した。
内容は昨日俺たちが居たホテルのものだった。
アナウンサーは多量の血痕があった事、動物のものらしき毛が見つかった事、そしてホテルに居た人々が全員が行方不明になった事を伝えた。

「なあ、あのホテルに居た人達って」

「・・・残念だけど、全員ネロに食われたでしょうね」

「・・・そんな」

アナウンサーは行方不明ということになってる被害者達の名前を次々と読み上げていく。
この人達はあのエレベーターの中の人達みたいに殺されたのだろうか。
一方的に、理不尽に。
胸の内に怒りが込み上げてくる。

そして聞き憶えのある名をアナウンサーは読み上げた。

「――――ダミサキ、ユミツカサツキ、ユミツ――――」

――――え！？

画面を凝視する。
そこには間違い無く見知った、弓塚さつきと言う名があった。
「今日私の誕生日でね、家族でホテルのレストランに行く事になってるの」
ああ、確か昨日彼女はそんな事を言っていた。
約束したのに。
彼女がピンチの時助けるって約束したのに。
――――――ブツリ。
何かが切れる音がした。

――――――ガタッ。
テレビを見ていた志貴が突然立ち上がり、何処かに行こうとする。

「ちょっと志貴、どこに行くの？危ないわよ」
しかし彼は聞こえていないように止まらない。
「志貴、聞いて――――」
志貴を止めようとするが、不可思議な現象が邪魔をした。
――――あれ、なんで床が起き上がってきたんだろ？
そのまま抗うことが出来ずに、私は起き上がってきた床と激突した。

「あはは、昨日は無理をし過ぎちゃった」
ベッドで横になるアルクェイドが笑いながら言った。
怒りに呑まれて何処に居るかも分からないネロの所に行こうとした時、彼女は倒れたのだ。

「大丈夫なのか？」

「ええ、しばらく休めば大丈夫よ」

・・・アルクェイドは弱ってる。
それもこうしてただ話す事も辛そうなほどに。

「それにしても変ね、いくら何でも回復が遅いわ・・・志貴、貴方いったいどんな概念武装を使ったの？」

「ガイネン・・・なんだって？」

「私を殺した武器の事よ。私に耐性が無いものなんて殆どないんだからよっぽどの物をつかったんでしょ？」

彼女を殺した瞬間の光景が蘇る。
そう、アルクェイドが弱ってる原因は紛れもなく俺なんだ。

「えっと、これだけど」

申し訳ない気持ちでアルクェイドを殺した短刀を渡す。
彼女はしばらくまじまじと見た後、重々しく口を開いた。

「志貴。貴方いったいどうやって私を殺したの？」

「どうやってって」

それはアルクェイドもよく知ってるはずだが。

「確かにこのナイフ、切れ味は良さそうだけど。これだけじゃ私を殺すどころか深手を負わせる事すら不可能よ。貴方は特別な何かをしたはずよ」

特別な事・・・。

ある、一つだけ。
遠野志貴は『線』が視える。
これは自身にとってさえ異常な事だ。

「その・・・『線』が視えるんだ。それを刃物とかでなぞると簡単に切れるんだ」

アルクェイド少し考えた後。

「志貴。それ、見せてもらえるかしら？」

そう言った。

そこら辺にあった適当な物をいくつか切る。
それを見たアルクェイドは確信と驚きに満ちた声で言った。
「なるほど・・・直死の魔眼か。それなら私でも殺せるわね」
「直死の魔眼？」
「そう、あらゆるものには発生した瞬間からあらかじめ予定されてる崩壊の時期、つまり死期が内包されてるわ。貴方はそれを『線』という情報として視覚化できるの」
「死が視える？」
いまいち抽象的で分かり辛い。
「要するに、あらゆるものを外的要因も魔術的要因も無視して殺せる眼を貴方は持ってるの。そういう意味では貴方の方が私よりよっぽど化物ね」
「・・・」
あまりの事に言葉が出ない。
――――この線が全て『死』？
そう思うと床に立っている事にさえ恐怖が込み上げてくる。
この瞬間にも部屋も大地も自分もセカイも、全てが崩れるんじゃないか。
そんなかつて見た錯覚に再び、より強く囚われる。

慌ててメガネをかける。
するとセカイから『線』が消える。
先生はこの『線』が『死』だと知っていたのだろうか。
・・・恐らく知っていたんだろう。
だからこそ、この眼を軽はずみに使った時にあんなに叱ってくれて・・・そしてあんな事を言ってくれたんだ。
「志貴、聖人になれなんて言わない、君が正しいと思う大人になればいい。いけないっていう事を素直に受け止めてごめんなさいと言える君なら、十年後にはきっと素敵な男の子になってるわ」
――――ああ。
なんでこんな大切な記憶を忘れてたのだろう。
なんでこんな大切な事を忘れられたんだろう。
「志貴、どうしたの？」
何も言わなくなった俺を心配したのか、アルクェイドが声をかけてきた。
自己嫌悪で死にたくなる。
「ごめん・・・ごめんアルクェイド。俺は何よりも先にお前に謝らなくちゃいけなかったのに。お前を殺した事を誤らなくちゃならないのに」
「・・・ありがと」

「え！？」

何故ここでお礼を言われるんだ？
俺が言った事はちゃんと伝わっているよな？

「初めて名前で呼んでくれたでしょ？忘れたのかと思ったわ」

「それは・・・」

「貴方は本当に不思議な人ね、一流の殺人鬼のくせに殺した相手に謝るんだから」

殺人鬼というのを訂正させたかったが彼女を殺してしまったのが事実なだけに何も言えない。

「でも大丈夫よ志貴、二人なら勝てるわ」

――――誰に？

そんな事は考えるまでもない。
ネロ・カオス、あのホテルに居た人達を殺しつくした。
そして弓塚さつき――――――遠野志貴の大切な友人を殺した死徒。

「私の体は万全じゃないけど、こっちには私でさえ殺せる切り札があるわ。協力してくれる？志貴」

これはもうアルクェイドだけの問題じゃない。
俺にもネロを倒す、いや倒さなきゃいけない理由がある。

「勿論だ。俺は何をすればいい？」

その名の意味（前書き）

さあ、ラスボスより強い中ボス戦が始まるよ！！

その名の意味

何故真祖があそこまで弱っているかは分からない。
しかしこの好機を逃す理由は無い。
今宵、アルクェイド・ブリュンスタッドを仕留める。

「よう。こんな所で会うなんて珍しい事もあるもんだな」

後ろから不意に声をかけられる。

「何者だ？」

振り返ると見たことも無い和服を着た男が立っていた。
だが気配だけで同族だと分かる。

「ああ、今回の体で会うのは初めてだったな。そう構えるなよ」

「貴様、蛇か？」

「ご名答。さすがは混沌だ」

「成る程。真祖がこのような極東の島国に居るのは貴様が居るからか」

・・・この男が何かをしたならば真祖が弱っているのも頷ける。

先ほどまで感じていた疑問を自己解決する。

「何の用だ？」

「なあに。ただ気をつけろって言いに来ただけだよ」

「言われるまでも無い。相手は真祖、元より油断など出来る相手ではない」

見張りをさせていた一部が真祖が根城を出たのを見た。

再び蛇に注意を向けようとするが蛇は既に居ない。

・・・奴は何をしにきたのだ？

本当に忠告をしに来ただけとは思えない。

いや、今はそんな事はいい。

今はただ、真祖をこの身に摂り込むのみ。

混沌は戦いに向かった。

「ク・・・ククク。違うんだよ、ネロ。俺が気をつけろって言ったのは死にかけの姫君じゃない。お前はアイツをただの人間だと思っている、いや、それどころか気にも留めてないか。だがな、アイツは生粋の殺人鬼だぜ、それも真祖を殺せるほどのな」

忠告を聞く相手が聞いていない事を知った上で男は楽しそうに話す。

「さあ、お手並み拝見といこうか。七夜」

公園の木の陰で息を潜める。
アルクェイドは俺がここに隠れてる事にもう気付いている。
何故こんな事をしているかと言えば、ネロとと戦うためだ。

作戦はいたってシンプル。
アルクェイドが奴の注意を引き付け俺が奇襲で仕留める。
ただ、唯一にして最大の不安は、俺があのネロという化物を殺せるのかという点だ。

「貴方に殺せないモノはないのよ、それはネロでも例外じゃない」

とはアルクェイドの弁だ。
ついでに言うと、俺に『線』だけでなく『点』も視えるなら、そこを突く事が出来れば確実にネロを倒せるらしいのだが生憎俺にそれは視えなかった。

『線』が死に易いところで『点』が『死』そのもの。
これもアルクェイドが言った事だ。

まあ視えないモノをどうこう言っても仕方ない。
たった一度しかないチャンスだ、首に走る『線』か心臓近くの『線』を一刀で切って確実に・・・。

今更だけど、本当にとんでもない事になったな。
人を殺したらそいつが吸血鬼で、そいつの吸血鬼退治に協力する事になって、その吸血鬼に友達を殺されて、そしてそいつに復讐をしようとしてる、どこかの安っぽい映画みたいだな。
・・・映画だったらどんなに良かっただろうか。
そもそも、なんで俺はアルクェイドを殺したんだろう。

「待た――――な、し――祖のひ――――――み」

唸る様な低い声で思考が遮断される。
いつの間にかアルクェイドとネロは相対していた。

危なかった。
考え事をしてて奇襲のタイミングを逃したなんて笑い話にもならない。

「――――と――――れ――わ――――」

二人は会話をしているが中身は良く聞き取れない。
いや、そんなものはどうでもいい。
今はネロだけに集中する。

幸い、ネロは油断してるせいか、奴の武装である獣達を展開してない。
なんでもネロは、取り込んだ獣を使い魔にしてるらしい。
だから混沌(カオス)か。
いけない、また余計な考え事をしてる。

――――――集中。

・・・まだだ。

まだ周りに気を配ってる。

まだ・・・まだ・・・ま・・・今だ、今しかない！

音もなく駆け出す。

よし、ネロはこっちに気付いてない。

――――このまま。

――――奴を。

――――解体・・・。

だがまたしても思考は遮られた。

今度は物理的な衝撃で。

ネロは完璧にこっちに集中してる。
そう確信すると同時に志貴が駆けてくる。
ネロはまだ気付いてない。

――――勝った。

だが必殺の一撃をきめる前に志貴は後ろに吹き飛ばされた。

「志貴！！」

――――そんな・・・気付かれていた！？

衝撃が走る。
たった一度の好機は、志貴に覆いかぶさってる黒い獣によって潰された。

「ふむ、背後で何か起きたようだな」

覆いかぶさっていた獣の首を志貴は切り落とす。

「ほう、あの人間は貴様の使い魔だったか」

志貴の方を一瞥し、ネロは呟く。

直後、志貴が殺した獣はコールタールのような液体になり絡み付いて志貴を拘束する。

「残念だったな、私に奇襲は通じない。私の領域に入ったものは私が気付かなくとも、我々のいずれかが発見し迎撃する」

――――成る程、完全に使い魔を支配するのでなく、ある程度の自我と自由を残させておいて周りを警戒させてたという事ね。

「・・・そうみたいね。私以外のモノを全く見ずに背後の志貴に反応するなんて驚いたわ、それが群体の強みって所かしら」

作戦は失敗した。

ならば後は力で捻じ伏せるしかない。

そう判断してネロに向かって身構える。

「空想具現化も出来ない程弱った状態で私に挑むか。身の程を痴れ、アルクェイド・ブリュンスタッド！！」

ネロが叫ぶと同時に無数の獣達が湧き上り波のように迫ってきた。

一番近くの獣に全力で腕を薙ぐ。

その一撃で先陣を切った獣は原型を留めぬ程に潰れた。

「たかだか死徒相手に世界(空想具現化)と同化しても仕方ないわ、ネロ・カオス。
貴方にはこの爪で充分よ！」

虐殺。
目の前で起きていることを説明するのにこれ以上適切な言葉を俺は知らない。
それほどまでに戦いは圧倒的で一方的だった。
アルクェイドの動きは速過ぎて何をしてるのか分からない。
しかしアルクェイドが優位なのは、通った跡に獣達の骸が積みあがるのを見て理解させられる。

戦いが始まって一分もしない内に既に動いている獣はかなり少なくなった。
そして、アルクェイドとネロの戦いはあっけなく終わる。

「終わりよ、ネロ・カオス」

声が聞こえた時にはネロの体は真っ二つに切り裂かれていた。

・・・これなら初めから俺が居る意味なんてないじゃないか。
そんな事を考えているとアルクェイドがこちらに歩いてくる。
だが足取りは今にも倒れそうなくらいおぼつかない。

「志貴、大丈・・・夫？」

話す事も辛いのだろう、肩を大きく上下させている。

「お前の方こそ大じょ・・・」

視界の隅に何かが写る。
それが何かを理解すると同時に叫んだ。

「逃げろ！アルクェイド！！」

「え！？」

獣の残骸達が液状化し津波のようにアルクェイドに迫る。
アルクェイドも漸く気付いたが、時既に遅く抗う事も出来ずに飲み込まれた。

「くっ・・・何よ、これ」

必死に抜け出そうとするが沼のようになった混沌は絡みつきアルクェイドを逃がさない。

「それは『創世の土』、我が分身の内五百もの結束で練り上げた物だ。たとえ貴様が万全であってもそれを破壊する事は叶わぬ、諦めて我が身の一部となれ真祖よ」

真っ二つに裂かれた体でネロは語る。

「本来の(空想具現化)力さえ使えないというのにこの戦闘力。『白い吸血姫に関わるな』、なるほど、同胞達の忠告は正しかったとみえる。だがそれも今日まで、何者も成し得なかった偉業・・・このネロ・カオスが成し遂げる」

よく見るとネロからは一滴の血も流れてない。
代わりに体の断面から溢れているのは黒い泥ののようなモノだ。

「ネロ・・・貴方その体、どうして!?」

アルクェイドは驚きの声を漏らす。
当たり前だ。
あんな状態で何事も無かったように話しているのだ。
死ににくいとか、生命力が強いとか、そんな次元の話ではない。

「貴様も勘違いしていたようだな、私において形骸の欠損に意味など無い。私は六百六十六の『獣』の因子と、同数の命の混濁に過ぎない。即ち、半身を断とうがこの首を潰そうが意味は無い。元よりカタチの無いモノ達だ、殺されたところで私の中に戻れば再び混濁の一つとして蘇生する。私は一(全)にして六六六・・・滅ぼすつもりなら、一瞬にして六百六十六の命を滅ぼすつもりでなくてはな」

「・・・嘘だろ、有り得ない」

絶望的な事実に唖然としてしまう。

――――そんなの無理だ!!

「有り得ない！！」

同じ音だが違う意味を含んだ叫びをアルクェイドが上げる。

「不可能だわ！何の着色もしてない存在概念をヒトの器に大量に内包すれば、間違い無く貴方自身が消失する！」

「いかにも」

アルクェイドの疑問にネロは即答で肯定した。
あまりの自然さに俺もアルクェイドも声が出ない。

「我々はもはや個にあらず、群体に近い。いずれは『ネロ』という名も無意味な知性のない塊に成り下がるだろう」

自己の消失を淡々と語るネロはここで一息つき、それが楽しみで仕方ないと、初めて笑みを見せた。

「だが・・・それで構わん。今、私の中には『何か解らないモノ』が渦巻いている。これはまさに原初の秩序（セカイ）・・・その先に一体何が在るのか、私は『私』が尽きる前にそれを知りたい・・・それだけを追い求めてきたのだ」

ネロが語り終わると同時にズブズブと再びアルクェイドは『創世の土』に飲まれ始める。

――――どうする！？

このままじゃ二人とも殺される。

アルクェイドも俺も身動きがとれない。
この纏わり付く混沌を何とか出来れば・・・。
そして足元の黒い塊を凝視して初めて気付く。

「これは・・・『線』？」

そう、間違えようが無い。
直死の魔眼によって視覚化された『死』の情報。
こんなモノにまで『線』が視えるのか。
なら、『線』が視えるなら殺せるはずだ。
足に絡む塊の『線』を短刀でなぞる。
予想通りに抵抗もなく解体出来た。

「よし！！」

これを殺せたならアルクェイドを拘束してる『創世の土』とやらも殺せるかもしれない。
思い立つと同時に走り出す。

「貴様程の意識体を取り込むのは骨が折れそうだが、それも喜悦の一つだ。このまま『私』の一部になってもらおう」

ネロは依然アルクェイドの方を見ている。
このまま一気に距離を詰めたいが獣達に阻まれる。

「邪魔だ！！」

――――相手をする時間なんてない。

ひたすら避けながらで距離を詰めていく。
あと十メートル。
――――よし・・・これなら邪魔される前にアレにたどり着――――。
――――――ザキュ。
腹に焼けるような痛みが走った。
腹部を見るとナニかが深々と刺さっている。
恐らく背中の方にも貫通してるのだろう。
「ほう、まだ居たのか人間。ちょうど良い。体を裂かれたばかりで養分が足りてないのでな」
――――――ブシャ。
刺さっていたナニかが抜け一気に血が噴き出ると痛みに堪えられず地面に倒れた。
いつの間にか前方の混沌から黒い鹿が出てきている。
――――ああ、刺さったのはあの鹿の角か。
どうでもいい事を考えてしまう。
いや、そんなことよりアルクェイドを助けなきゃ。
地を這いながら進もうとするが体は動こうとしない。
「ふむ、なかなかの生命力だ・・・良かろう。人間、契約しよう。貴様は生きたまま少しずつ、溶かすように咀嚼すると」

獣達が群がってくる。
俺を食らうために。
・・・ああ、また殺されるのか。

答え（前書き）

ここまでほとんどアルクｏｒシエルルートと変わらなかったけど、この後に（と言ってもすぐではないけど）本編にない方向に行くつもりです。長い目で見てやってください。

答え

傷が熱い。
身体が熱い。

――――――オイオイ。

食われている表面は焼けるように熱い。
でも体の芯はどんどん冷えていく。

――――――もう終わりかよ？

この感覚は知っている。
自分の命が消えていく感覚だ。

――――――退屈にも程があるだろ。

殺される。
また殺される。

――――――仕方ねえな。

あの森の時のように。
あの広場の時のように。

――――――元はお前のだ。

そんなのは嫌だ。
こんなに痛いのも、こんなに怖いのも、このまま食われるのも、こ

のまま殺されるのも嫌だ。

――――――少しだけだが返してやるよ。

それでも俺は殺される・・・コロサレル。

コンナ『死』シカ視エナイセカイデ。

――――――その代わり。

殺される、殺される。

きっと間違いなく殺される。

――――――楽しませろよ？

他の誰にでもなく、他の何にでもなく。

お前は俺に殺される！！

――――――七夜！！

瞬間、血が沸き立つ。

マグマのように熱い血液が体中を巡る。

「は・・・はは」

視界を覆う『線』を切る、切る、切る、切る。

幾重にも、何度も、一つ残さず、全てを。

「あ・・・ははっ、ハハハハハハハハハハ」

ようやく見えるようになった空を見上げる。

そこにはかつて見上げた時と変わらない美しい夜空と月があった。
解体された混沌達は漆黒の血を噴水のように撒き散らす。

「・・・俺を殺したいんだな化け物(吸血鬼)」

ならば俺たちは似たモノ同士。

「・・・いいだろう」

ああ、本当にキレイだ。
こんなキレイな夜だからこそ。

「さあ、殺しあおう、ネロ・カオス」

「貴様・・・」

――――何が起きた!?

あの人間は我々に食われていた。
それが唐突に笑い出した。

ただ単に気が狂ったのだろうと思った。
それまではいい。
だが不可解なのはそこからだ。
ほぼ一瞬にして多くの我が同胞が破壊された。
――――どうやって！？

・・・いや、冷静になれ。
あのアルクェイド・ブリュンスタッドがただの人間を使い魔にするか？
否だ。
つまりあれはただの人間ではない。
だが魔術を使った気配もない。
魔術師であった私が気付かないような魔術を使ったとも考えにくい。
つまりは異能者の類か。
だが、いくら異能者といえども所詮は人間だ。

「さあ、殺しあおう、ネロ・カオス」

思い上がるな、人間風情が。

「・・・その傲慢、その身で償ってもらうぞ人間」

我が同胞達が人間を囲む。

「行け！」

声と共に獣達が一斉に跳びかかる。
そしてなすすべも無く人間は一瞬で食い殺される、そのはずった。
だが人間は一度身を深く沈めた直後に消えた。
いや、消えたように見えた。

事実、跳びかかっていた獣達のすぐ背後に人間は現れた。
と同時に人間の背後の獣達がバラバラになる。

――――――疾い。

我々をもってしても反応できないとは。
だがそれでも・・・。

人間を囲っていた獣の最後の一体が跳びかかった。
人間はそれの眉間に一突きする。
そして我が同胞は消えた。

「・・・馬鹿な！」

そう、消滅した。
真祖でさえ殺せなかった私達が、ただの一突きで、破壊されたので
もなく、跡形もなく存在そのものが消滅した！？

――――――何なのだ・・・アレは！？

「・・・よかろう。貴様を我が障害として認識する」

目の前にいる『敵』は全力で滅ぼさなくてはならない。
我が全ての同胞の本能が同じ事を訴える。

代行者は一人ビルの屋上で気付いた。
あのホテルでの悪夢を彷彿とさせる、むせるほどの血の臭いに。
またネロの被害者が出てしまったのか。
――――ギリッ。
私はなんて無力なんだ。
これほどの血の臭いだ、恐らく生存者の存在は絶望的だろう。
それでも・・・願わずにはいられない。
――――誰でもいい、無事でいてください。
奇しくもその願いは叶えられた。
それどころか奇跡的に被害者は一人もいなかった。
だが、想像していたものとはあまりにかけ離れた光景は喜でなく驚愕を与えた。
――――在りえない。
ネロが居る事ではない。
奴とは昨日ホテルで戦ってる。
真祖が捕らえられてる事でもない。

ネロが相手なら充分在り得る事だ。
遠野志貴が居る事でもない。
確かにそれも驚くべき事ではあるが、彼がどういうわけか真祖と共に行動していた以上充分在り得る事だ。
だがこれだけが信じられない、在り得ない。
どう見ても、遠野志貴がネロ・カオスを圧倒している。

何故だ。
何故だ？
何故だ！？
姫君でさえ滅ぼせなかった私達があの人間に切られ、突かれるだけで尽く消えていく。
既に数十に及ぶ数が滅ぼされている。

解らない。
何が起きているのか理解出来ない。
だが一つだけ解る。
このままでは拙い。
渾身で挑まなければ私達があの人間に滅ぼされる。

先程から真祖は『創世の土』から抜けようとするそぶりもみせない。
もう抵抗する力も残っていないのだろう。

――――ならば。

「集え」

『創世の土』を解き今一度密度を高める。

「待っていろ、奴を殺した後今度こそ貴様を取り込む」

「・・・そう、期待しないで待ってるわ」

ただの獣では奴を殺し得ないことは解った。
だが我が内なる系統樹には貴様らの域を凌駕した生命があると知れ
!!

４メートルはあろうどこかの巨大な悪魔かエイリアンを彷彿とさせ

るモノが襲いかかってくる。
ははっ、いよいよホラー映画じみてきた。
だが何が出てきても関係ない。
この眼が、この血が命令するとおりに、敵を一秒でも早く殺す。
振り下ろされた大鎌のような前足をかわして両断する。
「グギュエェェェェ！！」
それでも怪物は怯む様子も無く、おぞましい叫びを上げながらこちらを食らおうと大口開けて首を伸ばしてきた。
――――だが・・・遅い。
頭を踏み台にして伸びた首の上をあるモノを探しながら駆ける。
見つけた、首の付け根に在る『点』を。
今なら解る。
この『線』を束ねているように視える『点』こそが・・・『死』そのもの！
迷わずその『点』を穿つ。
それだけで巨大な怪物は跡形も無く怪物は霧散した。
残された最後の獲物（ネロ）に向き直る。
『点』を認識して改めて理解した。
「はははははは」

樹木にもコンクリートにもネロにも大地にも、俺自身にも。
セカイはこんなにも『死』で溢れている。

何なのだアレは・・・。
何をした!?何故私が人間に滅ぼされている!!

「はははははは」

笑っ・・・た?
微かにしか聞こえない、だが確実に笑っている。

――――――ゾクリ。

寒気がする。
奴は獲物を前にどうやって殺すかを考えてる、アレはその類の残虐な笑みだ。
それは私に、間違いなく恐怖を与えた。
・・・在ってはならぬ。

このネロ・カオスがただの人間に恐怖するなど在ってはならぬ！！

「ぬうううぅぅぅぅぅぅぉぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおおあ
あ！！！！」

この身に残る全ての命を纏う。
正真正銘、このネロ・カオスの最後の一撃。
大地を抉りながら一発の砲弾と化す。

我が名はネロ、ネロ・カオス。
数多の吸血種の頂点、祖の一角にして混沌の名を冠する者。
死など遥かの昔に超越した。
埋葬者だろうと、魔術師だろうと。
真祖でさえこの私を殺す事は敵わなかった。
だと言うのに何なのだ、貴様は！？

「ぬうううぅぅぅぅぅぅぉぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおおあ
あ！！！！」

ネロが叫びを上げ、その身を混沌が覆っていく。
そして灰色の巨人が現れる。

「はあああああああああああ！！」

巨人は爆音と共に砲弾となってこちらに跳んできた。
直撃すれば俺は一瞬で圧殺されるだろう。
だが避けない、避けるなんて選択肢は存在しない。
真っ直ぐにネロに向かって駆け出す。
ネロの胸に在る『点』だけを見据える。

――――お前にいくつ命があろうと関係ない。俺が殺すのはネロ・カオスという『存在（セカイ）』そのもの。その世界を殺す！！

――――――ズゴシャッ。

振り下ろされた巨人の豪腕が大地を砕いた。

私は敗北した。

この目の前にいる人間は私の腕を掻い潜り、私の胸に深く刃を突き立てている。
私にとって、本来ならこの程度の傷は致命傷になり得ない。
だがその傷からネロ・カオスの存在を構成する大切なモノが消えていくのを感じる。
私は、私達はこのまま消えるだろう。

不思議と無念を感じない。
それどころか満足感と喜びを感じる。
私はこの感覚を知っている。
人間であった頃から知っている、だが数十年以上も久しぶりに感じた感覚。
かつてこのチカラ(獣王の巣)を完成させた時、かつて蛇と共に創世の土を考案した時以来感じた事の無かった何かを理解する感動。

だが私は何を理解したのだ？
消える前にそれを――――それだけは知りたい。

答えを求めて自分を殺した人間を見る。
その蒼い瞳を見て答えを得た。

「そうか・・・お前が私の『死』か」

良い。
悪くない最期だ。
やはり超越種の最期は、苦悶にのた打ち回りながら死んでいくか、
自身以上の存在(化物)に呆気無く滅ぼされるものでなくては。
死神に殺されるなど最上のものだろう。
その思考を最後に吸血鬼――――ネロ・カオスは穏やかな満足した顔で消滅した。

答え（後書き）

本編で獣王の巣について出てこないので補足説明を。
獣王の巣とはネロが自身の体内限定で展開する事で世界の修正力を受けないようにして常に発動している固有結界。自身の内側限定で発動する発想としてはＦａｔｅの切嗣の固有時制御も似たようなもの。能力は６６６の命を自身と混同するもの。

記憶を頼りに書いているので間違いがあったら指摘してもらえると助かります。

非日常の終わり

「そうか・・・お前が私の『死』か」

そう言い残しネロは消えた。

戦いが終わった。

そう思ったら体中に激痛が走り倒れる。

当然だ。

どうしてあんな動きが出来るのか、自分でも理解出来ないような動きをしてたのだから。

だがそれ以上に頭痛が酷い。

かつて無いほど長く『死』を見ていたのだから仕方無いかもしれない。

メガネを掛けて視界から『線』を消す。

しかし痛みはちっとも引かない。

激痛で意識が薄れていく。

「お疲れ様、志貴。今夜は貴方のおかげで助かったわ」

陽気にアルクェイドが話しかけてきた。

良かった、無事みたいだ。

「アルクェイド・・・『点』が・・・視えたよ」

いよいよ気を抜くと失神してしまいそうだ。

「そう。でもそれより志貴、大丈夫？早くその傷を治癒しないと死

んじゃうわよ」

・・・こいつは俺を何だと思っているんだろうか。

「あのな・・・俺は人間・・・だぞ。治癒なんて・・・出来るわけ・・・ないだろ、出来るもん・・・なら・・・勝手に・・・やってくれ」

「え、いいの私が治しちゃって？そういうコトなら早く言ってくれればよかったのに」

だめだ、意識をもう保てない。
あとはアルクェイドにまかせよう。

「人の使い魔を受け入れるのはイヤだけど・・・っと、これなら私が少し後押しするだけで・・・ってあれ？上手くいかないな」

・・・俺、死んだな。
不安を煽られる言葉を聴きながら、自分が助かるかどうかを確認する術もなく遠野志貴は意識を失った。

戦いの終わりをシエルは木の陰に隠れて見ていた。
彼女の心境は未だに驚愕で染まっている。
遠野志貴がネロを消滅させた。
私や真祖でも倒せなかったアレを。
信じられない。

何故真祖と一緒にいるのか、どうやってネロを殺したのか。
聞きたい事は山ほどあるが今はいい。
彼には休息が必要だ。
然るべき時に聞けばいい。

「え、いいの私が治しちゃって？そういうコトなら早く言ってくれればよかったのに。人の使い魔を受け入れるのはイヤだけど・・・」

この様子な真祖に任せても大丈夫そうだ。
そのままその場を立ち去ろうとするが、真祖の不吉な言葉がそれを許さない。

「ってあれ？上手くいかないな」

――――――な！？

慌てて振り返る。
そこには真祖がネロの残骸を手に首を傾げていた。
遠野君はそのままでは危険な状態なのは一目瞭然だ。

「何をしてるんですか！貴方は！？」

気が付いたら怒鳴りながら彼女に詰め寄っていた。

「なっ！貴方！！」

私を見た真祖が身構える。

「今は貴方と戦う気はありません。それより何ですかそれは！いくらネロの残骸が方向性のない命の種だからってそんな滅茶苦茶な方法で人の体に馴染むわけがないでしょう！貸しなさい！！」

私の登場と言葉に驚いている真祖から強引にネロの残骸を奪いとった。

「全く、中途半端な魔術の知識でどうにかしようとするからこうなるんです・・・っとコレでよしと。さて」

治療を終えて真祖――――アルクェイド・ブリュンスタッドの方を向く。

後回しにしようと思っていましたが、彼女が相手なら遠慮する必要はありませんね。

「真祖、何故貴方が遠野君と一緒に行動してるのですか？」

「・・・貴方には関係ないでしょ」

・・・予想通りの答えが返ってくる。

だがそれでも確認しなくてはならない。

「・・・遠野君が貴方と行動してるのは彼自身の意思ですか？」

「安心しなさい、貴方が心配してるような事はしてないわ」
・・・嘘は無いと思う。
実際、意識を失う直前の遠野君は自然だった。
「・・・信じましょう。ですがこれ以上彼を貴方に巻き込むのは止めなさい」
「解ってるわ・・・元々ネロを倒すまでの契約だったもの」
どこか寂しそうに真祖は応えた。
驚いた、彼女もこんな表情もするのか。
「とにかく、志貴は大丈夫なの？」
「ええ、しばらくすれば何事も無かったように動けるでしょう」
「そう・・・それじゃ、志貴を家に連れて行くわ」
そう言って彼女は遠野君を担ぐ。
「・・・一応お礼を言うわ、ありがとう」
・・・信じられない。
まさか真祖に礼を言われるなんて。
だがそれはそれとして、まだ聞かなくてはならない事がある。
「まちなさい！！」

「何、まだ何かあるの？」

「貴方、遠野君の家を知っているんですか？」

「・・・・・・知らない」

この吸血鬼は・・・。

蝉の鳴き声が響き渡る。
その命を削りながら必死に叫び続けるその姿は儚いけど力強かった。
けれど必ず終わりはやってくる。
それも驚くほど唐突に、呆気無く。
僕の終わりもそうだったように。

「う・・・ん・・・痛っ！」

全身に走る鋭い痛みで目が覚める。

「ここは・・・俺の部屋？」

生きているって事は、どうやらアルクェイドは何とかしてくれたらしい。

「おはようございます、志貴様」

体を起こすと、ベッドの近くに翡翠が立っていた。

「あ、おはよう翡翠・・・えっと俺いつの間にこの部屋にいるの？」

「はい。昨日の夜中に玄関の方で何か物音がしたので確認に向かったら、志貴様が扉に寄りかかった状態で寝ていらしたので姉さんと共に部屋へ運ばせていただきました」

・・・なんか怒ってる。

一見いつもの無表情に見えるけど確実に怒ってる。

まあ当然か。

屋敷に帰った次の日に朝帰りで、その翌日に無断外泊。

翡翠が起こるのも仕方ない。
翡翠でこれだから秋葉はどれほど怒っているんだろうか・・・。
想像さえしたくない。

「今姉さんを呼んできますので、ここでお待ちください」

「ああ、分かった」

有無を言わせない迫力で言い、翡翠は琥珀さんを呼びに行った。
・・・なんで琥珀さんを？

――――コンコン。

「どうぞ」

「失礼します、志貴さん」

琥珀さんは色々な荷物を持ってやってきた。

「それは？」

「志貴さんの治療道具に決まってるじゃないですか」

「治療？なんで」

「・・・」

しばらく無言でこちらを見つめた後、大きなため息をしてから琥珀さんは答えた。

「志貴さん、もしかして気付いてないんですか？だとしたら鈍いにも程がありますよ。シャツの下を見てください」

言われて見ると包帯やら湿布やらであちこちに治療がされていた。

「全く、この二日間一体何をしてたんですか？体中ボロボロですよ」

・・・ヤバイ。

意識したら急に痛み出してきた。

「・・・その様子だと本当に気付いてなかったんですね」

もう一度ため息をして琥珀さんは続ける。

「湿布と包帯を換えますからお洋服を脱いでください」

「いや、それくらい自分でやるよ」

「背中の方とかも出来るんですか？」
琥珀さんの言う通りだ。
恥ずかしいが頼るべきだろう。
「じゃあ、すみませんけどお願いします」
シャツを脱ぐと琥珀さんが包帯を換え始めた。
「それにしても本当に何があったんですか？こんなになるなんて」
「そんなにひどいんですか？」
「それはもう。軽度ですが筋肉の部分断裂に間接部の炎症、あとあちこちで筋肉炎や腱炎を起こしかけてますね。準備運動なしでトライアスロンをしたとしてもここまで酷くはなりませんよ？」
よく分からないが、とにかく大変な事態になってるのは分かった。
「えっと・・・そのケンカ？かな」
「・・・その腕の怪我もですか？」
「まあ」
「それ、どう見ても大型の肉食獣に引っかかれたような傷ですよ？」
「ははは・・・たまたまそんな風に付いただけですよ」
どう考えても苦しい言い訳だ。

しかも琥珀さんの言ってる事は大体あってる。
実際は肉食獣どころか吸血鬼につけられた傷だが。

「はあ、まあそういう事にしておきますね。ただ無理も程々にしてくださいね、ただでさえ志貴さんは体が弱いんですから。」

琥珀さんの優しさがすごくありがたく、それと同じくらい申し訳なかった。

「はい、終わりました。次は下の方をやるのでズボンを脱いでください」

なっ！！

「いやいやいや！！そっちさすがには自分でやるから・・・ってあれ？」

そういえば下半身の方にも治療がしてある。
冷静に見るとと服も寝巻きにかわってる。

これはつまり・・・。

「あの・・・下の方も治療されてるってことは」

自分の顔が赤くなっていくのが分かる。
それを見てる琥珀さんがあやしい笑みを浮かべていた。

「はい、治療は全て私が行いました。着替えの方は翡翠ちゃんに手伝ってもらいましたけど。翡翠ちゃんったら今の志貴さんみたいに顔を真っ赤にしてすごく可愛かったですよ」

マテマテマテマテ。
それは恥ずかし過ぎる。
寝てる間に女の子二人に着替えさせてもらうって新手の幼児プレイですか？
・・・いや落ち着け。
二人は治療とか使用人の務めとしてやってくれたんだ、変なことを考えるな。

「これ以上迷惑かけたくないし後は自分でやるよ」

精一杯に平常心を装いつつ断る。

「私は構わないんですけど、志貴さんがそこまで言うならお任せしますね。この湿布を――――――」

琥珀さんはどこにどう処置をするかを分かり易く説明をする。

「終わったら居間で秋葉様が待っていますから、それまでに言い訳を考えておいてくださいね。秋葉様、大変ご立腹な様子だったので覚悟しちゃってください」

一通り説明と忠告を終えた琥珀さんは部屋を後にした・・・と思ったらドアを出てすぐ振り返り、一層あやしい笑みで去り際に止めの一言放った。

「志貴さんて結構ご立派なのをお持ちですね」

・・・もうお婿に行けない。

一通り治療を終えて居間に向かう。

正直、怒っているであろう秋葉のことを考えると心が折れそうになる。

逃げ道なんてないんだけど。

覚悟も出来ないまま居間に着いた。

「遅いです」

扉を開けると同時に容赦のない言葉が飛んでくる。

「座ってください」

促されるままに秋葉の正面に座る。

悪い事をして教師に怒られる子供の気分だ。

「さて、この二日間何をしていたか教えてください」

――――吸血鬼と吸血鬼退治をしてました。
事実だがコレを真剣に言ったら間違いなく病院に連れて行かれる。
そうでなくとも、あんな血生臭い事を秋葉に話したくない。
「・・・言えない」
「何故ですか？」
「それも・・・言えない」
「・・・」
しばらく重い沈黙が場を支配する。
「分かりました。兄さんにも兄さんの事情があるのでしょう、今回はこれ以上追求はしません。ですがせめて連絡くらいはしてください」
今回は、と言う所を強調しながらも秋葉はこれで終わりにしてくれるようだ。
「うん、心配かけてすまない」
「別に心配なんてしてません！」
「え、そうなの？じゃあ何で平日のこんな時間に屋敷に居るんだ？てっきり俺の所為かと思ったんだけど」
「そ、それは・・・えっと・・・「志貴さーん、お電話ですよーー

ーー」」

秋葉が何か言いたそうにしてると琥珀さんが大きな声で呼んできた。

「えっと、じゃあ悪いけど・・・」

「あ、はいどうぞ」

どこかほっとした様子で秋葉は答えた。

そのまま琥珀さんの所に行こうとして立ち止まる。

「兄さん、どうしたんですか？」

色々あったが、家に帰ってきたら必ず家族に言わなくちゃいけない事をまだ言ってなかった。

「言い忘れてた。ただいま、秋葉」

「はい、お帰りなさい兄さん」

非日常の終わり（後書き）

琥珀さんに最後の言葉を言わせたかった、後悔は無い。
でも不快に思った方がいたらすみません

日常の中の異常の影（前書き）

累計アクセス数３０，０００突破ありがとうございます。
皆さんに読んでもらっていると思うと力になります、これからも色々お願いします。

日常の中の異常の影

「電話って誰から？」

「はい、志貴さんのご学友で乾さんという方からです」

「ああ、有彦か」

一体何の用だろう？

受話器を受け取る。

「もしもし、俺だけど。どうした有彦？」

「おお！遠野！！良かった、無事だったんだな。心配したぞ」

「・・・気持ち悪い。切るぞ」

「悪い、悪かった。だから待て、確かに俺はそんなに心配はしてないが、してる奴が二人いるから待て。今変わる」

誰だろう？

自分で言って悲しくなるが、遠野志貴の交友関係はかなり狭い。

さらに悲しい事にまともな友人と言えば有彦くらいしかいないはずなのに。

「もしもし遠野君ですか？」

「先輩？」

そういえば最近になって自分の交友関係が少し広がったんだった。
その一人がシエル先輩だ。
「大丈夫ですか？少し元気がでたと思ったらすぐに休んじゃいましたけど」
「あ、はい。心配かけてすみません」
「体調の方は変化ありませんか？」
「・・・？はい、大丈夫です」
確かに俺は体が弱い方だし、それ（厳密に言えば別の理由のほうが大きいが）で先輩のお世話になったこともある。
けど今の先輩の言い回しは別の事を言ってる感じだ。
「それならいいんです。あ、はい、すぐ変わりますから落ち着いてください」
「別に有彦なら変わらな「も、もしもし遠野君？」」
聞こえるはずの無い声が受話器から聞こえた。
シエル先輩と同じように最近になって遠野志貴と交流を持つようになった人物。
自分が中学生の時に助けたという少女。
吸血鬼に食われ、彼女を守るという約束を守れなかったはずの弓塚さつきの声だ。
「なん・・・で？」

うろたえる頭はこんな言葉しか絞り出さない。

「え、えっとね私、遠野君と別れた後に家で熱が出てね、それでホテルのレストランはまた今度にってことになったの。結果的にそれで無事だったんだけどもしかしたらそれで遠野君が心配してるんじゃないかなって思っ――――――」

――――ドサッ。

「え！もしもしどうしたの！？遠野君、変な音がしたけど」

「ご、ゴメン。安心して腰が抜けただけだから」

無様にも彼女が無事だと知ったとたん、急に力が抜けて床に尻餅をついたのだ。

起き上がりながら隣で何事かと心配してる琥珀さんにも大丈夫だと伝え、再び受話器に向かって話し始める。

「とにかく無事でよかったよ」

本当によかった。

「ニュースを見た時は驚いたよ。約束を守れなくてごめん、弓塚さん」

「え！？あ、いいよ。実際私、危ない目にあってないし」

「それでも、ごめん」

「・・・うん、ありがとう」
その後、暫く他愛の無い話を少しして会話は終わった。
「うん、それじゃあまた学校で」
別れの挨拶をして電話を切る。
大切なものを失わなかったという思いが心を少し軽くした。

電話を終えた後自分の部屋のベッドで休んでいた。
体を動かすと全身に痛みが走る。
琥珀さんが言うには当分激しい運動は絶対厳禁だそうだ。
だが動かないでいると自然と思考は一つの疑問へと向かう。
あの底から湧き上るような。
――――ロセ。
あのネロと対峙した時の。

――――コロセ。

あの初めてアルクェイドを見た時の。

――――コロセコロセコロセ。

心地良いまでに強烈な殺意は何だったのか？

――――コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ。

「はっ！！」

再びあの感覚に飲み込まれるような錯覚に飛び起きる。

寝ていてもむしろ疲れる。

肉体に鞭を打ってでも何かをしていないと精神がもたなくなりそうだ。

痛む体を動かし部屋を出る。

「あれ、志貴さんどうしたんですか？」
台所を覗いたらちょうど琥珀さんと目が合った。
「なんか落ち着かなくて・・・何か手伝える事ありますか？」
少し考えるような仕草をして琥珀さんは答えた。
「それじゃあお願いしちゃいますね。これ、洗ってください」
そう言っていくつかの野菜を渡してくる。
それを受け取って流し台に向かう。
「それにしてもさっき、電話中に倒れたのには驚かされましたよ。本当に大丈夫なんですか？」
背後でトン、トン、とリズム良く包丁を動かしながら琥珀さんは訪ねた。
「はい、本当に大丈夫です。さっきも言った通り腰が抜けただけですから」
洗い終わった野菜を渡す。
琥珀さんは受け取るとすぐにその野菜を切っていく。
「ホテルの集団行方不明のニュース知ってますか？」
「はい、昨日のやつですよね」
「それのホテルの客のリストに知り合いがいたんです」

一定の間隔で続いていた包丁の音が止まる。
振り返ると琥珀さんは心配そうな顔でこちらを向いていた。
「でもその知り合いが当日に行くのをやめて、それで無事だって知って安心してそのまま・・・」
ぱあっ、と明るい笑顔を浮かべた後、琥珀さんはイタズラっぽく続ける。
「倒れちゃった、と。でもその人運がいいですね。危うく行方不明になってたかもしれませんし」
「うん・・・助かってよかった」
もしあそこに弓塚さんが居たらと思うとゾッとする。
「その人、志貴さんにとって大切な人なんですね」
「えっ？」
作業を再開した琥珀さんが突然そんな事をいった。
「だって大切でもない人のためにそんなに心配するなんて普通じゃないですよ。あ！もしかして彼女さんですか？」
「ち、違います！」
ここに秋葉が居なくてよかった、そう思いつつ本当にいないか周りを見回す。

「ふふふ、冗談ですよ。でもそんなに必死に否定するなんて怪しいですね。もしかして本当にかの痛っ！！」

その声に慌てて振り返ると、琥珀さんの指から鮮やかな赤い液体が垂れていた。

「あはは、切っちゃいました」

軽い口調で言うが、傷口からドクドクと流れる血の量は少なくない。ほっといて止まる出血の仕方ではないのは一目瞭然だ。治療が必要だがそれに必要な物が何処にあるのかも分からない。

「秋葉か翡翠を連れてきます！」

急いで台所を後にしようとしたところで突然の浮遊感に襲われる。抗うことも叶わず、結局廊下に出た直後に勢いよく倒れた。

「まったく、兄さんは」

擦り剥いた腕にガーゼを貼りながらブツブツと何度目か分からなくなった小言を秋葉は呟いている。

結果から言うと俺は走り出した直後に貧血を起こし盛大に転んだ。そして偶然にもその時通りかかっていた秋葉と翡翠に事情を説明して琥珀さんと一緒に治療を受ける事になった。転んだ直後の二人の可愛そうな人を見る目が痛かった。

「はい、兄さんの方は終わりました」

そう言われて腕を見るとしっかりと包帯が巻かれていた。

「なあ、ちょっと大げさじゃないか？」

「何を言ってるんですか、そういう擦過傷も危ないんですよ？」

秋葉の代わりに答えたのは翡翠に包帯を巻かれている琥珀さんだ。何でも翡翠は男に触れるのが苦手らしい。

「琥珀さんのに比べたら全然大した事ないですよ。血がたくさん出てましたけど大丈夫なんですか？」

ちょうど巻き終わった包帯を見ると薄っすらと赤色が滲んでいる。

「大丈夫ですよ、動脈の方は無事ですし痛みの方も痛くないって思えば痛くないですし」

「痛くないって思えば痛くないって、そんな訳ないじゃないですか」

「本当ですよ、この指が自分のものじゃなくて人形のものだと思い込むんです。そうすると怪我をしているのは私じゃなくて人形だから痛くなくなるんです」

「・・・・・・」

何故か言葉が出なかった。
見た目はいつもと同じ笑顔のはずなのに、虚ろで呑み込まれるような感覚がする。
ナニか、いつもの琥珀さんと決定的にナニかが違った。
同じモノを感じているのか、秋葉と翡翠は俯いてしまっている。
その笑顔はあまりにも歪で笑顔じゃないみたいだ。
それはまるで・・・。

「琥珀・・・さん？」

「はい？」

思わず口から出た一言に、彼女は今度こそいつもと何一つ変わらない笑顔で答えた。

「いや、なんでもない」

だが今度は、その変わらない笑顔にさえ違和感を感じたのはどうしてだろうか？

治療、夕飯と終えてやる事も無いので自分の部屋でに戻ると翡翠の手でいつの間にかベッドメイクは終わっていた。
遠野志貴の部屋には娯楽のための物も無いので意味も無く呆けるしかない。
だからまた、答えの解らない、もしかしたら解りたくない問題のスパイラルに陥る。

俺が――――遠野志貴が感じる突発的で抗えない程強烈な殺意は何か？
もしまた、初めてアルクェイドに会った時のように理性を失ったら俺は・・・本当に・・・殺人鬼に・・・。

「・・・違う」

何が違うのか分からないが自然にそう呟いていた。
ちょうどその時ドアからノックの音がした。

「どうぞ」

「失礼します」

音も無く上品に扉はゆっくりと開けられる。
きっちりとしたお辞儀をして入ってきたのは翡翠だった。

「どうしたの、翡翠？」

「いえ、何か御用が無いかと思いまして」

「うーん、特に無い・・・いや、えっと、なあ翡翠」

「はい、何でしょうか？」

「さっき治療中に琥珀さんの様子が・・・その、変だった気がしたんだけど」

聞いた瞬間ビクッと反応したがすぐにいつもの無表情に戻った。
いや、戻そうとしたのだろう。
だが苦しそうな、悲しそうな、後悔するような、色々な自責の念が表情の端々から読み取れる。
一見無表情な彼女も、よく見ると様々な感情表現をするのだ。
もっとも、その変化もかなり小さいものだが。

「そうですか？私はそのような事は無かったと思いますが」

きっとこの話に触れて欲しくないのだろう、声もわずかに震えていた。

「・・・そっか。翡翠がそう言うならきっとそうなんだろ。ごめん、俺の勘違いみたいだ」

出来る限り自然な笑顔を作り、この話は終わりだと伝える。

「すみません、志貴様」

騙せてないと気付いているからか、それとも俺に嘘をついた事に対してか、謝罪を一言だけ言って翡翠は部屋を後にした。

ベッドに寝転びながら考える。
俺の知らない何かがあるんだろう。
だけどそれは俺が、他人が軽々しく踏み込んでいいことではない。
だから今はもうお終いだ。
だけど願わくば、翡翠や琥珀さんがあんな顔をしなくて済むようになることを。

そう言えば、あの時の琥珀さんを誰かに似ていると感じた。
誰にだっけ？

思い出そうとしても思い出せない。
誰だ？という思考のループはゆっくりと眠りへ導いてくれた。

終わりはまだ遠く（前書き）

月姫の漫画の最新刊買ったけどあの終わり間際からもう一冊出せるんだろうか。

終わりはまだ遠く

「・・・なんでこんな事に」

遠野志貴は戦場を走っていた。

吸血鬼退治なんていうとんでもない出来事を終えて日常に帰ってきたはずなのに。

今朝も無茶をしすぎたせいで体中が痛む事意外、いつもと変わらない目覚めを迎えたはずなのに。

先ほどまで和気藹々としていた知り合い達が、敵意を剥き出しにして争っている。

全員目的は同じ、ただ一点を目指しているのだ。

あまりの人口密度のせいでかいた汗によって張り付いたシャツが気持ち悪い。

クラスメイトの加藤君が目の前で脱落した、これが終わったら告白するなんて言うからだ。

だがそれでも止まるわけにはいかない。

目的の品を手に入れるためにあらゆる障害物を掻い潜り、数多のライバルを蹴落としていく。

全ては彼女たちの信頼を裏切らないため。

そして己が欲望のために。

そう、全ては『本日限定！フランスのあの巨匠（ミシ○ラン☆☆）にわざわざ作らせた！？最高級スペシャル＆デラックスプディング。先着１５０個のみ、お一人様四つまで。お値段なんと一個６００円、今日は大赤字！！』を購買で買うために！！

・・・つまり、現在遠野志貴がしてるのは所謂パシリである。

「・・・くそ、あそこでグーをだしてれば」

「遠野君大丈夫かな？」

彼が向かった戦場の最前線、もとい購買部の方に目をやり思わず口にしてしまう。

「ああ・・・ダメかもな。見ろよ、スゲー、俺初めてマンガみたいに人が吹っ飛ばされるのを見たぜ」

「確か遠野君、激しい運動を禁じられてるって言ってませんでしたっけ・・・」

乾君とシエル先輩も想像を遥かに超える激戦に心配を隠せない。

しかしもはや後の祭りだ。
助けに行こうにもあの人だかりのどこに居るかも分からない、そもそもあれ程の人間バリゲートを越える術なんてないんじゃないかな。
「パシらせて言う事じゃねえけど、何でこんなものが購買で売ってるんだ？」
・・・その答えは誰にも分からない。
「この様子だと時間がかかりそうですね、遠野君」
先輩の言うとおり人の塊が消える様子は見られない。
そっちから変な奇声が聞こえた気がしたけど気のせいだと思う事にした。
遠野君を待つ間、昼食を既に食べ終わってる私たちは自然と雑談をしていた。
「そう言えば、乾君も弓塚さんも遠野君とはいつ頃からの知り合いなんですか？」
「俺は小学校の時からで弓塚は中学の時からっすよ」
「うん、でも私が遠野君に話しかけるようになったのはつい最近だけど」
「そうなんですか、とても仲良さそうに見えますけど？」
他の人から見るとそう見えるのかな、少し嬉しいやら恥ずかしいやら。

・・・でも。

「そんな事ないですよ。遠野君は誰にでも平等優しいですし、それに・・・時々遠野君が無性に怖くなるんです。何かしてるわけじゃないのに傍に居るだけで怖くなる時が。やっと話しかけれるようになったのに・・・」

「「・・・・・・」」

・・・あれ？

私、今勢いでトンデモナイ事を言っちゃった！？

二人とも目を見開いて驚いてるし。

自分の顔が熱くなっていくのが分かる。

「ほーう、弓塚は遠野の事をよく見てるんだな」

乾君がうんうん、と頷きながら言った。

「どういう事ですか？」

シエル先輩が続きを促す。

よかった、話の流れが変わってきた。

乾君は椅子に大きく寄りかかって喋り始めた。

「遠野の奴、社交性が無いって訳でもないのに俺くらいしかつるんでる奴いないでしょう？」

確かに中学の時から遠野君の周りに乾君以外の人が集まる事が殆ど無かった。

「あれは、遠野が周りのために自分から距離を置いてるんです」

「どうして？」

「あいつは自分がそこに居るだけで周りにさっき弓塚が感じるって言った不安を感じさせるって知ってるからだ」

「・・・その不安の正体を乾君は知ってるんですね？」

今まで見た事が無い真剣な表情で先輩は続きを促した。
乾君は数秒黙った後、小さな、それこそ注意しなくちゃ聞き逃すような声でたった一つの音を発した。

「・・・『死』」

「え？」

思わず間の抜けた声を上げてしまう。

「遠野の奴、普段は普通に動けるのに、よく突然貧血を起こして倒れるだろ？医者が言うにはかなり異常な事で、しかも倒れてそのまま死んでもおかしくないそうだ。そんな事をあいつは自然な事として、『死』が常に傍らに存在する事を受け入れてるんだ。普通、人は『死』ってものを無意識に考えないようにしてるんだ。けど、あいつの傍に居ると半ば強制的に『死』を感じさせられる。だからあいつの傍に居ると不安を感じるんだ。弓塚が感じた怖いってのはそれだな」

「・・・・・・・」

言葉が出ない。
乾君は大切な事を色々言っていたけど、遠野君がいつ死んじゃってもおかしくないという事実が他の物事の理解を邪魔する。

「乾君は平気なんですか？」

重苦しい沈黙を破ったのはシエル先輩だった。

「ああっと・・・俺は色々あって『死』っが傍にあるって事を『知って』いたんですよ。だから『死』が傍にある事を『受け入れてる』あいつの近くに居ても大丈夫だったんです。まあそのせいで最初は俺が一方的に目の敵にしてた時期もあったんですけど。ようは、あいつと対等に付き合うにはあいつと同じような価値観が無いとキツイって事です」

乾君はさらりと流したが死が近くにある事をを知っていたと言う事はそれだけの事に遭遇したと言う事だ。
何か辛い事を思い出したように、苦い表情をしている。

沈黙が場を支配しかけた時、孤軍奮闘していた戦士が凱旋を果たした。

「お・・・お待たせ」

あの激戦の中、遠野君はしっかりと四人分のプディングを買ってきていた。

激戦の果てに手に入れた戦利品は確かにその価値があった。
美味い、いやむしろ美味過ぎる。
これは俺が知っていたプディングとは違うものだ。

周りを見回すと勝者は皆感激し、敗者がそれを遠巻きに見ている構図が出来上がっていた。
だが同情はしない、世の中は常に弱肉強食なのだ。

「ああ、美味かった」

有彦は早くも自分の分を食べ終わってた。
残念ながら、いくらデラックスと言ってもあくまでプディングなのだ。

俺の分も最早残り僅か。
口惜しいが幸せは長く続かない。
未練はあるが最後の一口を食べた。

――――さよなら、小さな幸福の時よ。

思わず涙がこぼれそうになる。

「遠野、それはさすがに気持ち悪いぞ」

有彦が失礼な事を言ってきた、この感動が分からないのかこいつは。

「ほ、ほら。遠野君は苦労して手に入れたんだから感動も人より大きいんじゃないかな？」

すばやく弓塚さんがフォローを入れてくれた。

けど気持ち悪いについては否定してくれないんだな。

「え、えっと。そう言えば遠野君学校を休んでたじゃないですか、一体何をしていたんですか？」

明らかに話を強引に変えてシエル先輩が尋ねてきた。

そんなに変だったんだろうか、俺。

「えっ・・・と」

当然ながら本当の事なんて言えない。

あれこれと考えるが何も浮かばない。

「黙秘権を行使させてもらいます」

「お前にそんなものはない」

ニヤニヤと有彦が横槍を入れてきた。

弓塚さんと先輩に目で助けを求めるが二人も有彦と同意権のようだ。

「その・・・その辺をブラブラとしてました」

「「「・・・」」」

やめろ、やめてくれ。

三人そろって俺をその、残念な人を見る目で見ないでくれ。

「はあ、どうしても言いたくないんですね、遠野君は」

諦めたようなため息を一つして先輩が視線攻撃から解放してくれた。

それに有彦と弓塚さんも続く。

「すみません」

これ以上の追求がこない事に安心して胸を撫で下ろしながら謝った。

「で、でも気をつけないとだめだよ遠野君。ただでさえ吸血鬼事件なんてものが起きてるんだから」

「うん」

もっとも、今更いくら気をつけた所で杞憂に終わるのだが。

吸血鬼ネロ・カオスはもう存在しない。

「そうですよ。昨日もまた被害者が出たんですから」

だから、直後にシエル先輩が言った事を理解するのに時間がかかった。

「え！？」

「あれ、知らないんですか？今朝のニュースでもやってましたよ」
ほら、先輩は食堂の隅にある古いテレビを指差す。
ちょうどタイミング良くそのニュースについての報道が行われていた。
どうして・・・。

「はあ・・・」
屋敷の自分の部屋でため息を漏らす。
何故まだ吸血鬼の被害者が出るのか？
その答えを求めても俺の持ってる情報と知識だけじゃ何も分からない。
それでも考えずにはいられなかった。
だからアルクェイドに聞こうと、学校が終わった後にそのまま彼女のマンションに寄ったが、彼女は居なかった。
まさか・・・。
一瞬、厭な考えが浮かんだがそれを振り払う。

「あいつがそんな事をするはずがない」

そうだ。
ほんの僅かな時間だったけどあいつがどんな奴かって事くらいは分かった・・・と思う。
少なくてもあんな惨い事をするはずが無いのは確かだ。
なら一体・・・。

「明日またあいつの家に行ってみるか」

本来この事件は遠野志貴が関わるべきものではないかもしれない。
けどダメだ。
一度関わったのだからもう見て見ぬふりなんて出来ない。
だから。

「今は、明日に備えて休むか」

部屋の明かりを消そうとして、ふと開いていた窓に目をやる。
そこにはどこからか入って来た、恐らくは飼い猫であろう大きなリボンをした黒猫が居た。

「なんだお前、いつから居たんだ?」

当然のように答えはない、が猫は代わりにこちらを真っ直ぐに見つめてくる。

「なあ、お前はこの吸血鬼事件の犯人を知ってるか?」

我ながらどうかしてる。
猫が知ってるはずが無いのに。
つい自嘲をしてると猫はこちらを見ながら小首を傾げていた。
可愛い、これは反則だ。
「・・・いかん」
思わず部屋に招いて遊んでやりたくなったが他人の飼い猫だし、何より秋葉に見つかったら恐ろしい事になると思う、猫よりも俺の方が。
ここは心を鬼にして追い返さねば。
「俺はもう寝るから、気を付けて帰るんだぞ」
そう言って窓を閉めようとするが猫は部屋に入ってこようとする。
「こら」
それを阻止しようと、ぐいっと猫の鼻を指で押す。
不意打ちに怯んだ隙に窓を閉めた。
「ごめんな、主に俺のためだけど君のためでもあるんだ。許してくれ」
そう言って部屋の電気を消してベッドに横たわる。
最後にちらりと窓の方を見ると猫と目が合った。
暗闇でも光る目をこちらから離す気配はない。
少し罪悪感があるので窓に背を向けて目を瞑った。

「ニャオ」

と後ろから一度だけ恨めしそうに鳴き声が聞こえた。

終わりはまだ遠く（後書き）

次はみんな大好き（？）なあのナマモノを出すつもりです。あのウザさをちゃんと出せるだろうか・・・。

猫と女は呼んでいない時にやって来る（前書き）

四万アクセス達成しました、皆様のおかげです、ありがとうございます。

猫と女は呼んでいない時にやって来る

心地良い眠りを妨げるように何かの音が聞こえた。

「志貴」

名前だ。
誰かが俺の名前を呼んでいる。
こんな時間に一体誰が・・・

体を起こし、辺りを捜す。
声の主は部屋の中央に立っていた。
だがそれを見た瞬間、思わず呟いてしまう。

「・・・何だこれ？」

「にゃにゃ！ちょっと、いきなりその反応はないんじゃにゃいの？」

確かに本来なら相手の主張は正しいのだろうが、今回に限っては問題ない。
なぜなら『誰』、でなく『何』と言ったのはそれが明らかに人間ではないからだ。
まず二頭身。
この時点でもはや不思議生物だ、人間なはずがない。
次に猫（？）耳。
さっき、にゃとか言ったし、多分猫だろう。
最後に服を着て人の言葉を話している。
でも俺が知る限り、そういった事をするのは人類とそれに類するものだけだったはずだ。

――――結論、何だこれ？

考察した結果、最初と同じ疑問が出た。

「まったく、これだから最近の若者とかゆとりとかはにゃ」

やれやれと不思議生物はため息ををしながら首を横に振っている。

たったそれだけの仕草だというのに、何故かこう、ひたすらイラッとする。

これと真面目に関わってはならないとナニかが訴える。

だが、何故それが俺の部屋にいるのか？何故俺の名前を知っているのか？他にも聞かなくてはならない事があるから無視する訳にもいかない。

意を決して、せめてこちらが主導権を握ろうとこちらから質問をする。

「えっと・・・おまえは、その、何なんだ？」

「はー・・・度重なる失礼な言動に憤慨するあちし。けど器が大きい故にスルーして答えてあげよう。あちしはグレートキャットのネコアルク、よろしく」

よろしくと言いながら伸ばしてきた手から鋭い爪が飛び出ている。

少なくともこのネコアルクという生物よりは器が大きいのでスルーしてやる事にした。

ネコ・・・アルク。

もしかして猫＋アルクェイドだったりするのだろうか？

服装と髪の色も同じだし。
ただ、これとアルクェイドが僅かにでも似てると感じてしまう事が、アルクェイドに申し訳なくなる。
これが何なのかはこれ以上追及しない方がいいかもしれない、というかしたくない。

「あー・・・じゃあ何で俺の名前を知ってるんだ？」

続けても至極当然の質問をする。
無論俺にこんな（不）愉快な生物の知り合いなんて存在しない。

「ふっふっふ、聞いて驚きたまえ。それはだにゃ・・・あれ、なんだっけ？」

うん、驚いた。
なんでこいつの行動の一つ一つはこんなに人の神経を逆撫でするのだろう。

「じゃ、じゃあ何で俺の部屋に居るんだ？」

怒鳴り散らしたくなるのを必死に押さえ込みつつさらに質問をする。

「うむ、よくぞ聞いてくれた」

ネコアルクはどこからかメガネとワイングラスを取り出した。

「私はグレートキャッツビレッジ、通称ＧＣＢの勢力拡大をしようとしているのだが、それには様々な障害が発生するとこの天才的な頭脳は導き出したのだよ」

どうやらメガネとグラスは知的さをアピールするためのものらしい、まったく役に立ってないが。
というかむしろ馬鹿っぽさを強調している。

「・・・俺の部屋にお前が居る事とそれに何の関係がある？」

「まあまあ慌てない、早い男はモテないぞ少年」

こいつとゆっくり話が出来るやつがいたらその忍耐力は表彰ものだと思う。

「で、その障害っていうのがにゃー・・・」

はあ、とため息をして不思議生物は続ける。

「ツンデレヤンデレナイチチシスターにクーデレ科学兵器弁当メイドに腹黒マジカル割烹着の悪魔、そして憎き我らが天敵スーパーロリチャイナ」

なんかこいつの言っている障害とやらに心当たりがある気がしたが錯覚だろう、いや錯覚に違いない。

「その対策が君にゃのだよ。と言うわけで遠野志貴、お前も猫耳になれ！」

「断る」

・・・理解不能、だめだこれは、これ以上付き合ってられない。
そんな事を考える前に拒絶の言葉を発していた。

知らなかった、人間は反射運動でノーと言えるんだ。

「んー、にゃんで？」

信じられない事に本気で言っているらしい。

「先ず俺はお前みたいな不愉快な不思議生物と関わりを持ちたくない。次にお前の言う障害とやらと何故か何が在っても戦いたくない、本当に何故かだ。最後に猫耳って何だ、そんなの付けて何になる？俺が恥ずかしい以外何も起きないだろ」

「さすがに朴念仁ＥＸは伊達じゃないってか？いやいやだからこそ女たらしの魔眼が発現したのかにゃ？」

私はそんな羨ましいモノは持っていませんよ？

と言うかナニその魔眼？すごく欲しい。

「まあ、とにかく君が猫耳になった上でこちら側に付けば敵方の戦闘力は八割ダウン、もしくは三倍になるのだよ。だから遠野志貴、お前も猫耳にな―――」

「断る」

またしても反射運動での回答に成功した。

しかも反応速度が上昇した。

というか三倍になったら手が付けられない。

・・・別に誰かを具体的に想像なんてしていませんよ？

「・・・にゃらば仕方ない、実力行使で行かせてもらおう」

「ふざけるな、返り討ちにして・・・ってあれ？」

体が・・・動かない！？

「ふっふっふっふっふ、抵抗しなくてもいいのかね？」

「タ、タイム。体が動きません」

「勝負とは常に不平等なものだよ」

畜生正論だよ、不思議生物のくせに。

「と言うわけで、出でよ我が眷族！！」

ネコアルクの叫びと共に何処からか大量にネコアルクが湧いてきた。
その光景はなんて、なんてキモウザいんだろう。
そんな馬鹿な事を考えている間にもネコアルク達は増えていき、じりじりと迫ってくる。

「く、来るな」

身動きが出来ないのだから無様に懇願しか出来ない。
だがそれで止めてくれるなら初めからこんな事はしないだろう。
故に運命は既に決まっている。

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。痛いのは最初だけだから」

「や、や、やめ・・・イヤーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

「・・・さ・・・・・貴・・・ま・・・・」

「う、うーん」

何かが聞こえる。
つい直前にも同じような事があった気がする。

「志貴様」

ああ、やっぱり今回も俺の名前を呼んでいた。
さっきは誰が俺の名前を呼んで・・・

「うわあぁぁ！」

先ほどまで自分がどんな目に遭っていたかを思い出し跳ね起きる。

「あ、あの・・・志貴様、大丈夫ですか？」

ベッドの隣に立っている翡翠が心配そうにこちらの顔を窺っている。

「あ、うん、大丈夫。さっきまで俺の名前を呼んでたのって翡翠？」

「あ、はい、申し訳ございません。うなされているように見えたので、つい差し出がましい真似を」

翡翠は言いながら慌てて頭を下げた。

「うわ！か、顔を上げて翡翠。実際うなされてたから助かった、むしろありがとう。だから、な？」

もし翡翠が起こしてくれなかったらあの続きを、夢とはいえ体験するハメになってしまったかもしれないのだから。

本当に感謝してます。

・・・思い出したら寒気がしてきた。

――――しかし猫、ね。

昨日の黒猫を不意に思い出した。

「猫がどうかしたのですか？」

思考が口に出てしまっていたようだ。

「いや、実は昨日どっかの黒猫が俺の部屋に入ってきてて。そいつを寝る前に追い返したら猫（？）関連で悪夢を見たって、何か出来すぎてるなって思っただけだよ」

まあ、関係があるはずも無いのだが。

「あの、志貴様」

「うん？」

「その黒猫というのは、もしかしてその子ですか？」

「え？」

翡翠が指を指しているのは俺のベッドの上だ。
そして翡翠の言うとおり俺の横で丸くなってすやすやと眠っている、
昨日の大きなリボンをした黒猫居た。

「お、お前どうやって？」

昨日俺は確かに窓を閉めたはずなのに。
猫は当然ながら答えない。

いつも通り学校に行き、いつも通りの他愛のない会話をして、いつものように授業を受ける。
だが心の中がいつもと同じにならない。
終わったはずの吸血鬼殺人が続いている事と昨日アルクェイドに会えなかったこと、この二つの出来事が心の中をかき乱す。

「・・・今日こそ会わなくちゃ」

誰にも聞こえないように小さく呟いて決意を新たにし、今日の予定を考え始める。
とりあえず先ずはあいつの家に行ってみよう、というかそこしかあいつが居そうな場所が分からない。
それ以外の場所は手当たりしだいに探すしかないだろう。
いやそれより昼に気分が悪いと言って早退し、早めの時間から捜すのもありかもしれない、あいつ昼よりも夜の方が元気になるっぽいし。

一通り考えをまとめて教員に見えないよう小さく伸びをした。
その折に窓から外の様子が見えた。
この時間体育の授業は無いらしく校庭に生徒の姿はない、が、中庭の方に物珍しげに辺りを見回す人影が居た。

「・・・いやいや、落ち着け俺。会いたいなんて考えているからそれっぽく見えるだけだ」

先ほどよりも小さく、というかほとんど声を出さずに言った。
二、三回首を横に振ってもう一度外を見る。
相変わらずアルクェイドに似た人物、というかどう見てもアルクェイドが居た。

一気に嫌な汗が吹き出る。

――――あいつは何でこんな所に！どう考えてもあいつが来る様な場所じゃないし・・・って俺か？俺に会いに来たんじゃないだろうな！？

こちらの考えを肯定するように俺を発見したアルクェイドは笑顔で手を振っている。

・・・どうする？

？無視する。

ダメだほっといたら教室に直接来る可能性がある、むしろ高確率で来る。

そしたら終わりだ、色々なものが。

まてよ、来ても知らない人のふりをすれば・・・これもダメだ、それじゃあ俺の名前を知ってる事の説明がつかない。

最悪、

「私にあんな酷い事（殺害）したのに忘れるなんて酷いわ！」

なんて口走りやがったらもう学校に来れない。

事実だから否定出来ないしなお質が悪い。

よって却下。

？教師に追い返してもらう。

これもあいつが俺に用があるって言ったらその時点でアウト。

だからこれも却下だ。

？先手必勝。

よしこれしかない！！

ガタン！！

わざとらしくならないように気をつけながら床に倒れる。

「遠野、大丈夫か？」

またか、と教師はややぶっきら棒に声をかけてくる。

「すみません、気分が悪いので保健室に行ってもいいですか？」

教師は何も言わず頷き授業を再開する。

廊下までゆっくりと進み教室の扉を閉めた後、全力で駆け出した。

猫と女は呼んでいない時にやって来る（後書き）

志貴がどんな目に遭ったかは皆さんのご想像にお任せします。
ネコアルクのあのキャラは表現しきれない。

真の敵は蛇（前書き）

大学受験終わったーーーー！！！
出来る限り早く前のペースに戻していきたいと思いますので今後ともよろしくお願いします。

真の敵は蛇

「あ、志貴」

必死の思いで中庭にいたアルクェイドの所まで走ってきたら第一声がこれである。

「お前・・・なんで・・・学校に」

文句を言う余裕も無いので息も絶え絶えに当たり前の質問だけをする。

「なんでって、貴方に会う為よ？」

「じゃあ・・・俺に・・・なんの用だ？」

「特に無いわよ？」

・・・何を言っているんんだこいつは。

「何よ！用が無ければ会いにきちゃいけないの？」

こちらの怪訝そうな表情から考えている事が伝わってしまったらしい。

「いや、そういうことは無いけど何でわざわざ学校に、しかもこんな時間にくるんだよ！？」

「だって興味があったんだもの」

・・・そうだよな。
こいつがこっちの都合なんて考える筈なんてないよな。
「あ、そうだ！ねえ志貴、昨日は誰の夢をみたの？」
こちらがうなだれているとアルクェイドは思い出したように妙な質問をしてきた。
「夢？」
「あれ、ネロの件のお礼に夢魔を送ったんだけど？」
夢魔って他人に淫夢を見せるっていうやつか。
そんなモノを見た憶えはないが、というか見せられても困る。
・・・夢・・・夢・・・今朝見たアレの事だろうか。
「で、誰が出てきたの？」
せっかく嬉々として聞いてきているのだから正直に答えるべきだろう。
「お前」
「え！！私！？」
驚いている表情と僅かな気恥ずかしさからか顔にほんのりと赤みがさしている様子はとても可愛らしいが残念ながら続きがある。
「を」

「を？」

「二頭身にして猫と混ぜた様な見た目で、人の神経をひたすら逆撫でする自称ネコアルクって名乗ってた不思議生物」

「・・・何ソレ？」

さすがのアルクェイドも理解不能らしく、しばらく呆然とした後、ようやく当然の返答を返してきた。

「俺が聞きたいよ」

「おかしいわね、仕方ないから今夜もう一度送るわ」

「いや、そんなの送られても困るからやめてくれ」

淫夢なんて見せられても困る。

仮に寝相に影響が出てそれを起こしに来た翡翠に見られでもしたらたまったものじゃない。

「それよりも聞きたい事があるんだ」

予定よりも早くなったがむしろ好都合だ。

「うん、何？」

笑顔のままアルクェイドは答えていく。

「ネロはもういないんだよな？」

「ええ、貴方の魔眼で殺したんだもの」
「じゃあなんでまた吸血殺人事件が起きてるんだ！？」
「だってそれはネロとは関係ないもの」
アルクェイドはさも当然のように答えた。
「え！？」
「考えてみなさい志貴、そもそもネロに襲われたら死体なんて残らないでしょ？」
言われてみれば確かにそうだ。
現にあのホテルに居た人々は全てネロに喰われて全員行方不明という事になっている。
「じゃあ犯人は別の吸血鬼なのか？」
「ええ、そうよ」
「そいつは一体？」
先ほどまでと打って変わって難しい顔をしてアルクェイドは黙ってしまった。
「なあ、アルクェイド」
「・・・貴方には関係ないわ」

「な！関係ないって、そん「そこに誰か居るんですか？」」
抗議をしようとした正にその時よく知ったシエル先輩の声が聞こえた。
慌てて声の方に向き直るとちょうど校舎の陰から先輩が現れた。
「あ、あの・・・先輩、これはえっと・・・その」
「もう！遠野君授業中にこんな所に一人で何をしているんですか？」
「え！？」
横を振り向くとそこに居た筈のアルクェイドの姿はもうなかった。
「そう言えば何か話し声のようなものが聞こえましたが誰かいたんですか？」
「い、いえいえ一人でした！！間違いなく一人でした！！聞こえたのは俺の独り言ですよ！！」
「そうですか・・・でもダメですよ授業をサボっちゃ」
「・・・というか、そういう先輩は授業中にこんな場所で何をしているんですか？」
「・・・えっと・・・自主休憩です」
「人のことを言えないじゃないですか、要はそれって先輩もサボりでしょ？」

「ま、まあそうとも言います」

この人は・・・。
しかしアルクェイドの奴が人が来たからって隠れたりするなんてちょっと意外だったな。
まあ、そのおかげで助かったけど。

学校が終わった後、一度家に帰ってからアルクェイドの住むマンションに向かった。
上がろうかどうかを入り口の前で迷っていると好都合な事にアルクェイドの方からでてきた。
しかしこちらを一瞥すると無言のままどこかへといってしまう。

「はあ・・・待てよ」

仕方が無いので歩いて後を追う事にするが、その後十分以上経ってもこちらの話は尽く無視され続けた。
それでも諦めずに追い続ける俺に観念したのか、アルクェイドは漸

くこちらに向きなおった。

「志貴って思ったよりしつこいのね」

アルクェイドは大きなため息の後に苦笑いをしたが、すぐに真剣な表情に戻ってしまった。

「でもダメよ志貴。貴方との契約はネロを倒すまでのものだったし、貴方には普通の生活があるでしょう？わざわざ自分から危険に踏み込む必要は無いわ」

ああ、そうか。

俺が関わるのを頑なに拒否していたのは、ただ俺のことを気遣ってくれていただけなんだ。

ならば。

「それでも俺は・・・」

諦めたような表情でアルクェイドは一人の男を指差す。

「・・・なら、あの男を貴方の魔眼で視てちょうだい。出来れば・・・貴方には普通に見えて欲しいけど」

アルクェイドの言っている事の意味がよく分からないが言われるままに眼鏡を外すといつものように世界に『線』が現れる。

普段から出来れば見たくないこの『線』だが、街中や人が多い場所――――特にこれが『死』だと分かってからはなおさら否応無しに世界が脆いという事を思い知らされるから視たくない。

湧き上る嫌悪感を我慢しながらアルクェイドが指差した男を視る。

それは、信じられないモノだった。

「どう、志貴？」

「どうっ・・・て、あ、あれは・・・人・・・なのか？」

どんな人間にだって『死』は視える。
普通なら数本の『線』が幾つかの『点』を基点にあるだけだ。
だからその男は明らかにおかしい。
その男の体には『死』多すぎるのだ。
ほぼ全身を覆う『線』と『点』はそれが生物である事を否定しているように、ただただおぞましい。

「そう、やっぱり死者さえ殺せるのね、貴方は。命の有無も関係ない動いているもの、破壊できるものなら例外なく停止させれる。・・・なによ、やっぱり貴方の方がよっぽど化物じゃない」

諦めるように、哀れむように言ってアルクェイドはその男に向かって進んでいく。

「あれはもう人間じゃないわ」

アルクェイドに気付いた男は狭い路地裏に入っていき、後を追うアルクェイドもそれに続く。

「お、おい」

慌てて追いかけて入った路地裏ではちょうどアルクェイドが先ほどの男を頭から真っ二つに切り裂いていた。
あまりに唐突な光景に身動きをとることも、声を上げることも出来

ずにいると男の残骸は音もたてずに砂になってしまった。

「今のが吸血鬼なのか？」

「いいえ・・・今のはただの下僕、使い魔よ。アレと同じようなモノは他にもたくさんいるでしょうね。こちら側に踏み込むということはああいう存在と関わるということよ。だから・・・」

――――――これ以上関わらないで。

言葉にしなくても分かる。
これは最後の忠告なのだろう。
確かに、ネロの時のように生命の危機に陥るかもしれない。
それでも、それでも放っておくことなんて出来ない。

「それでもだ、協力させて欲しい。お前だってまだ全快って訳じゃないだろ？何よりそいつを放っておいたら俺の家族とか知り合いとかにも被害が出るかもしれない」

あのホテルの行方不明者のリストに弓塚さんの名前を見つけたときのショックは忘れられない。
もうあんな想いはしたくない。
だから。

「それは確かに俺なんか役に立たないかもしれないけど、俺にお前の吸血鬼退治を協力させてくれ。頼む」

先ほどまで神妙な顔をしていたアルクェイドは驚きをあらわにした後、今度は満面の笑みで俺の手を取った。

「そんな事無いわ、志貴がいれば怖いものなんて何もないんだから！！」

俺とアルクェイドはこれからの事を話す事にしたが、いつまでも路地裏に居るわけにもいかないので近場の公園で話す事になった。

「それで、お前が倒そうとしている吸血鬼ってどんな奴なんだ？」

「ロア、ミハイル・ロア・バルダムヨォン。別名『アカシャの蛇』、それが私たちの敵の名前よ」

「アカシャの蛇？」

「ええ、蛇は転生・無限・永遠の象徴だしロアの特徴を表すには相応しい名前と言えるでしょうね。多くの吸血種は所謂不老不死だけど真祖と違って死徒は血を吸わないと肉体がどんどん劣化してしまうの。ロアは永遠の存在になることを追求した結果、一つの肉体に固執する事を止めて他の個体に転生する事を選んだの」

「転生って・・・どういうことだ？」

「ロアは自身の肉体が滅んだ時に前もって決めた、あるいは特定の条件を満たした人間に乗り移る、いわば遺伝子情報のような存在なの。この町に居る事は分かっているのだけれど誰に転生しているかまでは分からないわ」

「なるほど、ならそいつを見つけて倒せばいいんだな？」

「そうね、けれどロアは恐らく自分の根城から動かないでしょうし、根城を見つけるのも難しいわ」

「・・・それは厄介だな、どうすればいいんだ？」

「当面は地道に志貴もさっき見た死者を狩るしかないと思うわ。ロアに血を吸われた死者は人間を襲い、吸った血の殆んどを親元であるロアに送り吸われた者もまた死者になって人を襲う。この繰り返しでロアは根城から動くことなく力を蓄え続ける事が出来るの。でも逆に死者を狩り尽せばロアは自ら動かざるを得なくなって見つける事も容易になるわ」

「なら早速いくか？」

「いいえ、今日はもう死者は出ないと思うわ。だから行動は明日の夜からにしましょ？」

そんな事でいいのかと疑問はあるが、こと吸血鬼に関してはアルクェイドの方が詳しいのは言うまでも無いので従うべきだろう。

「了解。待ち合わせの場所と時間はどうする？」

「そうね・・・１０時くらいにこの公園で会いましょ」

「分かった、それじゃあまた明日」

醜悪な悪夢・驚愕の現実（前書き）

非常に恐ろしい地震でしたね。
余震や原発でまだまだ予断を許さない状況ですが少しでも多くの人の無事を祈っています。

醜悪な悪夢・驚愕の現実

静まり返った町をアルクェイドが追っている吸血鬼は徘徊する。
別に自ら行動する必要も無い上、それがあの姫君や教会の者に遭遇する危険を孕んでいるのは重々承知しているがせっかく手に入れたこの能力（チカラ）を使いたいのだから仕方ない。
そんな子供じみた理由で吸血鬼は今夜も哀れな人間と言う名の玩具を探す。
幾度もの転生によってあらゆる娯楽が意味を成さない彼にとって、今回の器で初めて得たこの能力（チカラ）は最高の娯楽となったのだ。

この能力（チカラ）で殺すのは楽しい。
いくら殺しても飽きる気がしない。
だからコレを嫌悪するアイツが理解できない。
コレを楽しめないなんて可哀想な奴だ。
もっともこの能力（チカラ）の使い方をその可哀想な奴から教わる事になったというのは中々皮肉な話だが。

声を上げて笑うのを堪えながら吸血鬼は再び獲物を探すことに専念しようとした時、幸運な事に不幸な子羊を見つけた。
有無を言わさず不運な少女をバラバラにしようとするが、襲い掛かる直前に彼女に見覚えがあることに気付く。

――――あれは誰だ？・・・そう最近見た・・・確かアイツの・・・・
ああ、そうだった。

彼女の正体に気付いた吸血鬼は顔に浮かべていた笑みをより一層下卑たものにした。

それは間違いなくこれ以上無くアイツを苦しめるだろう。
そう確信して吸血鬼は自身の娯楽のためにまた一つの命を散らせた。

路地裏に程近い暗がりをおどおどしながら歩く知り合いを見つけた。
嬉々として彼女の元に駆けて行く。
彼女ももこっちに目気が付いたらしく彼女の表情が恐怖で染まっていく。
僅かばかりの視界の暗転。
あまりの恍惚に思わず目を閉じていたのだ。
そして余韻を楽しみながらゆっくり目を開けると、自分の足元に血溜まりに横たわる彼女の生気の無い体があった。

「うわあああぁぁぁ！！！」

叫び声を上げながら起き上がると見えたの自分の部屋と驚いた顔の翡翠だった。

「し、志貴様！？」

「ハア、ハア、夢・・・か？」

いや夢の筈だ。

俺がまた人を殺すなんて夢に決まっている。

「あの・・・志貴様大丈夫ですか？」

「大丈夫、嫌な夢を見ただけだから」

「本当に大丈夫ですか、顔色がよろしくないようですが？」

「大丈夫だよ。ただ夢がやけにリアルだったからちょっと気分が悪いだけだ」

そう、夜の肌寒さ。

白けた路地裏に響く音。

鼻腔に充満する血の香り。

その全てが酷く現実的で、それこそ吐き気を催すほどのリアリティだった。

「大丈夫だ」
それは誰の、何に対する言葉だったのか。

「おはよう秋葉、琥珀さん」
翡翠が居る手前二度寝する訳にもいかないのでさっさと着替えて居間に向かうと秋葉は既に朝食を終えて食後の紅茶を楽しんでいた。
「おはようございます志貴さん」
「驚いた、今日は早いんですね兄さん」
冗談ではなく本当に信じられないという表情で秋葉はこちらを見ている。
人を何だと思っているんだ。
苦笑いを浮かべていると秋葉は今度は次第に心配そうな表情になっていった。

「どうかしたのか？」

「あ、いえ。あの、兄さん、気分が悪いんですか？顔色が悪いですよ？」

秋葉の横で琥珀さんも同じような表情でこちらを見ている。

まいったな、そんなに酷い顔をしているのだろうか。

「大丈夫だって、ただ悪夢を見ただけだよ。翡翠にも同じ事を聞かれたけどそんな顔色悪いか、俺？」

「はい、今もとても無理をしているように見えます」

質問に答えたのは後ろからやってきた翡翠だった。

「それに志貴様は昨日も悪夢を見たとおっしゃっていませんでしたか？」

「それは・・・そうだけど」

だけど今回の悪夢はともかく、前回のはアルクェイドの夢魔の仕業だ。

もっとも説明のしようも無いが。

「・・・志貴さん、お食事はお部屋にお持ちしますので部屋で待っていて下さい」

「・・・分かりました」

最も医療に詳しい琥珀さん（なんと彼女は薬剤師の資格を持っているらしい）が安静にするように指示したため秋葉と翡翠もそうするように無言で促す。
これ以上余計な心配をかけたくないので琥珀さんに従い自分の部屋への道を戻っていく。

志貴がこちらの声が聞こえない程充分離れた事を確認した後秋葉は重々しく口を開いた。

「翡翠、さっきの話は本当なの？」

「はい、昨日はうなされていて今朝は叫びながら飛び起きていました」

「そう」

普通の人なら気にも留めないことだが志貴が相手となると訳が違う。
秋葉は、いや秋葉だからこそそれが良く分かる。
だからどんな些細な変化や異常も安易に見過ごす訳にはいかない。

「・・・・・・・・・・・・」

顔を上げると翡翠は無言でこちらを申し訳無さそうに見ている。

「どうしたの？翡翠」

「・・・その」

「何よ、言いたい事があるならはっきり言いなさい」

翡翠は一度俯いたが、数秒の後に意を決したように顔を上げた。

「秋葉様、志貴様をこの屋敷に呼び戻すべきではなかったのではないでしょうか？」

一瞬、彼女が何を言っているのか理解できなかった。

「な・・・貴方使用人の分際で何を言っているの！？」

湧き上った怒りに任せて怒鳴り散らそうとするが二の句が出てこない。

「・・・っ。ごめんなさい翡翠、言い過ぎたわ」

「いえ、私の方こそ失礼しました」

重苦しい沈黙がながれる。

反論出来ないのは自分も同じ事を僅かに考えていたからだ。

志貴をこの屋敷に連れ戻す事が彼にどれ程の負担になるかは容易に

想像が出来た。
だから彼は呼び戻すべきではないかもしれないと何度も考えた。
それでも会いたかった。
会いたくて仕方なかったのだ。
その気持ちに抗えず、ついに志貴を呼び戻す事にしたのだ。
だが志貴は、そんな我儘で理不尽な理由で唐突に呼び戻されても嫌な顔をせずに笑顔で戻ってきてくれた。
もしかしたら彼に恨まれているのではないのかとさえ思っていた秋葉にとってそれはある種の救いのようなものだった。
それを手放す事なんて絶対にしたくない。

「大丈夫よ、翡翠」

だから誓った。

「兄さんを苦しめている存在があるなら徹底的に排除するわ」

どんな手段を使ってでも。

「そうすれば・・・そうすれば兄さんはこの屋敷に居ても問題ないでしょう？」

強気な言葉とは裏腹に秋葉の表情は許しを請うように弱々しいものだった。

大事をとって学校を休まさせられそうになったが、少しでも異変を感じたらすぐに帰るという条件付きでなんとか学校に行く事を許可された。
この様子だとアルクェイドに協力するために出かける事を許してもらえる筈も無いので秋葉達の目を掻い潜って屋敷を抜け出すことになった。
この行為にさながらスパイをやっているような気になって恥ずかしながら年甲斐も無くかなりわくわくしてしまった。
それ以上に見つかったらどうなるかでドキドキしたが。
しかし幸運な事に誰にも見つからずに抜け出せたのは良いが、また一つ問題が発生した。
アルクェイドが待ち合わせにしたこの公園だが実は意外と広いため、ただ公園で待ち合わせとしか決めていなかったのでアルクェイドが公園の何処に居るかが見当もつかないのだ。
仕方が無いので公園を歩き回ったがアルクェイドと合流できた時には約束の時間を過ぎていて彼女は随分と不機嫌だった。

「だから悪かったって。だけど具体的な場所を指定しないお前にだって非はあるだろ？」

「それはそうかもしれないけど・・・あ、そうだわ！明日からは私が志貴の家に迎えに行ってあげる。そうすれば絶対に遅れないでしょう？」

「な・・・ぜ、絶対にやめてくれ。次からは遅れないからそれだけはやめてくれ」

もしアルクェイドと秋葉が出会ったりしてしまったら恐ろしい事になる意外想像が出来ない。

「そう？いいアイディアだと思ったのに」

これから命がけの殺し合いをしに行くとは思えない程軽い会話をしていると街の人通りの多い場所に近づいた辺りでアルクェイドは歩きながら先ほどと打って変わって真剣な表情でこちらを向いた。

「出来れば志貴には魔眼で視ながらついてきて欲しいの」

「構わないけど、何でだ？」

「私は気配でしか死者を捜せないけど貴方の魔眼なら見て判別出来るわ。私の場合、気配が分かり難かったりしたら見逃す事があるかもしれない。けど貴方の魔眼なら見逃す事もないでしょ？」

なるほど。

確かにあんな異質な存在がまた視界に入れば嫌でも反応してしまうだろう。

アルクェイドの意見に納得して死者を見分ける為に眼鏡を外すといつも通りセカイに『死』が現れる。

すれ違う人々から自分が立っているアスファルトにまで等しくあるソレはただ、ただ気持ちが悪い。

「ねえ、前から気になっていたんだけど、志貴ってその眼鏡を掛け

てると『死』が見えなくなるの？」

自分にとっては既に当たり前になっている事だから気にも留めなかったが冷静に考えれば当然の疑問だ。

「ああ。この『線』が視えるようになって、本当に堪えられなくなりそうだった時に偶然出会った人に貰ったんだ」

「・・・もし良ければその眼鏡少し見せてもらえる？」

一段と険しい表情になってアルクェイドは聞いてきた。

「いいけど壊さないでくれよ」

眼鏡を受け取ったアルクェイドはしばらくそれをまじまじと見た後、驚いたような表情をしてこちらに向き直った。

「これ”ブルー”のものじゃない！志貴、貴方にコレをあげた人の名前分かる！？」

「えっと・・・名前で呼ばれるのを嫌ってたから俺はいつも先生って呼んでたけど確か・・・蒼崎青子だったかな。蒼青って続くのが嫌だって言ってたっけ。・・・もしかしてアルクェイド知っているのか？」

「知ってるも何も、ミス・ブルーはこの世界に四人しか存在しない魔法使いの一人よ。志貴だって知らなかった訳ではないでしょう？」

何も知らなかった恩人の正体をアルクェイドが知っていた事とそのぶっ飛んだ内容にしばらくただ口をパクパクさせる事しかできなか

ったが、時間を置いて冷静になると確かに先生は初対面の時に名乗っていた。

――――――『魔法使い』と。

その事を思い出すと自然と笑いが込み上げてきた。
ただの冗談だと思っていた言葉は真実だったのだ。

「そっか・・・先生は本当に魔法使いだったんだ」

物思いに耽っているとアルクェイドは険しい顔から一変して今度は興味深げに聞いてきた。

「志貴はブルーのことを先生って呼んでるみたいだけど何か教わったりしたの？」

「魔法とかそういった類のことは何も教わらなかったけど、それよりも大切な事はたくさん教わったよ。先生に会えなかったら、きっと俺は本当に狂っていたと思うよ」

「でしょうね。この魔眼殺しがなかったら確実に貴方は壊れていた。『死』なんてモノをを視続けていたら人間なんて、いいえ、たとえ吸血鬼であったとしてもまともではいられないもの。それにしても志貴の言ってるブルーは私の知っているブルーの印象とは大分違うのね」

「そうなのか？」

「ええ。こと破壊する事に関しては右に出るものは居ないって言われてるわ。それでついた通り名がマジックガンナー、他には、破壊

に関してのみ稀代の魔女、果ては人間ミサイルランチャーなんて名前も付けられてるわ」

最後は嫌がらせで付けたとしか思えないな。

「でもこれ本当にすごい魔眼殺しよ。私でも壊せるかどうか・・・えいっ！！」

「うわあっ！！このバカ何やってるんだ！？」

あろう事かこのお気楽吸血鬼は、その眼鏡が無ければ俺が発狂していただろうと自分で言っていたくせにそれの破壊を試みやがった。

「何よ、冗談に決まってるじゃない」

そう言ってアルクェイド頬を膨らませながらはこちらに眼鏡を返す。だけど俺は見逃さなかった。

眼鏡に力を加えた時のこいつの目は間違いなく本気だったのを。

醜悪な悪夢・驚愕の現実（後書き）

累計アクセスがユニークで１３，０００人を超えましたありがとうございます。

各々が理解する時

アルクェイドの言うとおり魔眼殺しの眼鏡を外して死者を探し続ける。
この魔眼を通して映る世界はどうしようもなく脆弱で頼りない。
そんな壊れかけたモノの中で一際脆いモノを見つけた。
その男のほぼ全身を覆う『死』は、あまりの不気味さに吐き気を催しそうになる。

「アルクェイド」

「ええ。あの男、間違いなく死者ね」

どうやらアルクェイドも気が付いているようだ。
男は俺とアルクェイドに気付いたのか、こちらを一瞥した後にゆらりと人気の無い道に消えていく。
男を追おうとしたがアルクェイドの手がそれを妨げた。

住人達が全員寝静まっているであろう時間、遠野邸の書斎にはこの屋敷の住人ではない人物が一人で書物を読み漁っていた。

自身が発する以外の音が存在しない中で、『蛇』を追い続けている教会の代行者シエルは幾つかの確信と幾つかの疑問を得ていた。

様々な呪術やルーンの学術、おおよそ実業家らしくない書物の数々は自分の遠野家がまともでない事の裏づけになった。

ロアは裕福である事や優れた血統を持つ事、そして何より素質を持つ者を転生先の条件にしている。

その点では遠野家はこれ以上無いほど適している。

ならば転生するのは家督を継ぐはずの長男だ。

確かに結果として遠野志貴は家督を継ぐことは無かったが、ロアにそれを予見することは不可能だ。

さらに仮に他の遠野家の人間に転生していたとしたら遠野志貴も無事でいられる筈も無い。

彼と直接接したが彼がロアだとは思えなかったし、その上遠野志貴はロアと敵対する真祖と共闘してた。

私と真祖はそれぞれロアの存在を感知出来る。

二人が揃って気付かない可能性は限りなく低い以上遠野志貴はロアでないと言う事になる。

だがやはり遠野家以外に転生しているとは思えない。

「何かを見落としている？ならば何を」

暫く思案するが、今ある情報だけでは答えが出ないと判断し新たな本を手に取る。

その本のページをめくっていくと不自然な物を見つけた。

「これは・・・」

中にあったのはページの一部をくり抜いて隠してあった鍵だった。

「どうして止めるんだよ！？アルクェイド！！」

「志貴はここで待ってて。あれくらいなら私一人でも大丈夫だから」

そう言って一人で男を追いかけようとするアルクェイドを今度は逆に俺が止める。

「待てよ！この先に居るのがあいつ一人だとは限らないだろ。二人で行った方が良い」

アルクェイドはロアに関する事を俺に話そうとしなかった時と同じ表情でこちらを見ながら口を開いた。

「でも貴方はアレと戦えるの？貴方は今アレを一体でなく一人って数えた。アレはもう人ではないけど人の形をしている。だから人と同じような感覚を感じてしまうのね。志貴、貴方はそれに刃を向けれるの？」

考えてもいなかった。
実際にあの死者の後を追えば確実に戦いに・・・いや、殺し合いなるだろう。
人の姿をしたモノ自分の意志を殺す。
それは今思えば初めてのことだった。
確かに俺はアルクェイドとネロを殺した。
だけど二回とも自分の意志でとはほとんど言えない。
果たして遠野志貴は自分の意志でそれが出来るのだろうか。

「正直に言って今の私は志貴を庇いながら敵の相手にする余裕はないわ」

それは自分の身は自分で守るしかないと言う事。
そして負ければ待っているのは自身の死。

「確かに怖い」

それは間違いなく本音だ。

「怖いけど、大丈夫だ。言っただろ？俺はお前に協力するって」

その言葉を聞いたアルクェイドは柔らかな笑みを浮かべて言った。

「分かったわ。それじゃあ一緒に行きましょ」

本の中に隠されてた鍵を手にシエルは考える。
わざわざこんな凝った隠し方をしている以上重要な物のはずだ。
そしてだからこそ管理がし難くなる別の部屋のものだとは考えにくい。

部屋の中を見回していく。
中にある家具は本棚以外には机が一つあるだけの殺風景な部屋。
シエルは恐らくはあの机の鍵だろうと予想し近づいていく。
高級感漂うその机を見ると三段ある引き出しの一番上にだけ鍵穴が付いていた。
鍵穴に鍵を挿しゆっくりと回すと、カチャ、という小気味のいい音を鳴らして鍵は開いた。
引き出しを開けると中には幾つかの小物の他に二冊の本があった。
シエルは先ず、二冊の内のより古びた方を手に取り開いた。

「これは・・・家計図ですか」
歴史を感じさせる古い本事態は確かにただの家計図だった。
しかしその内容はある一点において常軌を逸していた。
「先代の遠野槇久の五十歳目前での病死はともかく・・・他のものは・・・」

自殺、発狂死、事故死、他殺、行方不明、死産。
遠野の血を引く者ほぼ全てがこれらの陰惨な最期のいずれかを、それもかなり若い内に迎えている。
呪われてるとしか言いようの無い血筋。
これでは遠野槇久の死因も実際は違うものではないかと疑いたくなる。

シエルは胸の内に湧く不気味な感覚を堪えつつもう一冊の本に手に取った。
開いてみるとそれは先代当主遠野槇久の手記だった。
一枚一枚ページを捲り内容を丹念に確認していく。
それは不定期の日記のように書かれており、内容は自身や家族に対するものだった。
内容を読み進めていく内に先ほどの異常な家計図の理由が分かった。
遠野という血の宿命、その末路。
彼もいずれこの手記に書かれている通りになってしまうのだろうか。
先ほどとは違う、なんとも言えない感覚が彼女を満たしていくが、
再び気持ちを入れ替えページを捲っていく。
そして、彼女は手記に書かれていた新たな事実に今度こそ冷静でいられなかった。

今までただ走るだけだった死者は大きな建物の廃墟にたどり着いたところで走るのを止めこちらに向き直った。
すると待ち構えていたのだろう、次々と全身を死の『線』と『点』で包んだ人々、死者現れる。

「志貴、分かっていると思うけれど自分の身は自分で守ってちょうだい！」

そう言ってアルクェイドは死者の群れに向かって走っていく。
遅れて彼女の後を追うが、間に死者が割り込み分断されてしまった。
目の前に立ちはだかる死者達のの背後では既にアルクェイドが戦いを始めていた。
そしてこちらを向いている死者達も囲むようにじりじりと向かってきている。

「邪魔だ！！」

正面にいる男の左脇腹にある『点』を一突きし殺そうとするが、僅かに上に外れて肉を貫く嫌な感触が伝わってくる。
しかしその程度では死者は止まらない。
腹を刺されてもなお、何事も無いようにこちらに掴みかかってくる。

――――――状況は多勢に無勢、これでつかまったら拙い。

短刀を引き抜きながら一気に距離を開け、もう一度構える。

――――――どうして外れた？今まではそんな事なかったのに。
そう、今までは『線』をなぞって切る時も『点』を衝く時も、理由こそ分からないが正確にかつ容易に出来てた。
ならば何故今になってそれが出来ないんだ！？
――――――違う。外れたんじゃない、俺が無意識に外したんだ。
単純な事だ。
『点』を突く直前にいつもと同じように動いていた体を俺が人の姿をしたモノを殺す事を躊躇って阻害したというだけ。
アルクェイドには大丈夫だと言ったばかりのくせに情け無い。
こちらの葛藤など関係なく死者はゆっくりと、しかし真っ直ぐに向かってくる。
アルクェイドに頼れない以上こいつらを殺さなければこちらが殺される。
「大丈夫だ・・・アレは人間じゃない」
声に出して自分に言い聞かせる。
「だから思い出せ、あの時の感覚を」
アルクェイドを襲ってしまった時の感覚を。
ネロと戦った時の感覚を。
「アレは人間じゃないんだ」
ソウ、アレハイテハナラナイモノ。

――――ドク。

「だから」

ナラバ。

――――ドクン。

「殺す」

コロセ。

――――ドクン！

一際大きな鼓動を心臓が刻んだ瞬間、ナニかが明確に切り替わった。
この眼が、体が、脳が、その全てがただ目の前にいる存在を殺すためだけのものに。

向かってきているのろまな死者達を一通り確認する。
今こちらと向き合っている数はたったの六体だけだ。
退屈過ぎて欠伸がでる。
残りはアルクェイドの相手をしているのだろうが、弱っているとはいえアレが相手ではすぐに全滅するだろう。
質も量も満足できるものではないが仕方ない、これで我慢するしかないだろう。

最も近い位置にいた先ほど仕留め損ねた死者に肉薄し、今度こそ的確に脇腹の『点』を貫いた。
刃が抵抗も無くスルリと入っていった感覚の余韻を感じる前に死者

は塵となって消えていく。
右から抱きつくように別の死者が掴みかかってくる。
先程までの動き嘘の様な速さだが、志貴の速さはその遥か上だった。
死者の体勢が僅かに前のめりになるまで充分引き付けてから素早くしゃがんで腕をかわし、足払いで倒して後頭部にあった『点』を衝き殺した。
それと殆んど同時に上から覆いかぶさる様に別の死者が襲い掛かってきた。
今度は死者が掴む動作をするより速く股から首の付け根までほぼ一直線にある『線』を立ち上がりながら勢い良く下から上に切り裂く。

――――――単純に真っ直ぐ向かってきて掴みかかるだけしか脳が無い。この程度じゃとてもじゃないが楽しめないな、さっさと終わらせるか。

自身の期待を大きく裏切られた志貴はため息をしながら一度大きく距離をとる。

――――――まあ、あんな上玉共を殺ったあとじゃ当然か。

真っ直ぐに一番手前の死者に向かって走りだす。
相変わらず単純に間合いに入った相手を掴もうとする死者の腕を掻い潜り、走り抜けながら左肩の『点』を衝き、同じように四メートル程後方の二人目を腰から真横に伸びる『線』で上半身と下半身を分断する。
最後の一体に相対し、相手の間合いに入る直前に加速する。
そのままこちらが掴まれる前に相手の頭を左手で鷲掴みし、地面に叩きつけてから胸の『点』を衝いた。
音一つ立てずに塵になっていく死者を興味なさげに見下ろしながら

彼女の事を考える。
戦いの結果は見るまでもないだろうがアイツは俺を庇う事が出来ないほど弱っていると自分で言っている。

――――今なら

「・・・う」

――――アレを確実に

「違う」

――――■セル――――

「黙ってろ！」

「きゃっ！？」

「！？」

真横から聞こえた悲鳴に驚いて振り向くとアルクェイドが耳を抑えながら恨めしげに睨んでいた。

「ちょっと！いきなり怒鳴るなんて酷いじゃない」

「俺・・・なんて怒鳴った？」

心の中だけで叫んでたはずの言葉が口に出ていた。
もしかしたらあちらの言葉も声に出ていたのではないかと恐る恐る確認をする。

「違う、黙ってろって。あれって誰に言ったの？私、何も喋ってなかったわよ」

「そうか・・・すまない、お前は何も悪くないんだ。ただ変な事を考えちゃって」

「そう？それならいいわ」

アルクェイドは怪訝そうな顔をしたがそれ以上は何も聞かなかった。聞かれなくって良かったと心の底から思った、思えてしまった。聞かれてしまったら何も答えられないだろう。何せ俺は間違いなく再びアルクェイドを殺そうとしていたのだから。

手記に書かれていた内容を理解した直後、シエルは思わず手に持っていた手記を落としてしまった。

ゆっくりとそれを拾い直して自分が見たものに誤りがないかを確認し、今度は冷静に自身が感じていた疑問が全て解けたことを確信した。

――――――私の予測は当たっていた。間違っていたのは根本的な大前提の方。

自分から全てを奪った仇敵の転生先に確信を得たシエルだったが、その時ばかりは胸中に憎しみも興奮も込み上げてこなかった。

「惨い」

代わりその心を染めたのは手記に書かれていた力を持ってしまった故にあらゆるものを奪われた少女と、何一つ罪の無いのに全てを奪われた少年への憐憫。

――――――それじゃあ彼は。

「こんな時間にどちら様でしょうか？」

陰鬱とした思考に囚われそうになっていたシエルに突如凛とした声がかけられた。

声の主が誰かを理解した時シエルは一つの決意をした。

二つのキョウカイ

突如かけられた声の主は遠野家の現当主、遠野秋葉だった。
部屋の入り口の前に堂々と立つその姿は彼女の年齢に似合わない風格を醸し出していた。

「申し訳ありませんが貴方をこの屋敷に招いた憶えは無いのですが。何の用でしょうか？」

口調こそ丁寧だったがこちらに向けてくる敵意は突き刺さるように鋭い。
まあ、見ず知らずの侵入者が目の前に居るのだから当然かもしれないが。

彼女がロアである可能性はかなり低いと言ってもゼロではない。
戦えばそれがはっきりとするだろうが以降確実に彼女の協力は一切得られなくなる。
今読んだ手記の内容が真実だとするばら彼女の協力はあった方が良いだろう。
さて・・・私がすべき最上の選択は何だろうか？

本来なら様々な選択肢から最も合理的なものを選ぶべきなのだろう。
しかしシエルの頭の中にはある理由から一つの答え以外が浮かばなかった。
その理由さえも合理性からからかけ離れたものだった。
自身でも内心驚きながらもシエルは答えた。

「一つ教えてもらえませんか？これに、この手記に書かれている事は事実ですか」

この一触即発の局面で言い訳や交渉を持ちかけられるのでもなく、有無を言わさず襲われるわけでもなく、ただ逆に質問を返される。予想外の事に一瞬秋葉は呆気にとられてしまうがすぐにいつもの冷静さを取り戻す。

「貴女には関係ないでしょう。もう一度聞きます、何の用でしょうか？」

一際強い敵意を向けられながら答えを得られなかったシエルは暫し考えた後本来秘匿すべき自身の事を語り始めた。

「私は聖堂教会という組織の埋葬機関第七位、シエルと呼ばれています。聖堂教会と言うのは――――――」

死者との戦闘の後、数分辺りを探しただけでアルクェイドは今日の捜索を終わりにすることを提案してきた。

「もういいのか。この辺にはもういないみたいだけど、探せばまだ見つかるんじゃないか？」

「いいえ、もうこの辺からは死者の気配はしないし今夜はもう現れないと思う。だから早くあの魔眼殺しをつけた方がいいわ」

「あ、ああ」

やけに物々しい言い方が気になりつつ眼鏡をかけるのをアルクェイドは呆れた表情で見ていた。

「志貴には自覚が無いみたいだけどその魔眼は貴方の脳にとてつもない負荷をかけているの」

「え！？」

「志貴は『点』が見えるって言ったけれど生物以外にも見える？」

言われた通り再び眼鏡を外し魔眼で辺りを見て初めて気が付いた。見えるモノほぼ全てに『線』は視えるがアスファルトや電柱には『死』そのものである『点』が視えない上に視えている『線』もかなり薄い。

「いや。視えない」

「それは志貴が生物以外、この場合は鉱物の『死』を理解していないからよ」

アルクェイドの言っている事を理解しかねているのを察してくれたのか、より詳細に説明を続けてくれる。

「モノの『死』が視えるということは全ての大本になった『根源の渦』かそれに類するものに脳がつながっているということなの。『

死』を視るにはそれを理解した上で、『根源の渦』の対象のチャンネルにあわせなければならない。志貴は生物の『死』を理解しているから生物の『死』がはっきりと視えていて、逆に鉱物の『死』は理解出来てないから鉱物の『死』が視えないのね。多分志貴は視ようとすれば鉱物の『死』も視えるようになると思う。けど生物以外の『死』を理解しようとすると生物以外にも回線を開いてそれの『死』を理解しようとする事になるわ。この本来ありえない運動は脳に過負荷を起こして最悪、貴方の脳を使い物にならなくしてしまう。早い話が廃人になるってことよ」

結局何を言っているのか殆んど理解出来なかったが、最後の所だけははっきりと分かった。

『死』を視ている際に時々感じる酷い頭痛は脳が悲鳴を上げているからだったのだろう。

「分かった。ありがとうアルクェイド、気をつけるよ。俺も廃人になんてなりたくないからな」

「どういたしまして」

アルクェイドは笑顔で答えたる。

相当無理をしたのか、まだ少し荒い呼吸をしながら見せるその屈託ない笑顔に志貴の中にある罪悪感が疼く。

「それに、志貴の負担の事を除いても普段からその魔眼殺しで隠しておいた方が良いわよ」

「え、何で？」

「単純よ。貴女のその魔眼は余りにも特異過ぎる。もしキョウカイ

の連中に目を付けられたら大変な事になるでしょうね」

魔眼だけに・・・じゃなくて。

「そのキョウカイって何なんだ？」

「そっか、そう言えば志貴はそういうことを知らなかったっけ。キョウカイって言うのは魔術協会と聖堂教会の事。魔術協会は簡単に言えば魔術師達が自分達を脅かすものへの対策と魔術の研究のために創った組織よ。魔術師は基本的に『根源の渦』にたどり着く事を目的にしてるから、それにつながってる貴方の魔眼、厳密に言えば眼球と脳を手に入れるためならどんな事でもしてくるでしょうね。元々人を殺す事なんて気にしない連中のあつまりだし」

「うわぁ・・・絶対バレないようにしないとな。もう一つの聖堂教会ってやつはどんな所なんだ？」

「聖堂教会は言うならば人を外れたモノの天敵、アイツ達は自分達の教義に反した存在を徹底的に排除しようとする集団よ。その執着は最早憑かれてると言っても過言じゃない。こっちに志貴の魔眼の事が見つかってそれが異端だと認められてしまったら、確実に命を狙われる事になるわ、それも執拗に」

つまりどちらにこの眼の事を知られても危ないって事か。

「でも聖堂教会の方は人を外れたモノと敵対してるんだろ。だったら、魔眼の事を隠せば俺たちに協力してもらえるんじゃないか？」

「無理ね」

僅かな間も置かずアルクェイドは即答した。

「アイツ達にとっては私もロアも変わりない。むしろ死徒を生み出す元凶の真祖(私)を優先して敵とみなしかねない。正直会わないで済むなら会いたくないわね」

「成る程。では貴女は私を殺しに来たのですか？」

シエルの所属する教会に関する説明を聞いた秋葉がシエルに向ける感情は敵意を超え既に殺意と呼べるものになっていた。

「いいえ」

即座にシエルは否定したが秋葉は警戒を緩めない。

今この瞬間に戦闘が始まってもいいように自身の能力の媒介である見えない髪を伸ばしていく。

「我々の最大の敵はあくまで吸血鬼です。私は現在ロアという吸血

鬼を探しています」

「それがこの屋敷に忍び込む事に何の関係があるんですか？」

「その吸血鬼は他者に転生するものなんです。転生と言ってもロアとして生まれるのではなく暫くは自身の人格を持って育ちます。しかしある時突然ロアの意識が表面に出て吸血鬼として覚醒し、凶暴化する。そしてこの手記の内容が事実ならば、恐らく巷を賑わせている吸血鬼事件の犯人である今代の転生先はここに書かれていた・・・」

シエルと名乗る女の言っている事は筋は通っている代わりに内容はまともでなかった。

しかし秋葉は彼女が嘘や出鱈目な妄言を言っているとは思わなかった。

何故なら秋葉も、そして恐らく目の前の女もまともなモノでは無いから。

「・・・そうかもしれません、確かに思いあたる節はあります。貴女の言っている事を信用してもいいでしょう。ですがこれは遠野家の問題です。部外者の貴女には関係ありませんしアレがどうなろうと知りません。欲しかった情報はこれで充分ですか？これ以上私達に関わらないというのでしたら屋敷に忍び込んだ事は目を瞑りますから帰ってください」

彼女が何者であろうと関係ない。

秋葉にとって重要なのはただ一つだけ、彼女が遠野志貴にとって害になるか否かだけだ。

これ以上彼に僅かな苦しみも与えたくない。

その為なら肉親であろうと殺す覚悟をしている秋葉はシエルがこれ

で引かないのなら有無を言わさず殺す気だった。

「はい。ご協力感謝します秋葉さん」

軽く礼をしながらシエルは答えた。

これ以上余計な詮索をされて彼に危険が及ぶ事を懸念していた秋葉は僅かに胸を撫で下ろしたが、目的を終えた筈のシエルは帰る様子を見せない。

「最後にもう一つだけよろしいですか？」

「何ですか」

苛立ちを隠しきれない表情で秋葉は内容次第では力尽くで追い払うだけでは済まさないと言外に主張する。

「私と同盟を組みませんか？」

「遠慮します」

彼女と組めばアレを処理するのが容易になるかもしれないが協力が無くとも一人で仕留めれる自身があった。

秋葉が即座に拒否をしたがシエルは構わず続ける。

「早くしないと遠野君にも危険が及ぶかもしれないのにですか？」

最も出てきて欲しくない名前が無視できない言葉と共に出てきた事に秋葉は絶句した。

「彼は恐らく既にこの吸血鬼事件に深く関っています」

直接聞いたわけではないが遠野志貴は真祖からロアの事を聞いてしまっているだろう。
そして彼の性格からしてそれを無視出来るとは思えない。

一方シエルの言葉に同様を隠せない秋葉は言われた事を理解するのが精一杯で何一つ対応が出来なかった。
ただ愕然とする彼女にシエルは問いかけた。

「私と同盟を組みませんか？もし引き受けていただけるのでしたら私の持っている情報を全てお教えすることが出来ます」

「話を・・・聞かせてください」

拒否など出来るはずも無かった。

「分かりました。ではまた明日」

一通り今後の予定を話し合った後去っていくシエルを秋葉は見送る。

――――――律儀に入って来ただろう窓から帰る必要はあるのかしら？

話を聞きながら漸くツッコミを入れれるまで冷静さを取り戻した秋葉はシエルから聞いた話について考える。

志貴が何度も夜に抜け出している事には気が付いていたがせいぜい夜遊びをしている程度だと思っており、こんな事になっていたなんて想像もしていなかった。

話を聞いた限りシエルの言うとおり志貴はかなり危険な状況にいるのだろう。

そうと考える今回の同盟はありがたかった。

「よろしかったのですか？」

廊下から声を掛けてきたのは実は最初からそこに待機していた琥珀だった。

琥珀が部屋の中に入ってくると後ろから同じように待機させてた翡翠も入ってくる。

「ええ、兄さんが深く関っているなら手段を選んでなんていられないわ」

「ですが秋葉様はそれでよろしいのですか？」

翡翠にしては珍しく口を挟んできたが秋葉は揺るがない。

「琥珀。話は聞いていたわね、明日からあの人と共に死者とやらを狩りに行くわ。付いて来てちょうだい。それと翡翠は今まで通り兄さんの世話をお願い。ただし何かあったらすぐに知らせなさい。・・

・あとどうせ聞かないでしょうけど出来れば夜に出かけないように促してみて」

「「はい」」

双子の使用人はそれぞれの思いを秘めながら同時に返事をして下がった。

彼女達はソレを決して口にはしない。

指示を出した秋葉も明日に備えて自室に戻るため廊下を歩いていく。

「シキは私がこの手で殺す」

胸の内の覚悟を言葉にして秋葉は再び決意をした。

薄暗い路地裏で彼女は目覚めた。

何故こんな所に居るのかが思い出せない彼女は動こうとせず、嗚咽を漏らしながらその場でうずくまっていた。

だが完全に混乱している彼女にも一つだけ理解出来た事がある。
肌を刺す異質な寒さが、発狂しそうな程の激痛が、そして何より『あるモノ』をに対する抗えない渇きが嫌でも突きつける現実。
彼女は既に人間ではない。

「ぇぐ・・・助けて・・・ぐす」

彼女を襲う抗えない程の衝動を必死に抑えるが長くはもたない事は彼女自身が良く分かっている。
もしこの自分のものでない衝動に負けた時、自分は誰かを台無しにしてしまうだろう。
だが吐き気がする程の嫌悪感を抱くその行為をしたくないと言う思いだけで堪えるのはもう限界に近かった。

「助けてよ・・・遠野君」

家族よりも友人よりも先に彼の名を無意識に呼んだ時、彼女は一筋の希望を感じた。
ふらふらと立ち上がり、弱弱しい笑顔を浮かべて歩き始める。

「そうだ・・・遠野君だ・・・遠野君なら助けてくれる。この喉の渇きからだって。約束してくれたからきっと」

吸血鬼になってしまった少女――――――弓塚さつきはかつて自分を救ってくれた少年を求めて闇夜を彷徨う。
彼女にはそれ以外に縋る存在がいなかった。

二つのキョウカイ（後書き）

皆様のおかげであと少しでユニークアクセスが１５０００を超えます。
いつも読んでくれている皆様に感謝します。

優くも悲しい記憶

見慣れた暗い光景をいつもと同じ様に見つめていた。
既に自分の意志と言うものが全て枯れる事の無い憎悪で塗りつぶされている。

変わる事の無い毎日を同じように過ごしていた。
だから何一つせずとも堪えられた。
そしてだからこそ僅かなきっかけで十年近く溜め込んだ憎悪は一気に爆発した。

それは勘違いかもしれない。
それは嘘かもしれない。

怒りに狂った自分を冷静に観察してる自分がそう言った。
だがもう止まらない。
もう堪える気にもならない。

全て手遅れだ。
何が間違ってこんな事になってしまったのか分からない。
考えられる限り最悪のカケラ同士が最悪のカタチで組み合わさってしまってしまったのだろうか。
もし一つでも違えばこんな事にはならなかったかもしれない。

・・・くだらない。
『Ｉｆ（もし）』叶わないからこそ『Ｉｆ（もし）』なのだ。
だからせめて、俺はすぐに消えてしまうだろうけど、あの時の頼みを今度こそ果たしてくれ。

――――――七夜（ナナヤ）。

柔らかな朝日に優しく起こされてゆっくりと目を開けると、漸く見慣れてきた自分の部屋の天井が見えた。

「う、うーん」

ここ最近みる不思議な感覚の夢とはまた違う感覚の夢を見ていた。
誰かが誰かに願いを託すどこか寂しい、けれど暖かな夢だった。

そんな夢を見たせいか、遠野志貴にしては驚く程素晴らしい目覚めを迎えた。
いつもこの調子なら翡翠の負担を減らせるのだろうが、こんな事はもう当分ないだろう。
何せ遠野志貴なのだから。

――――――コンコン。

「失礼します」

噂をすれば何とやら。
ここ数日はうなされてる所を起こされて少なからず心配をかけてるはずだから、元気に起きてるところを見せて安心させれるだろう。
そう思い、扉を開けて翡翠が入ってくると同時にこちらから挨拶をする。

「おはよう、翡翠」

「あ・・・おはようございます、志貴様」

やはりと言うか、俺が起きているとは微塵も思っていなかったらしく、翡翠は完全に虚を突かれた表情をしていた。
当然だが彼女に非はなく、この反応をされるのは完全に志貴の自業自得だ。

和やかに挨拶をしたにも関わらず翡翠は心配そうにこちらを見ながら問いかけてきた。

「志貴様、また悪夢を見たのですか？」

「いや、そんな事はないよ」

嘘はついていない。
変な夢は見たが悪夢ではなかった。

「でしたら何故泣いているのですか？」

「え！？」

慌てて自分の頬に触れると確かに涙が今も流れていた。

「やはり悪夢を見たのではないですか？」

先程よりも心配そうな、それこそ翡翠まで泣きそうな表情で食いついてきた。

こうなったら誤魔化すわけにもいかない。

「た、確かに夢は見たけど悪夢ではなかったよ」

「それではどのような夢だったのですか？」

「えっと・・・誰かが暗い部屋で一人昔を思い出す内容だった。多分、そいつの最期の時だったのかな。そいつは昔した約束を叶えてくれって頼むんだ」

約束の内容こそ分からないがきっとそれはその人にとって大切なものだと感じた。

「それが何故かすごく懐かしくて、すごく悲しかったんだ」

ただの夢の筈なのにまるで自身がそう思っているような錯覚を覚えた。

「だから泣いちゃったんだと思う」

「そうですか。それならよろしいのですが」

「えっと・・・そいつなんて奴に頼んでたんだっけ」

思い出せそうで思い出せない名前に四苦八苦してる俺を尻目に翡翠は部屋を出ようとする。
元々俺を起こしに来たのだから当然と言えば当然だ。

「それでは失礼します志貴様」

「ああ、ありがとう翡翠・・・ってそうだ思い出した！ナナヤだ。あいつは七夜（ナナヤ）って奴に頼んでたんだ」

「え！？」

やっと思い出した名前を口にした直後、扉を開けてこちらに背を向けていた翡翠が驚いた顔でこちらを振り向いた。

「ひ、翡翠どうしたんだ」

「あ・・・いえ、なんでもありません。まだ仕事があるので失礼します。」

明らかに動揺した様子で翡翠は部屋を後にした。

「どうしたんだろう？」

着替えてから居間に行くと秋葉と翡翠と琥珀さんが三人で真剣な表情で何かを話していた。

「おはよう秋葉、琥珀さん」

「おはようございます兄さん」

「おはようございます、志貴さん」

こちらの挨拶に秋葉は毅然と、琥珀さんはいつもの笑顔で答えた。
俺が早起きしてる事に驚かないのは翡翠が前もって話していたからだろう。
そうでなければ俺は信じられないものを見たという顔で迎えられるはずだ。
悲しいが確信がある。

「ところで兄さん、今朝も変な夢を見たと聞きましたがほんとですか？」

予想はしてたが早速来たか。

「うん。けど今回は前までと違って気持ちの良い夢だけど」

翡翠が先程の事を秋葉に伝えているはずなので隠す意味も無い。
だから正直に伝えたが秋葉は表情を曇らせてしまった。

「その夢のなかで七夜（ナナヤ）という人物が出たというのは本当ですか？」
「出てきたのは名前だけだけど・・・知っているのか？」
「い、いえ知りません！兄さんの夢に出てきた人なんて私が知っているはずもないでしょう。兄さんの方こそ覚えは無いのですか？」
少し慌てる様だったが秋葉も自覚してるらしく、紅茶を飲んで落ち着きを取り戻そうとする。
「うーん・・・俺の方も分からないな。というか夢で出てきただけだし分かるわけないだろ」
「いえいえ分かりませんよ志貴さん。もしかしたら実在する女性との嫌らしい夢を志貴さんが見てた可能性もあるじゃないですか」
「ぐぶっ！」
「ね、姉さん！？」
「なな、何を言ってるんですか琥珀さん！！」
紅茶を飲んでいた秋葉は激しく咽着込み、翡翠は慌てながらもその背中をさする。
突然の爆弾投下にその場に居た全員がパニックを起こしていた。
そしてその元凶は悪戯っぽくクスクスと笑っている。
「さっき志貴様が見たっていう夢の内容の説明したでしょ」
「ああ、そういえばそうでした」

絶対にわざとだよこの人。

「げほっえほっ・・・そ、それより兄さん毎晩夜中に出かけているみたいですけど、門限については説明したはずですよね？」

「ぐっ」

予想してなかった質問に詰まってしまう。
いつまでも隠しきれるとは思っていなかったがこんなにも早くバレるとは。

「ああ・・・俺の所為で困ってる奴がいて、俺はそいつの手伝いをしているんだ」

「人助けはいいです。ですがそれはわざわざ夜中にやらなくてはならないのですか？」

「ああ」

秋葉も俺も譲る気はないので互いに無言のまま睨み合いのような状態になってしまった。
翡翠と琥珀さんが見守る中一分、二分と沈黙が続く。

以外にも先に折れたのほ秋葉だった。

「分かりました」

「え！？」

「ええ。どうせ兄さんのことだからいくら言っても聞かないのでしょう。もう勝手にしてください」

額に手を当てながら大きな溜息をして秋葉は言った。

「悪い、心配をかける」

「まったくです。巷じゃ吸血鬼殺人なんて物騒な事が起きてるんですから本当は屋敷から出ることも遠慮して欲しいんですから」

「おいおい。それじゃあ学校にも行けないだろ」

「大丈夫です。学校に行かなくても兄さん程度の学力なら私でも教えられますから」

「ははは。冗談がきついぞ秋葉」

「え？私何かおかしな事を言いましたか？」

「何かって・・・なあ二人とも」

「「・・・」」

おかしいな。

翡翠と琥珀さんが俺と目を合わせようとしない。

「よく分かりませんがとにかく気をつけて下さいね、兄さん」

「ああ。約束するよ。必ずこの家に帰ってくる。だから心配しないで待っててくれ」

そう言って秋葉の頭に手を乗せて撫でてやる。

しまった。

さすがに子供扱いしすぎたな、秋葉が真っ赤になっている。

怒られる前に急いで手を退けると

「あ」

と秋葉は何故か少し悲しそうな声を出した。

「どうかしたか？」

「い、いえ。何でもありません」

「秋葉さま。そろそろお時間の方が」

本来全寮制の浅上女学院に家から通っている秋葉は俺よりも随分早く出かけなくてはならないのだ。

「もうそんな時間なの、分かったわ。それじゃあ兄さん行ってきます。・・・さっきの約束、絶対守ってくださいね」

「少しは兄を信じろよ。行ってらっしゃい秋葉」

「はい。行ってきます」

そう言って秋葉は琥珀さんを伴って部屋を出た。

随分と上機嫌だったな秋葉の奴。

「さて。翡翠、俺もそろそろ朝ごはんが食べたいんだけどもう出来てる？」

「はい、ご案内します」

朝食にしてはかなり豪華な食事を食べ終わる頃、秋葉の見送りや雑務を終えた琥珀さんが戻ってきた。

「いやはや志貴さんもやりますね」

「何がですか？」

感心されるような事なんて何もしていないはずだ。

「・・・はあ、もしかしなくても天然ですか。秋葉様可哀想に。そんな事ばかりしてると志貴さんいつか後ろからブスっと刺されちゃいますよ」

と思ったら今度は呆れられた。

俺が一体何をしたと言うんだ。

「姉さん。志貴様をからかわないで」

「あはは、怒られちゃいました」

「怒られちゃいましたじゃないでしょう！」

「もうそんなに怒らないでよ翡翠ちゃん」

この二人は本当に仲が良いな。

息の合った掛け合いを見て自然とそう思った。

普段あまり見れない二人のやり取りを見てつい顔が綻んでしまう。

「ほらほら、志貴さんに笑われちゃったじゃない」

「え！？あ・・・お、お見苦しい所を失礼しました」

琥珀さんを注意するのに夢中で俺が居たことを失念してた翡翠は顔を真っ赤にして頭を下げた。

「気にしないでくれ。何だか懐かしくなっただけだから」

昔に同じような光景を見た事がある。

「昔さ、俺も今の琥珀さんみたいに怒られた事があったなって思って。何で怒られたんだっけ・・・そうだ確か外に出ようとしない俺に・・・えっと・・・誰が叱ってくれたんだっけ・・・痛っ！」

もう少しで出てきそうだったと言うのに突然の鋭い頭痛が邪魔をし

た。

「大丈夫ですか？志貴様」

「ああ、大丈夫だよ。少し頭痛がしただけだから。にしてもタイミングが悪いな、せっかく思い出せそうだったのに。って、翡翠どうした？」

見ると翡翠は悲しそうに俯いてしまっている。

「大丈夫か？」

声を掛けても翡翠は口をきつく噤んで答えない。

「志貴さん、そろそろ時間じゃないんですか？翡翠ちゃんは私に任せて学校に行ってください」

「でも」

「大丈夫です。それに志貴さんにあまり心配されると翡翠ちゃんが困っちゃいますから」

琥珀さんの言うとおり、俺が居ても翡翠が気を使ってしまうだろう。

「・・・分かった。でも俺に出来る事があったら言ってください。必ず協力します」

「はい。その時はお願いします」

その返事を聞きながら遠野志貴は自分の部屋に荷物を取りに戻って

行った。
残された二人の使用人は志貴が見えなくなって漸く口を開いた。
「ごめんなさい姉さん」
「いいのよ翡翠ちゃん。でもどうしたの？」
「それは・・・」
「・・・私達がまだ子供の頃の事？」
同じ血を持つ双子の成せる業か、琥珀は翡翠の僅かな反応からその心中を見抜いた。
指摘された翡翠は一度驚いた表情をしたが、優しい笑顔で真っ直ぐ見てくる琥珀を見て諦めた様に話し始めた。
「・・・志貴様が言っていた叱った人って私なの。それを憶えててくれた事が嬉しくて、あんな事になったのが同じくらい悲しくて、何より無邪気だった自分が腹立たしくて・・・・・・ごめんなさい・・・姉さん」
謝罪をする彼女の瞳から静かに雫がこぼれていく。
それを隠すように琥珀は翡翠を抱きしめた。
「いいのよ。翡翠ちゃんは何も悪くないんだから」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3849m/

月姫－幻夢の満月－

2011年6月22日20時35分発行